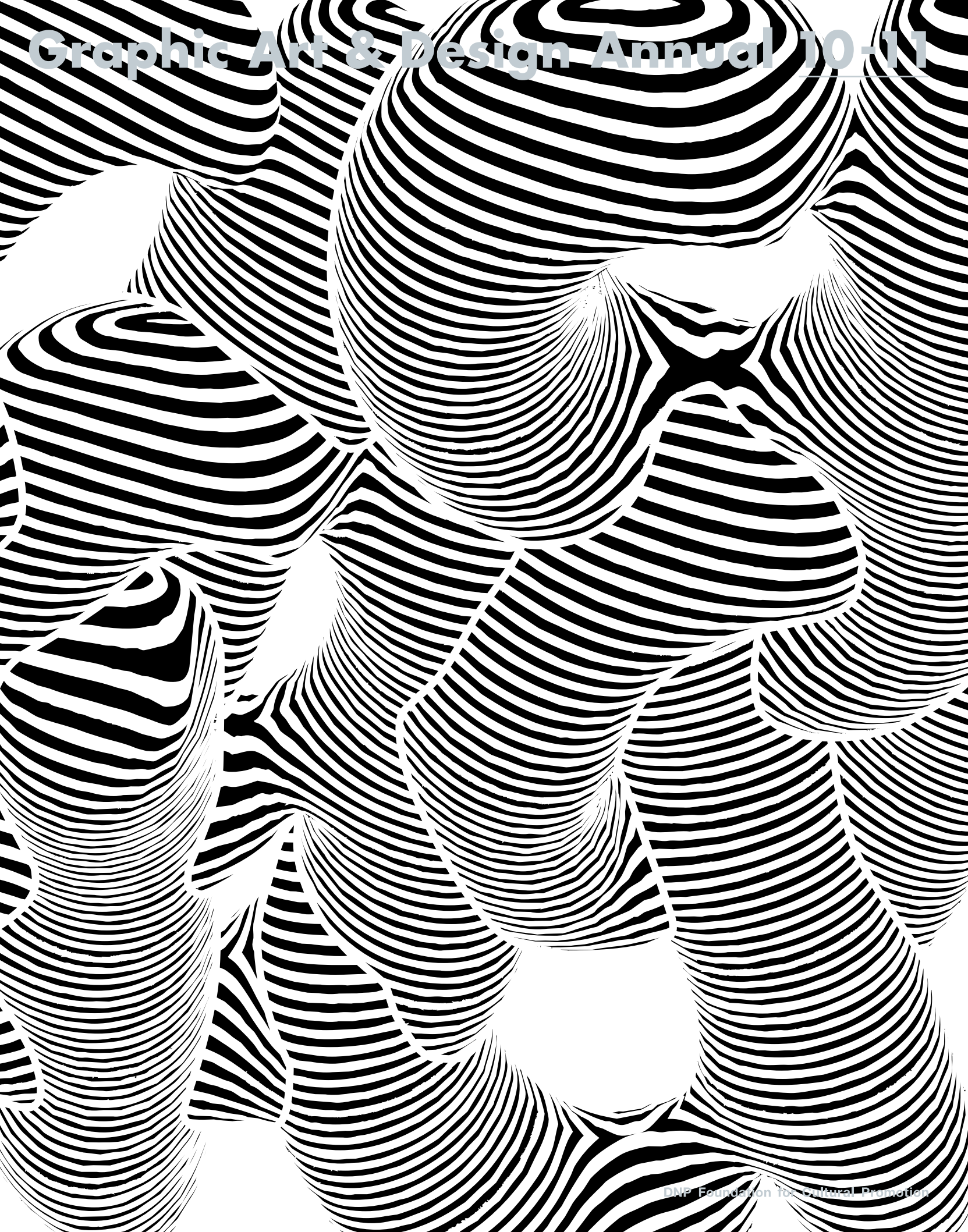
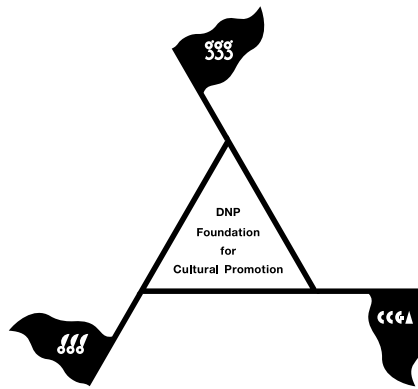


Graphic Art & Design Annual 10-11



Graphic Art & Design Annual 10-11



[表紙デザイン]

わき立つ豊かさ

多くのデザイナーがやっていることですが、
私もDNPの展覧会場の略称、ggg、ccga、dddを基本要素として用いました。
これらの文字は相互に浸透し、表紙からはみ出さんとしています。
アニュアルレポートの内容の豊かさと、
3つのギャラリーあるいは美術館のわき立つ、実り豊かな共存を表現しているのです。

ラルフ・シュライフォォーゲル グラフィックデザイナー

[Cover Design]

Bubbly Opulence

Like many designers,
I used the letters of the abbreviations of the DNP exhibition venues,
"ggg", "ccga" and "ddd" as basic elements.
In order to illustrate the opulent content in the annual report
and the bubbly, procreative coexistence of the three institutions,
the letters interpenetrate each other and hardly fit on the cover.

Ralph Schraivogel, Graphic Designer

Graphic Art & Design Annual 10-11 ggg ddd CCGA

Publication: DNP Foundation for Cultural Promotion

DNP Ginza Building, 7-7-2 Ginza,

Chuo-ku, Tokyo 104-0061

Phone: +81 3 5568 8224

Planning & Editing: ginza graphic gallery

Art Direction: Shin Matsunaga

Design: Shinjiro Matsunaga, Moemi Kiyokawa

Photography: Mitsumasa Fujitsuka (ggg),

Kiyotoshi Takashima (ddd: phono/graph),

Ryota Sakai, Akihito Abe, Koji Takanashi (ggg Gallery Talk)

Translation: Rei Muroji, Office Miyazaki Inc.

Cooperation: Shoji Usuda, Koichi Kawajiri

Printing & Binding: Dai Nippon Printing Co., Ltd.

Contents

目次

はじめに	5
北島 義俊 (DNP文化振興財団理事長)	

序論	6
グラフィックデザインはサバイブできるか?	
石岡 瑛子 (デザイナー)	

1 展示事業	15
ギンザ・グラフィック・ギャラリー (ggg) 2010-2011	16
dddギャラリー 2010-2011	42
CCGA現代グラフィックアートセンター 2010	52

2 教育・普及事業	61
ggg, ddd ギャラリートーク	62
出版活動	73
ラルフ・シュライフォージェル 特別講演会&ワークショップ	74

3 アーカイブ事業	77
DNPグラフィックデザイン・アーカイブ	78
『3GDアーカイブ』ポスター寄贈プロジェクト始動	81

4 国際交流事業	83
AGI日本事務局サポート・AGI総会ポルト2010	84
国際会議「東西の文字における身体性と精神性」	86
日本-イタリア国際交流事業「現代日本のポスター100」展	87

5 研究助成事業	89
2010-2011年度助成実績	90

展覧会概要	91
展覧会一覧	96
ギャラリー概要	104

Foreword	5
Yoshitoshi Kitajima (Chairman of the board of directors, DNP Foundation for Cultural Promotion)	

Introduction	6
Can Graphic Design Survive ?	
Eiko Ishioka (Designer)	

1 Exhibitions	15
ginza graphic gallery (ggg) 2010-2011	16
ddd gallery 2010-2011	42
Center for Contemporary Graphic Art (CCGA) 2010	52

2 Education & Enlightenment	61
ggg, ddd Gallery Talk	62
Publications 2010-2011	73
Special Event: Ralph Schraivogel Lectures and Workshop	74

3 Archiving	77
DNP Graphic Design Archives	78
"3GD Archives" Poster Donation Project Gets Under Way	81

4 International Exchange	83
Support to Japan Office of AGI, AGI Congress in Porto 2010	84
Body and Spirit in Writing in the East and West	86
Graphic Design dal Giappone, 100 Poster 2001-2010	87

5 Research Support	89
2010-2011 Financial Support Activities	90

Review of ggg, ddd and CCGA 2010-2011	91
List of Exhibitions 1986-2011	96
Galleries' General Information	104

Foreword

はじめに

2011年3月に発生した東日本大震災によって失われた多くの尊い命に深い哀悼の意を捧げますとともに、被災された方々に心からお見舞いを申し上げます。

今回の震災で、福島県須賀川市にあるCCGAでは、収蔵作品は無事でしたが、建物の一部が損傷しました。一時的に閉館することになりましたが、復旧に努め、6月上旬には平常通り再開することができました。

2010年度のギンザ・グラフィック・ギャラリー(ggg)では、国連が定める「国際生物多様性年」に合わせ、海と山をテーマにした「海と山と新村則人展」をはじめ、12回の企画展を開催しました。

また、dddギャラリーでは5回、現代グラフィックアートセンター(CCGA)では、3回の企画展を開催しました。

なかでも、DNPのオリジナル書体「秀英体」の生誕100年を記念した企画展「秀英体100展」は、東京・大阪を巡回し、いま福島で開催していますが、高い評価と大きな反響が寄せられています。

アーカイブ事業としては、永井一正氏からポスター全作品をご寄贈いただき、新たに「永井一正アーカイブ」としてCCGAに収蔵しました。また、田中一光氏、福田繁雄氏、永井一正氏の主要作品をスイスのチューリッヒ造形美術館など海外2ヶ所、国内2ヶ所の美術館に寄贈しました。

今年の3月、gggは25周年を迎えました。また、7月のggg企画展は、300回目を数えます。このように、さまざまな点で私たちの文化活動の節目となります。これを機会に、今後の活動のあり方について、多方面からのご意見をいただきながら活動を推進して参りたいと存じます。今後とも、皆様のご理解とご支援をお願い申し上げます。

I wish to take this opportunity to express my deepest condolences for the souls of the many individuals who lost their lives in the Great East Japan Earthquake of March 11, 2011, and I offer my heartfelt sympathy to all victims of this terrible tragedy.

The devastating earthquake inflicted structural damage on the Center for Contemporary Graphic Art (CCGA) in Sukagawa City, Fukushima Prefecture. Fortunately, the collections were unscathed. After temporary closure in the aftermath of the temblor, the Center was able to resume normal operation in early June thanks to the efforts of many individuals.

During the 2010 fiscal period, ginza graphic gallery (ggg) mounted a total of 12 exhibitions. Among those of particular note, the October exhibition titled “Seas and Mountains and Norito Shinmura,” which had the seas and mountains as its theme, was coordinated with the United Nation’s “International Year of Biodiversity.” The year also saw five exhibitions mounted at ddd Gallery in Osaka and three at CCGA. An exhibition mounted at all three venues—initially Tokyo, then Osaka, and at CCGA as of this writing—is “Shueitai 100,” an event to commemorate 100 years since the introduction of Shueitai, an original typeface created by Dai Nippon Printing. The show has been well received and highly regarded at all venues.

In conjunction with archiving operations, 2010 saw a generous donation by Kazumasa Nagai of his complete poster works. The works have now been compiled into an archive in the designer’s name at CCGA. During the year we also donated Mr. Nagai’s major works, as well as those by Ikko Tanaka and Shigeo Fukuda, to two art museums in Japan and two overseas, including the Museum of Design, Zurich (Museum für Gestaltung Zürich) in Switzerland.

In March 2011 ggg celebrated its 25th anniversary, and in July the gallery hosted its 300th exhibition. In this way, this year marks a milestone in our cultural activities in several respects. On this occasion we eagerly invite opinions and suggestions concerning where and how we should direct our activities going forward. Taking these into consideration, we will continue to promote cultural activities in the years ahead.

We ask for your continued interest and support.

DNP文化振興財団 理事長
北島義俊

Yoshitoshi Kitajima
Chairman of the board of directors, DNP Foundation for Cultural Promotion

グラフィックデザインはサバイブできるか？

石岡 瑛子

デザイナー

——いまNYで話題のブロードウェイミュージカル「Spider-Man」のお話から。昨日(2011年6月初旬)、公開リハーサルを観せていただいたのですが、すごいスタンディングオベーションでした。

石岡 もうね、すごいんですよ。世界中から観に来てるし、充分エンジョイしてまた何度も観に来るって言う人が多いんです。このプロジェクト興行成績はバンバン行きますよ。「Spider-Man」は歴史的にも法外なプロジェクトだと思います。7000万ドル(約56億円)もの制作費をかけて、ドラマとサーカスとオペラが合体したようなこれまでにないミュージカルを創ろうという壮大な試みですから。音楽はU2のボノ、ディレクターはジュリー・テイモアです。ジュリー・テイモアはブロードウェイで歴代最高の興行収入記録を出したミュージカル「The Lion King」を演出した人ですね。私が口説かれたのは4年くらい前ですが、資金もかかっているし、なによりベストチームということで公開の何年も前から騒がれていました。

——石岡さんは劇中で使われるコスチュームを担当されたということですが。

石岡 ええ、全部やりました。なかでも悪役はノリにノリまくってデザインして、ジュリー・テイモアもとても気に入ってくれました。「Swiss Miss」というからだか金属でできた女の悪役は、コミックブックの原作には登場しない私のオリジナルで、これもすごくウケてます。悪役は最初の2年くらいでほとんど制作も終わっていたのですが、逆に難しかったのはふつうのコスチューム。主役のカップルのコスチュームなんかはふつうじゃないと困るわけですよ。これも山のように私がデザインしたんですけど、いろいろ意見の介入が多くて決まらない。私はいかに特殊なコスチュームのデザインにしか興味がないのかということを思い知らされましたけど。

スパイダーマンの胸のマークもデザインしました。これは純粋にグラフィックデザインの仕事ですね。オリンピックの仕事で北京にいたときに向こうから30案くらい送って、その中からジュリー・テイモアがこの一点っていうのを選んだんですね。30案、大変ですよ。片方で北京オリンピックをデザインしながらですから。

——お話を聞くだけにすさまじい仕事ですね。

石岡 「Spider-Man」は法外にお騒がせなプロジェクトでもあったんです。これまでもいろんなアクシデントがあったんですが、今年になってジュリー・テイモアが解任されました。彼女の演出ではストーリーが観客にわからないという理由で。ブロードウェイのミュージカルの客層はファミリーや観光客が圧倒的に多いでしょう？言ってみれば大衆文化で、そういう人たちにウケるようにしなきゃいけないんです。その意味では彼女の創るものはセンシユアルで暗いし、物語も複雑なんですね。私はああいう大人の深い話やめくるめくビジュアルの世界がすごく好きだったんですけど、ウケなければ興行的に成り立ちませんから。いつも言うようにアートとコマースのマリッジはとても難しい。それにしてもジュリー・テイモアを首にしてしまうブロードウェイはすごいでしょ。

だから、それを放棄するアーティストも多いと思うんです。もうやってられないから芸術のほうにいっちゃう。でも、私は昔からそこにこだわってるんです。気取った特殊なサロンの観客ではなく、ふつうの人たちに「ワオ！」って喜んでもらいたい思いがあります。それで広告をやったんだと思うし、アメリカに来てからもそこを考え続けています。

それは私だけじゃなくて、ジュリー・テイモアやこのプロジェクトに挑戦したすべてのアーティストたちがそうで、みんなそこで一番苦しんだわけです。あっちこっちから色んな要求が出てきたときに、それも飲みこみながら諦めないで自分の成し遂げたい表現をやる。そうしないと、大きなシステムの中で最後に自分が勝者になることはできないですから。それにしても私、厳しい世界でよく生き残ってきたなあ(笑)。

——このインタビューのテーマは、石岡さんがいまおっしゃった「生き残る」ということです。デジタル化の波の中で、日本のグラフィックデザインは厳しい状況にあります。その中でどうすればデザイナーはサバイブできるのか？という話をおうかがいしたくて。

石岡 アメリカでも、もう紙媒体のデザインはさんざんですからね。一般の世界から紙は消えつつあります。地下鉄に乗っても新聞の「New

York Times」を広げて読んでいる人はとても少なくなってしまったし、Barnes&Nobleのようないい書店ほどつぶれています。その一方で、私の作品集を「App Bookで出しませんか?」というオファーが来たり。もうちょっと時間が取れるようになれば考えてみようと思ってるんですけど。私自身は紙が大好きだし、紙で考えてきた時間は至福の時間でしたから、すべてをコンピュータナイズするのは体質に合わないのですが、デジタル化の波を自分の力で何とかできるようなもんじゃないとつくづく痛感しますね。

このまま行けばグラフィックデザインは消滅するかもしれない。依頼主からもデザイナーはいらないんじゃないかと考えられて、どんどん淘汰されていくんじゃないでしょうか。依頼主はソフトを使えますから、自分たちでもできるんじゃないかって錯覚をする。だから50代以降のデザイナーだともう仕事がない人が多いし、若い人でも突出した仕事をしないとオファーは来ない。じゃあどうやったら消滅しないでいられるのか? と言えば、やはりグラフィックデザインの本質をデザイナー自身が掘り下げてみる必要があると思うんです。

振り返ってみると、私は日本でグラフィックデザインといわれる分野の仕事をしていたときも、しょっちゅう疑問を持っていたわけですね。自分が考えてるグラフィックデザインはみんなの考え方とはちょっと違って、世の中をガツと攪拌できるような仕事でデザイナーでもできるんじゃないかという野心がありました。「グラフィックデザインって本当にこれでいいの?」と自問し続けてきたところがあるんです。

私には表層的に綺麗なカッコいいものって中身が空っぽに見えるんですよ。そういうツルツルピカピカなものをデザインミュージアムに飾っても、社会を変える原動力にならないと思います。きつい言い方をすればある種のエリート意識で無意味なことをやっているんじゃないかと。だから、近頃アメリカの若いデザイナーの中には、第三世界の生活を少しでも改善するために水を浄化する装置を開発しようとする人たちが始めてたりもしていますし、オバマはハーバードを出るとすぐにスラムに飛び込んで、そこの人たちがまともな生活ができるような活動をやったわけですけど、そういう考え方がデザインにも必要です。

もちろん、そういう作品を学校の課題みたいに展覧会で見せて終わり

じゃ結局ツルツルのデザインと同じことになってしまって意味がないし、なにより社会貢献だけでは食べていけないわけだからビジネスとの両立が課題ではあるけど、スタートラインとしては面白い意味のある方向性ですよ。

——日本でもソーシャルデザインは注目され始めています。そもそも「デザイン」という言葉のカバーする範囲が広がっていますね。

石岡 あっ、それは素晴らしい。希望が見える。いま私が考えるのは、グラフィック、インダストリアル、アーキテクト、インテリアといったデザインの境界線はもうなくしたほうがいいということ。私自身は前からそういうものって頭の中になんですけどね。巨大なシステムの中で仕事をするためにそういう肩書きを名乗りはするけれど、自分を“コスチュームデザイナー”だと思ったことないですから。

そういうタイトルが重要なのではなくて、世の中が「ワオッ!」と思うようなデザインをいかに創るかにつきますと思います。例えば、フランク・ロイド・ライトはグッゲンハイム美術館を頼まれたときに、オープンカーでNYの街を視察して「なんでこんな四角い箱しか作らないの?」って言ったわけですよ。周囲の反対をおして円形の建物を実現した。依頼主のペギー・グッゲンハイムも素晴らしい。必要なのはそういうエネルギーなんです。そのときライトは90代ですよ? すごいと思いますね。年齢とともに能力が上がっていくわけで、年寄りが新しいものを創れないっていうのは、まったくの嘘だと思う。

——石岡さんも仕事が途切れることがないですね。この数年で言っても、北京オリンピックの開会式や映画3本(ターセム・シンの「The Fall」「Immortals」「Snow White」)、ブロードウェイミュージカル「Spider-Man」など常に新しいビッグプロジェクトに飛びこんでいる。※「Immortals (インモータルズ 神々の戦い)」は2011年、「Snow White (白雪姫)」は2012年公開予定。

石岡 不思議なことにリスクを背負ってでも私と仕事をしてみたいと思ってくれる人がいて、それがチェーンのように続いていってるんです。時代を超えたもの、古くならないものを探そうとしている人がいるんですね。

いまターセムとはハリウッド映画「Snow White」をやってるわけですが、彼なんかは「Eikoがやらないんだったらオレはやらない」とはっきりスタジオに言ってくれますからね。そうなるについこっちも頑張っちゃうみたいなのがあります。依頼者と仕事を受ける側の情熱みたいなもののぶつかり合いがスパークして素晴らしい仕事生まれるんですよ。

やっぱり、なにか燃えたぎるものがないとダメなんじゃないですか。「これがなかったら自分は生きてても意味がない!」くらいの情熱ですね。若者でもオレはTwitter やらないぞと言うぐらいのガッツを持ってほしい。みんなやってるからオレもやらないとみっともないかな? というのでブログが流行ればブログ、Facebook が流行ればFacebook って、流行を追う。確かに面白いわけですが、それをやっているだけで毎日何時間も貴重な時間を失ってしまいますから。1日は24時間しかないわけで、出来るだけ自分だけで静かに考える時間を作るべきだと私は思うし、そこでどうしたらよいかということを常に考えてないと、ただのデザイン道具扱いを受けて流されてしまう。で、ある日「え!」と思ったときにもう仕事もないと。それでは残念ですから。

——石岡さんの燃えたぎるパワーはどこから湧いてくるんでしょう?

石岡 ようするに仕事が面白いわけです。映画なんてエキサイティングですからね。ひとりの能力だけでなく、演出家、音楽家、脚本家はもとよりCG、セットデザイナー、パフォーマー、アクター。様々なフィールドの才能がぶつかりあって燃焼していく。コラボレーションで自分の能力以上に表現出来ていくってことがあるわけです。いろいろ大変なことがあっても、最後みんな「やった、できた!」という創造の旅みたいなものには魅力があります。

そういった創造の旅の途上で、切磋琢磨しながらいろんなものを吸収していく、あるいは提供していく。そして出来上がっていくものがデザインというのが私の状況です。ようは「今日、面白かったなあ」っていう1日を過ごしたいってことかな。もちろん、頭抱えて「どうしよう?」なんて日もある。天気と同じように、暗い日や灰色の日もあるんだけど、晴れた日がパッとくると「ウォ!」ってなるじゃないですか。

そうなるためには、もっと危険を冒して挑戦するべきですよ。私が日本の仕事を全部やめてこっちに来たときには、何の契約もなかったんです。自らその状況を選んだんですね。そういう地点に立たないと、自分が本当に次に何がやりたいのかが見えないと思って。ゼロの状況に自分を置いたんです。日本を出る前に、亀倉雄策先生や田中一光さんたちが最後の晚餐をしてくださってね、「いやあ、石岡瑛子はどうせ明日帰ってくるよ」なんておっしゃってたけど、「絶対に帰りませんから、私」って言って。何かにしがみついて離さないしつこさも必要なんです。

——そういう気力、精神力の部分と実際に生まれるものはどのように関わっているんでしょうか。

石岡 それはミステリーなんです。おそらく長いあいだ生きて来た時間の積み重ねの中で、からだの中に溜めこんだものが財産になってるんでしょう。自分が見てきたもの、創ってきたもの、触れたもの、色々なものをひくくめて、年齢が高くなればなるほど豊かなものがからだの中に取りこまれている。私のオリジナル性や時代を超えたものはそういうところから出てくるんでしょうけど、論理化は難しい。すべてが試みの途中ですね。

だから若い人にアドバイスするとすれば、まず一番大事なことはよいものをたくさん見て、何が優れた仕事なのか、どういうことが素晴らしいかっていうことをつかんで基礎をつくってほしい。そうしないと判断基準が育たないわけです。デザイナーはまず自分を徹底的に鍛えないといけないというのが私の考えです。そこはアスリートと同じなんです。とにかくデザインが好きじゃないと長距離ランナーにはなれないんじゃないですか? 私が尊敬するのは長距離ランナーデザイナーですから。

そう思ったのにはきっかけがあって、私が芸大の学生のときに東京で世界国際デザイン会議が開かれたんです。ポール・ランドにハーバート・バイヤー、ソール・バスといったグラフィックデザイン界のきらめくスターたちが来日しました。若い私にはそういうキラ星のような人たちの話はよく理解できなかったのですが、バイヤーはそのとき確か60代だったんですが、当時の私には70代くらいの印象でした。け

れどももうかくしゃくとしていてカッコよくて、私は70歳くらいになっていい仕事ができるような人生を送っていきたいと決意したんですね。若いときにぱっと華やかに生きて散るのもいいけど、自分は長距離ランナーを選ぼうと。で、いまだに25歳くらいの心境でやっているわけです。

—— お話をうかがっていると、重要なのはデザインというフィールドというよりも、結局は人なんだろうなというふうに思えてきます。

石岡 そうだと思います。だから、デザイナーはもっとどんどんジャンルを横断し、デザイナー以外の人たちとも交流して、自分のからだの中に新しいエッセンスを溜めこむことが必要ですよ。一人でぼーっとデザインの本を見て、これちょっと面白そうってことで真似してもダメなんです。

デザインというのは結果としてやっている職業で、デザインをやらなくても存在感があるというか、人間としてどうあるかってことが基本的には必要なんじゃないかって思いますね。その人のメッセージがデザインを通して世の中に出て行くわけですから。そこを勘違いして、デザイナーはカッコいい仕事、金になる仕事みたいな動機でやっていると、当然生存は難しくなっていく。

そのためには、まず人物が出てこなきゃダメですね。明治維新の志士たちのような。坂本龍馬のようなデザイナーが出てきたら惚れちゃうでしょう？(笑) 正義感があって自己犠牲をはらってでも国をよくしようとする。そういう精神に人はほだされるんです。そう考えると、デザイナーというタイトルでなくなってもいいんじゃないかとさえ思います。私はデザインをやっているながら、いつもデザイナーというタイトルが面映くてしょうがない。自分のアイデンティティとしては、やはり「Eiko Ishioka」をしっかり守りたいっていうところはあります。

—— 結局弱くなってしまっているのは、いまおっしゃった個人のアイデンティティかもしれません。

石岡 デジタル化によってそういうふうになっていく、それが加速されていくんです。だれでもできそうなことをだれもがやるようになって

てしまう。突出して面白いことをやる、革命的なテーマに取り組む、叩かれても良いからやり続ける、という“侍”はいまは日本にもアメリカにも、グラフィックデザイン界にはいない気がします。だから依頼主はデザイナーをわざわざ雇わなくていいということになるんです。グラフィックデザイナーにとっては不幸な時代に向かっている気がするから、沈没する前に危機感を持ってですね、何がやりたいかを考えていく必要があるでしょう。その野心さえないと言われてしまうと、もう助言のしようがないのですが。

もしかするとデザインというのは密かな仕事なのかもしれません。例えて言うなら影武者みたいな。それをグラマラスな仕事なんだと思うと、間違ってしまうのかもしれない。デジタル化すれば生存できるかと言うと、そんなに甘いものではないと思うんです。でも、デザインを根本から立て直してみたいというような情熱で突き進んでいけば生き残れると思います。

(聞き手・テキスト：河尻亨一)

Can Graphic Design Survive?

Eiko Ishioka

Designer

— I'd like to begin by asking you about *Spider-Man*, the Broadway musical that all New York is talking about these days. I attended a preview performance yesterday*, and the show got quite a standing ovation.

(* This interview was conducted in early June 2011.)

"Reaction has been absolutely amazing. People are coming from all over the world to see the show, many of them enjoying it so much they go again and again. The show's definitely going to be a huge hit. I also think *Spider-Man* is a project of outlandish historical scale. Over 70 million dollars has been spent in production costs in a grand experiment to create a musical unlike any before it, a musical that combines drama and circus and opera. The music was written by Bono of U2, and the director is Julie Taymor, who produced the musical *The Lion King*, whose box office receipts set a new record for a Broadway show. I was approached to do *Spider-Man* about four years ago. A great deal of funds has gone into its production, and with its ideal creative team it's been generating a lot of buzz even years before opening."

— You were in charge of the stage costumes, correct?

"That's right. I did all the costumes. I really got totally caught up in it, especially in designing for the villains, and Julie was quite pleased with the results. One of the villains, Swiss Miss, a female with a body made of metal, doesn't appear in the original comic books; I conjured her up myself, and she's really made quite a hit with the audiences. Creating the costumes for the villains was virtually completed within the first two years or so. What I found more difficult was designing the 'normal' costumes. The costumes worn by the leading couple, for example, have to be normal or things just won't sit right. Here again I came up with mountains of proposed designs, but so many people had their two cents to put in, it took forever to come up with the final designs. One thing I came to see from the whole experience is just how much I'm interested in designing special and unique costumes only.

"It was also me who designed the mark on Spider-Man's chest—that was a purely graphic design work. I worked up about 30 designs while I was in Beijing doing work in preparation for the Olympics, and Julie chose which it would be. Coming up with 30 designs wasn't easy, you know, as I did it while I designed for the Beijing Olympics."

— Just hearing you describe it makes it sound like a terribly demanding job.

"*Spider-Man*'s also been an incredibly troubled project. First, a variety

of accidents have occurred; then this year Julie Taymor was let go. The excuse given was that under her direction the audience wouldn't understand the story. With Broadway musicals, families and tourists make up an overwhelming share of the audience; in other words, musicals are a form of entertainment for the masses, and shows have to be tailored so they'll be well received by such audiences. In that sense, Julie's work is sensual and dark, and her storyline is complex. I personally love such deep, adult stories and dazzling visual realms; but unless it's well received, a show can't make it financially. As they always say, art and commerce don't make good bedfellows. After all, even Julie Taymor got canned on Broadway.

"This is why, I think, many artists give up on the commercial aspect and, out of frustration, opt to go with art. Personally, though, I've always been a stickler about this, ever since the early days. Instead of wanting to please some special audience in a snobbish salon somewhere, I've always wanted to make ordinary people go 'Wow! That's amazing!' That's why I got into advertising, I think, and that's remained my intention ever since coming to the States, too.

"I think that's where everyone involved in this project—not just me but also Julie Taymor and all the artists—have struggled most. Every time a demand of some kind has been made from somewhere or other, while complying with that demand we've had to express ourselves in the way we want to achieve, never giving up. Otherwise there's no way we can come out a winner in such a big system. If I do say so, though, how lucky I am to be surviving in such a severe world!"

— The theme of this interview is precisely what you just spoke of: survival. Today, with the whole world moving irreversibly into the digital age, the situation for graphic design in Japan is very severe. I'd like to ask you, amid these circumstances what can designers do to survive?

"Design of paper media is already having a really rough time here in the States, too. Paper's slowly disappearing from the world in general. When you go on the subway, the number of people reading *The New York Times* has fallen tremendously, and even good bookstores like Barnes & Noble are going out of business. Meanwhile I've been approached to offer a collection of my works as a Book App. I'm thinking of giving the offer some consideration once I have a bit more time to put into it. Personally I'm very fond of paper and the time I've spent thinking on paper has been sheer bliss, so it doesn't sit right with me for everything to be computerized. But that said, the move to digital isn't something I have the power to do anything about—this is something I'm painfully aware of.

"If things continue this way, graphic design may vanish altogether. Clients these days are suggesting that a designer isn't needed, so designers may be rapidly getting weeded out. Then too, clients themselves know how to use the software, so they are under the misapprehension that they can do the job themselves. That's why there are so many designers in their fifties and older who already have no work; and even with young people, unless they do truly outstanding work, they're getting no offers. So what can be done to keep graphic design from disappearing? I'd say designers themselves have to probe deeply and come up with what graphic design in essence really means.

"Looking back, even when I was still in Japan working in the field of graphic design, I had frequent doubts. Somehow I saw graphic design in a different way from everybody else. I had an overpowering conviction that designers are capable of doing work that could shake the world to its foundations. And I kept asking myself if the kind of graphic design I was doing was really enough.

"To me, things that are neat and pretty on the outside seem empty on the inside. Slick and flashy things like that may be OK as exhibits to be placed in a design museum, but they can't serve as a driving force for social change. It may sound harsh but creating them seems like a meaningless task to me, performed out of some sort of elitist sense. Lately, some young American designers, feeling the same way, have begun trying to develop devices to purify water as a way of improving, even a little, the lives of people in the Third World. Or look at Obama. As soon as he got out of Harvard, he immediately went out into the slums and worked to enable the people living there to live a decent life. That's the kind of thinking I believe is needed in design, too.

"Of course, to design such things, put them on show like a school project and let that be the end of it, is ultimately just as meaningless as designing something slick and pretty. Above all, though, it's impossible to make a living merely by making social contributions—how to earn a living at the same time is the question. Still, I think it's an interesting and meaningful place to start."

— Attention is beginning to focus on social design in Japan, too. The very scope of what is meant by "design" is expanding.

"That's good news. I can see hope there. I think the boundaries should be removed between the various niches of design: graphic, industrial, architectural, interior. I personally haven't had such boundaries in mind for quite some time already. I may call myself a 'costume designer' for the sake of working within the giant system; but I've

never thought of myself in that way.

"What's important, I think, isn't one's title; it all boils down to how to create design that will make the world go 'Wow!' When Frank Lloyd Wright was asked to design the Guggenheim Museum, for example, he drove around Manhattan in a convertible and finished by asking why all the buildings in the city were built like square boxes. He realized that circular building despite opposition from all around. The client, Peggy Guggenheim, was amazing, too. What's needed is that sort of energy. At the time, Wright was already in his nineties! Isn't that awesome? The older we get, the more capable we become. The notion that old people can't create new things is, to me, utter nonsense."

— You never seem to be in-between projects, do you. In the past few years alone, big new projects have continuously come your way: the Beijing Olympics' opening ceremony, three films (Tarsem Singh's *The Fall*, *Immortals* and *Snow White**), the Broadway musical *Spider-Man*....

(* *Immortals* is scheduled for release in 2011; *Snow White*, in 2012.)

"Oddly enough, there are people who want to try working with me, even if it's a bit risky for them, and one thing has led directly into another, like links on a chain. There are people who are looking for things that won't get old, things that will transcend time.

"These days I'm doing Tarsem's Hollywood movie, *Snow White*, and Tarsem's gone so far as to state clearly, to the studio, 'if Eiko isn't in on the project, I just won't do it'—which makes me want to work all the harder. It's when the client and the person hired to do the job are both passionate about their work, and their shared passion sparks that brilliant projects are born.

"You have to be really excited about what you're doing or it just doesn't go well, right? You have to follow your instincts and charge ahead with the same determination as though it were a matter of life and death for you. I'd like to see young people have the guts to say they refuse to tweet on Twitter. It's only because 'everyone' is doing something that they feel it would be bad form if they didn't do it too. And so when blogs become the rage, they write a blog. Or when Facebook becomes popular, they do Facebook. Granted, those things may be interesting, but just doing them you can lose hours and hours out of your precious time. There are only 24 hours in a day, and I think you should set aside as much time as possible to sit quietly by yourself and think. Unless you're constantly pondering what you should do, you'll end up being treated as a mere design tool. Then one day

you'll suddenly awake and discover you have no work whatsoever—and that would be a shame."

— Where does all your burning passion come from?

"In a nutshell, from my work, which I find so interesting. It's exciting to work on a film, for example. It's not the sort of thing you can do alone on the strength of your own abilities. It's only when the director and musicians and scriptwriters, plus the CG artists, set designers, performers and actors all pool their talents in their respective fields that it all comes together, clashes and burns. Collaboration can make it possible to be more creative than you could be on your own. Even when difficulties of various sorts arise, in the end everybody can cheer, 'Hey! We did it!' It's like all taking a creative trip together—something I find very appealing.

"During such creative journeys, while working so hard together you absorb a variety of things—or give them. In my case, what comes out of it all is my designs. So, in answer to your question, I guess I'd have to say my passion comes from the desire to pass each new day with the satisfaction of saying, 'It was a really interesting day today.' There are days of course when you rack your brain and worry about what to do. Like the weather, there are dark days and gray days. But then when the sun comes out in all its glory, you're all the more wowed by it.

"To maintain your passion, you have to keep taking up even riskier new challenges. When I gave up all my work in Japan and came to the States, I wasn't under any contract; I just chose to come of my own accord. I felt that unless I made a move like that, I wouldn't be able to see what it was that I truly wanted to do next. So I decided to start all over again, from square one. Just before I left Japan, Yusaku Kamekura, Ikko Tanaka and others hosted a going-away dinner for me at which they quipped, 'Eiko'll be back tomorrow after all!' To which I replied, 'I assure you, absolutely, I won't be coming back.' There are times when you simply have to grab on to something and be persistent enough to never let it go."

— How does that vitality, that spiritual strength, relate to what you come up with creatively?

"That's a mystery. I imagine that in the course of living so long, the things that have accumulated inside me have become assets. What I've seen, what I've created, what I've encountered—a variety of things, things that have become all the more enriching as I've gotten older, are all tucked away inside me. My originality and my time-transcending work likely emanate from that, but it's hard to make logical

sense of it. Everything's a process of experimentation.

"So if I were to give young people any advice, I would say that what's most important is to see a lot of good work and build a base of understanding what constitutes excellent work and what kind of things have been outstanding. Otherwise you don't cultivate a basis for making judgments. My philosophy is that a designer first has to train himself thoroughly—like an athlete. If you don't like design enough to do that, then how could you ever become a long-distance runner? It's the long-distance runner type designer who gains my respect.

"What inspired me to come to this way of thinking was the World Design Conference. It took place in Tokyo in 1960, while I was a student at Tokyo National University of Fine Arts and Music. Some of the most brilliant stars in the realm of graphic design came to Japan for the occasion: people like Paul Rand and Herbert Bayer and Saul Bass. Being so young of course, I wasn't able to fully understand what these luminaries were saying. Bayer at the time was in his sixties, although I must admit that to me, being so young, he looked over 70. But he was still hale and hearty and cut quite a dashing figure; and it was then and there that I decided I wanted to live the kind of life that would let me do good work when I reached his age, too. Living the high life when you're young and then fading away is OK too, I thought, but my personal choice would be to become a long-distance runner. And even now, I continue to think as though I were 25."

— From what you've said here today, it strikes me that what's ultimately of great importance, more than the design field per se, are people.

"That's what I believe. That's why designers need to actively go out and cross boundaries between different genres, get to know people other than designers, and store up new 'essences' within themselves. You get nowhere by just sitting idly by yourself looking at a design book, finding something you think is a bit interesting, and then copying it.

"Design, in the end, is a profession, and I believe that what's fundamentally necessary is having an individual presence—what you are as a human being—even if you don't engage in design. That's because it's through design that a person conveys his message to the world. If you embrace the mistaken idea that being a designer is a 'cool' profession or a job that'll make you rich—if this is your motive for being a designer, obviously you'll never survive.

"To survive, first of all you have to come out as a human being. Who

wouldn't fall in love with a designer if he were like Sakamoto Ryoma, hero of the Meiji Restoration—a man with a strong sense of justice who tried to make his country a better place even at the cost of sacrificing his own life. It's a spirit like that that people are moved by. That's why I'd even go so far as to say we could do away with the title of 'designer'. I myself perform the act of designing but I've always found the title of designer awkwardly embarrassing. The identity I always want to maintain firmly is that of being 'Eiko Ishioka'."

— Maybe what's become weak today is, as you just said, the identity of the individual.

"With the move to digital, that's the way things are going, and with accelerating speed. What seems possible by anyone will be done by everyone. I don't think there are any 'samurai'—here in graphic design circles neither in Japan nor in the US—who do truly outstanding and interesting things, or who take up revolutionary themes, or who continue what they do because it's good, even if they get thrashed for it. That's why there's no need for clients to hire such designers. I think we're heading into an unfortunate period for the graphic designer, and it's for that reason I think that before they sink they need to have a sense of crisis, a need to mull just what it is they want to do. Unless they have the drive to do that, there's no other advice I could give them.

"Maybe design is a secretive kind of job—like the mastermind who controls things from behind the scenes. If you think it's a glamorous job, you may be mistaken. As to whether or not survival is possible amid the switch to digital, I don't think the situation is an easy one. But if you charge forward with the passionate desire to rebuild design from the ground up, then I think you have a chance of surviving."

Interview and Text by Koichi Kawajiri

展示事業

Exhibitions

ginza graphic gallery 10-11

April 2 – 24, 2010

Tokyo Type Directors Club Exhibition 2010

May 7 – 31, 2010

Talking the Dragon: Tsuguya Inoue Exhibition

June 4 – 28, 2010

NB@ggg: Neville Brody 2010

July 5 – 29, 2010

2010 Tokyo Art Directors Club Exhibition

August 4 – 28, 2010

Ralph Schraivogel

September 2 – 28, 2010

Push Pin Paradigm: Seymour Chwast | Paul Davis | Milton Glaser | James McMullan

October 5 – 28, 2010

Seas and Mountains and Norito Shinmura

November 4 – 27, 2010

Kazunari Hattori: November 2010

December 2 – 25, 2010

The Euphrates Exhibition: From Research to Expression

January 11 – 31, 2011

Shueitai 100

February 4 – 28, 2011

Ian Anderson / The Designers Republic C(H-)ôme (+81/3)

March 4 – 28, 2011

Design | Fumio Tachibana

ggg

秀英体
100

秀英体
100

秀英体
100

秀英体
100

秀英体
100

2011年
1月11日
1月31日
100

Tokyo Type Directors Club Exhibition 2010

April 2 – 24, 2010

TDC展 2010



漢字の品位を極めた明朝体、需要に応えた丸ゴシック。ネットワークを使う人々の体験の共有感が大事にされたミュージッククリップと、Webサービス。やり尽くされたかのような紙面に新鮮を創出したポスター。世界の暗号を総動員した大学院生の日記。垂直方向の広がりという希有な挑戦がなされたブック用フォント。五線譜の絶対価値を覆した実験「図形楽譜」を引用した作品。人生の旅の記録として上梓された、美しいタイポグラフィの本の大作。ニュースキャスターの言葉の検閲化を表現した、ガザの真実を伝えるテレビ特番の予告CF。この幅と深度がTDC賞である。タイプデザインの巨匠、マシュー・カーター氏の授賞式参加も忘れられない年となった。

照沼太佳子(東京TDC)

A mincho font that brings optimal dignified grace to Japanese characters; a round Gothic font that responds to needs. Web services, and a music clip that lends importance to the feeling of sharing the experiences of network users. A poster that created something fresh on a paper surface, a feat where all possibilities would seem to have already been exhausted. The diary of a graduate student employing all the world's codes. A book typeface that atypically attempts expansion in the vertical direction. Works citing experimental "graphic notation" that overturn the absolute values of standard music notation. A major book of beautiful typography published as a record of a life's journey. A commercial for a special TV program conveying Gaza's reality, showing how the words of the newscaster were censored. Such are the breadth and depth of this year's Tokyo TDC Awards. The participation of Matthew Carter, doyen of type design, at the awards ceremony also made this a memorable year.

Takako Terunuma (Tokyo TDC)





Talking the Dragon: Tsuguya Inoue Exhibition

May 7 – 31, 2010

TALKING THE DRAGON 井上嗣也展

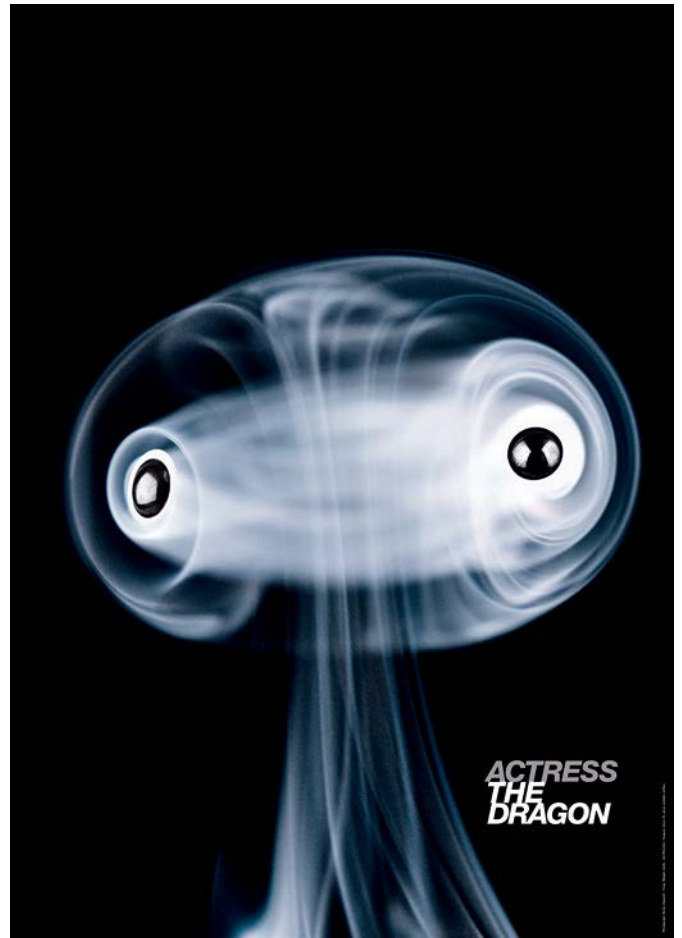
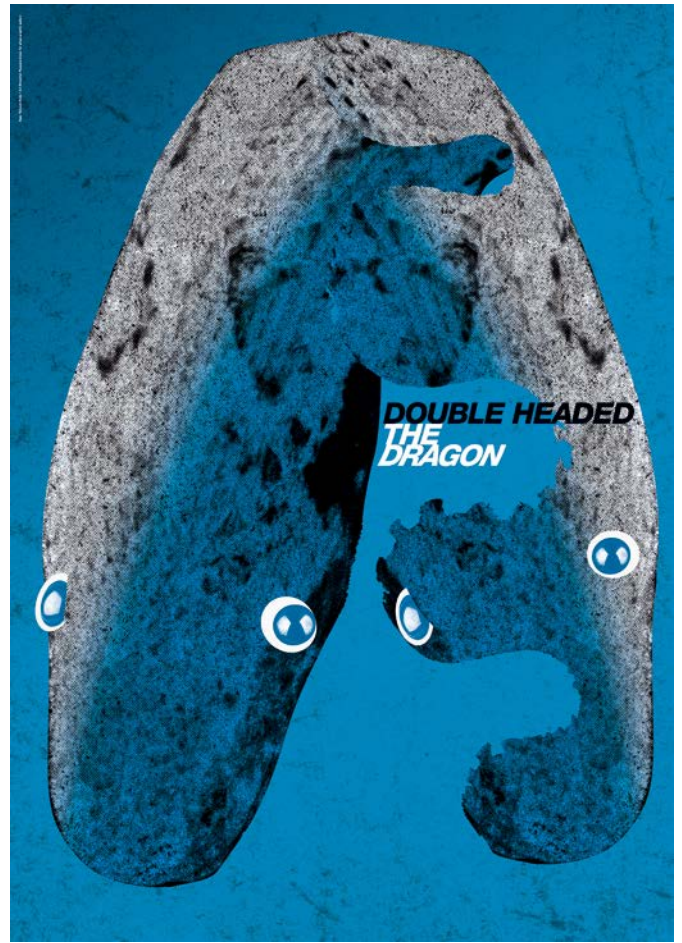
自然と対話する、という事は最高に幸運な時間だと思いが難しい事でもある。古人は月の中に餅をつく兎、といった形で夜空に思いを馳せた。日々新たに動き続ける植物や動物と向合う時、彼等の送り出す眩しい衝動の波に触れ、優しい眼差しの誘惑に負ける。その野生の動的な表情に触発され、文字の持つ内と外に向う力、写真の直接性といった平面を通して、光と記憶の底にある懐しい未知の物に出会いたいと願った。真直ぐな太陽の光と、呼吸再生する生物を思った「TALKING THE DRAGON」は、この企画展によって生れた。写真、言葉、音楽、出版、印刷をはじめ、多くの人の力を必要としているという事を改めて思った。

井上嗣也

Communing with nature is the happiest time one could spend, I think, yet doing so is difficult. In Japan, the ancients pondered the evening skies in the form of a rabbit pounding rice cakes on the moon. Whenever, day after day, we come face to face with plants and animals constantly on the move, we would touch the dazzling shockwaves they send out and give in to the lure of their gentle gazes. Inspired by their wild and dynamic expressions, my desire was, through the inward and outward power of lettering and the two-dimensional directness of photographs, to encounter the nostalgic but unknown things lurking beneath light and memory. "Talking the Dragon," which I saw as straight rays of sunlight and resuscitated life, was born from this exhibition. I came to realize once again the need for the helping hand of many people in terms of photography, words, music, publishing and printing.

Tsuguya Inoue





NB@ggg: Neville Brody 2010

June 4 – 28, 2010

NB@ggg ネヴィル・ブロディ 2010

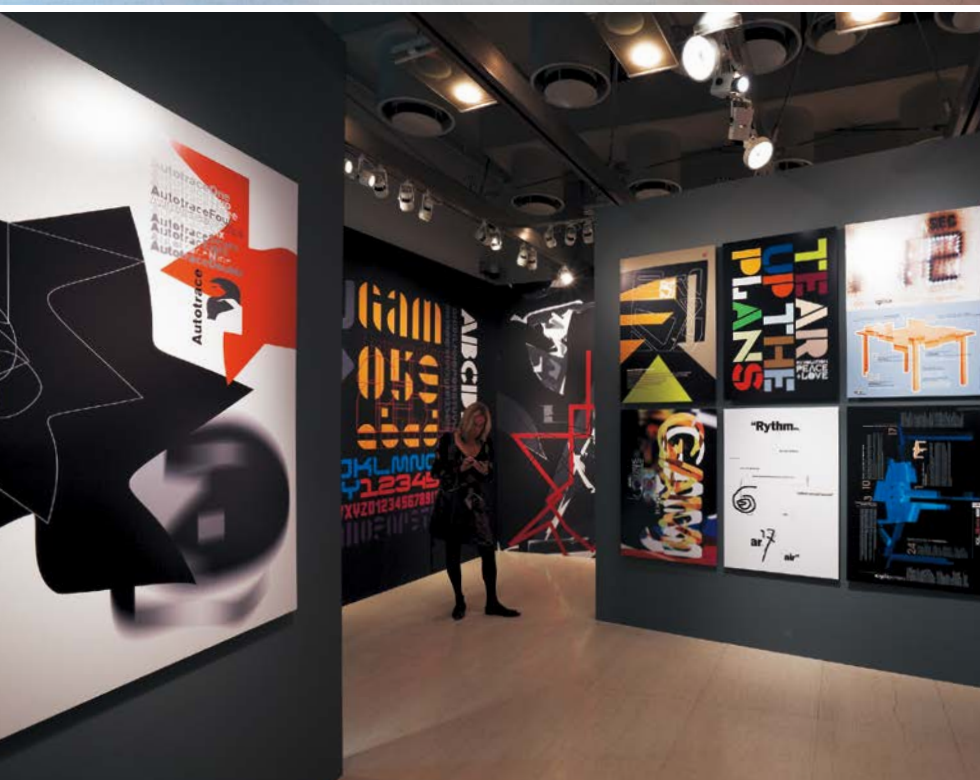


東京のggg、ギンザ・グラフィック・ギャラリーは
かなり以前から知っていました。こちらで開かれる
展覧会にはいつも刺激を受けています。gggはヴィ
ジュアルデザインの世界におけるインスピレーショ
ンの源泉として貴重な空間です。数年前のFUSE展
に続いて、再びこの場所で展覧会を開く機会を与
えられたことは光栄です。また、展覧会に対してギャ
ラリーが提供した完璧な支援と職人技にたいへん感
動しました。展覧会に先立つ2009年、gggから英国
人デザイナーとしては初めてとなる私の作品集ggg
Booksが出版されました。これは私にとってこの年
のハイライトとも言うべきことの一つでした。

ネヴィル・ブロディ

I have known the ggg space in Tokyo for a long
time, and have always been excited by the
shows they put on there. It is a rare place, a
source of inspiration in the world of Visual
Design. It was an honor to have been invited
to show again this year after our Fuse exhibi-
tion there some years ago, and I was so thrilled
by the immaculate support and craftsmanship
the gallery put into the show. The publication
of my ggg book, the first by a UK designer,
was one of my highlights of 2009.

Neville Brody





2010 Tokyo Art Directors Club Exhibition

July 5 – 29, 2010

2010 ADC展



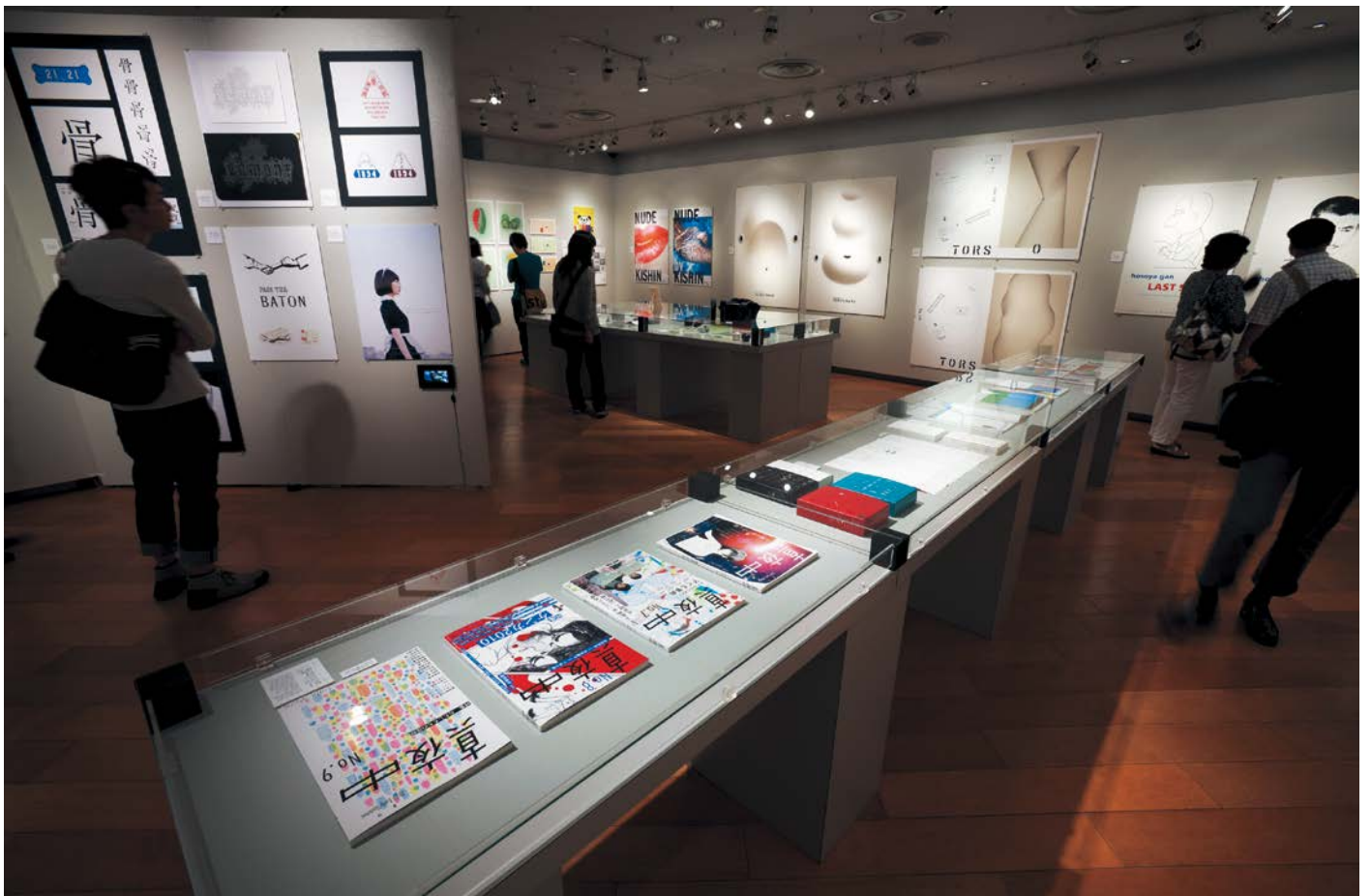
景気低迷で、影響が真っ先にでるのが広告だから、広告はこの所元気がないようだ。だからか、ここ数年のADCグランプリは、2008年は井上嗣也氏(自身の作品集)、2009年は浅葉克己氏(展覧会の空間、グラフィック)と、達人の個人技ともいえるグラフィック作品がつづいた(ADC賞の中の人気TVCMシリーズは相変わらず絶好調なのだが)。では、2010年はどうだったか。グランプリは、久しぶりに広告だった。旭化成の企業広告。地球を見すえた企業思想は、美しい映像をともしない圧巻だ。チームプレイの広告制作と、個人技のグラフィック。2010年のADCは、ジャンル全体のバランスをとりつつも、広告を後押ししようとする力が強く働いたように感じたのだが。

副田高行 (ADC展委員)

When the economy turns sluggish, the first thing to be affected is advertising. This may account for the Tokyo ADC Grand Prix being awarded in two consecutive years to graphic works indicative of the unique skills of master artists. For the first time in a long while, however, in 2010, the Grand Prix was given to advertising: corporate advertising for Asahi Kasei Corp. The company's corporate philosophy focused on the earth, along with the beauty of its visual depictions, is stunning. In 2010 the Tokyo ADC seemed to give a strong push to advertising while maintaining an overall balance among the various categories.

Takayuki Soeda
(Tokyo ADC Exhibition Committee Member)





Ralph Schraivogel

August 4 – 28, 2010

ラルフ・シュライフォーゲル展



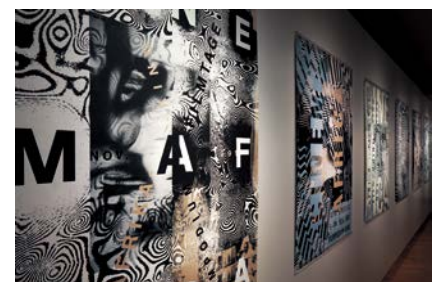
ギンザ・グラフィック・ギャラリーから展覧会開催のお誘いを受けてたいへんうれしく思いました。しかし同時に心配でもありました。私は作業に時間をかける方で、ポスターを平均して年に2点しか制作しません。展覧会をするのに十分な作品がそろうか不安でした。幸い、会場は広すぎず、スイスサイズのポスターでも小さすぎるということはありませんでした。空間と時間が申し分ない協調を見せてくれました。ギンザ・グラフィック・ギャラリーの専門的でしかも親切な支援のおかげで、展覧会の準備は楽しいものでした。また、作品の展示は完璧ですばらしく、我ながら赤面したほどです。

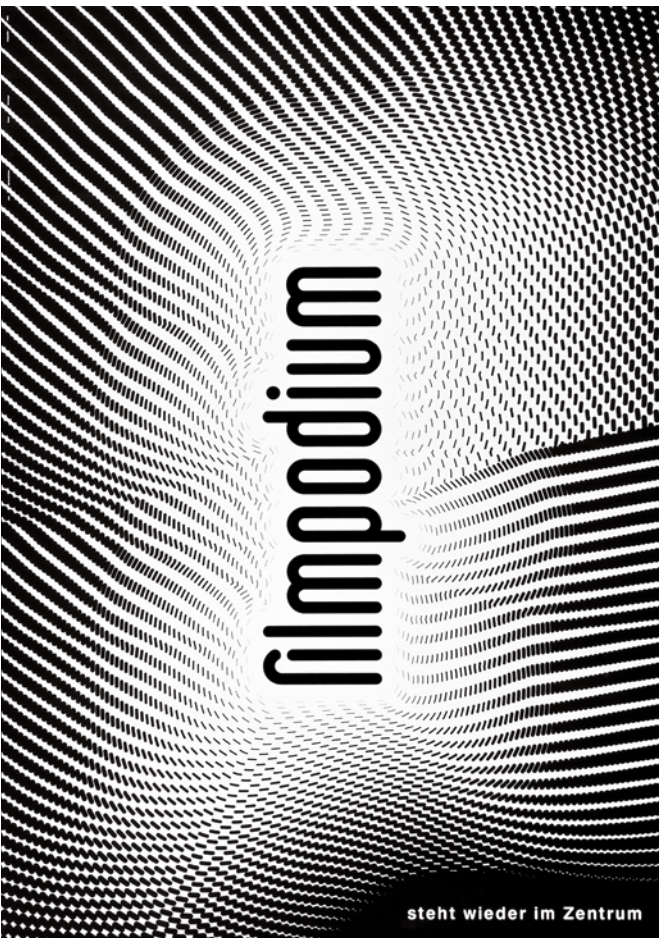
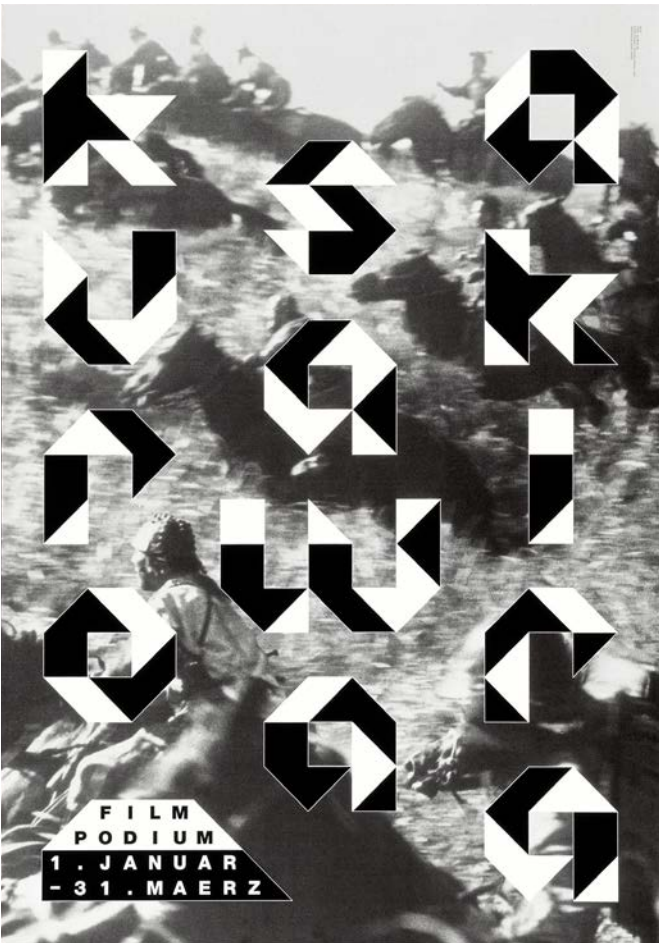
最後に、しかしとても大事なことです。今回の展覧会で私が日本の大勢の親しい友人たちと再会できたことを付け加えておきます。

ラルフ・シュライフォーゲル

When I was invited to exhibit my work at the ginza graphic gallery, I was delighted. At the same time I was worried. Since I work very slowly and produce – on the average – only two posters a year, I was concerned whether I would have enough work for the show. I am very happy that the gallery is not larger, and the standard size of a Swiss poster is not smaller. Space and time collaborated perfectly. The preparation of the exhibition was a pleasure thanks to the professional and kind support of the ginza graphic gallery. The perfect and prominent presentation of my posters made me blush. Last but not least, this exhibition allowed me the opportunity to meet many dear friends in Japan once again.

Ralph Schraivogel





Push Pin Paradigm: Seymour Chwast | Paul Davis | Milton Glaser | James McMullan

September 2–28, 2010

プッシュピン・パラダイム

シーモア・クワスト | ポール・デイヴィス | ミルトン・グレイザー | ジェームズ・マクミラン



gggからプッシュピン・スタジオの初期作品の展覧会をやらなかつたと提案されたとき、私たちは驚き、同時にうれしくもありました。1960年代と70年代はプッシュピンで仕事をするには最高の時代でした。この時期、プッシュピンの影響はいたるところで見られました。今回の展覧会ではそうした当時のエネルギーを新しい世代に伝えたかったのです。展示は、ギャラリーによって緻密に設計、実行されました。永井一正氏と及川仁氏がデザインした展覧会カタログは、コンセプトも仕上がりも非常に洗練されていました。マーナと共にオープニングのためにギャラリーを訪れたとき、私はかつてのすばらしい時代の作品に今なお変わらぬ新鮮さを感じました。

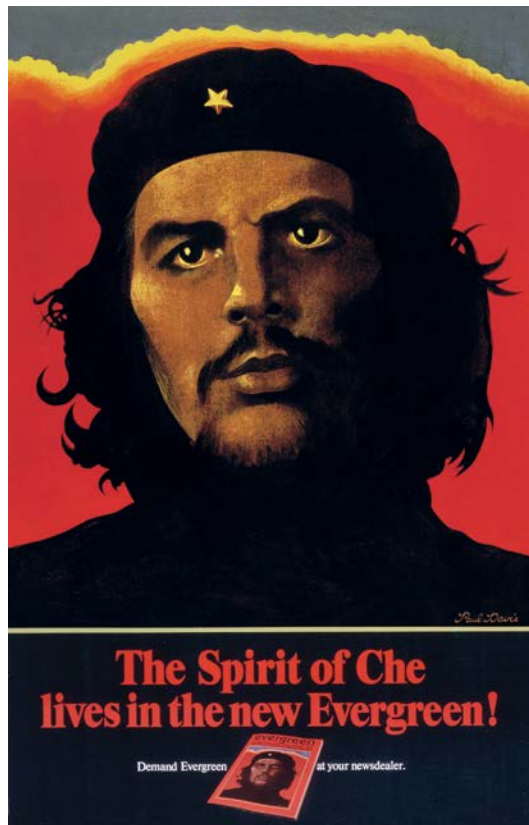
ポール・デイヴィス

When ggg suggested an exhibition of the early work of Push Pin Studios to Milton, Seymour, James and myself, we were surprised and delighted. The 1960s and 70s was an exciting time to work at Push Pin, and the studio's influence was reflected everywhere. ggg's exhibition conveyed that energy to a new generation. The installation was planned and presented with great sensitivity by the gallery, and the DNP catalogue designed by Kazumasa Nagai and Hitoshi Oikawa is exceptionally elegant in concept and execution. When Myrna and I arrived for the opening and walked through the gallery, the work of those wonderful days felt as fresh again as ever.

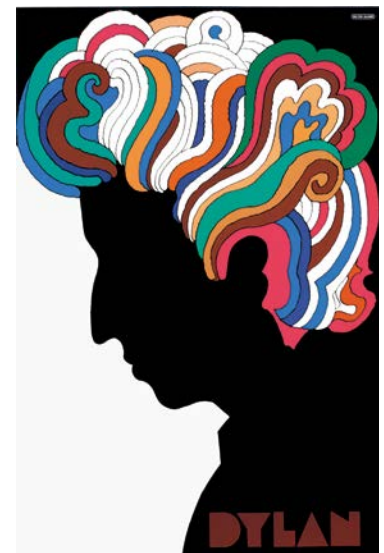
Paul Davis



1. Paul Davis
2. Milton Glaser
3. Seymour Chwast
4. James McMullan



1



2



4



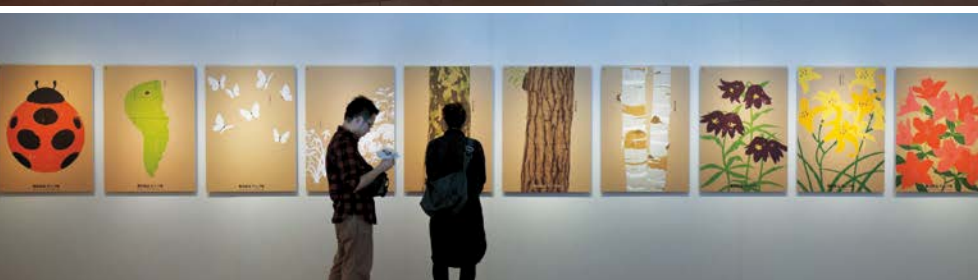
3



Seas and Mountains and Norito Shinmura

October 5 – 28, 2010

海と山と新村則人



回顧展にならないように、コンセプトを「感じる展覧会」と決めました。1階で海を感じてもらい、地階で山を感じてもらおうと思いタイトルを「海と山と新村則人」としました。そのために山口から伝馬船を運び、キャンプ場で採取した押し花を展示したのです。1階の展示がグラフィック作品になるのか迷いはありましたが、来場された方から「空間が気持ちよい」と言われた時は嬉しかったです。

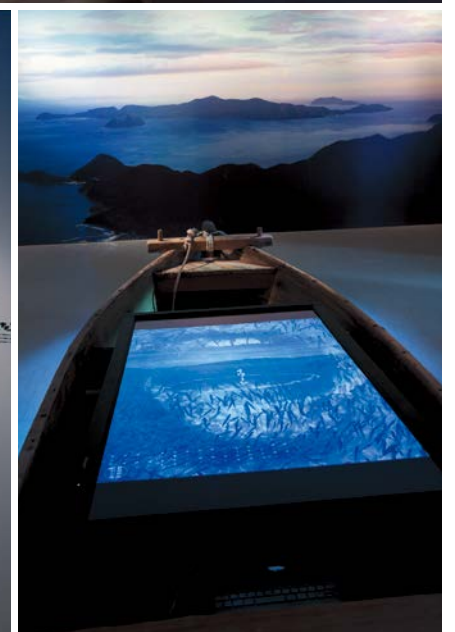
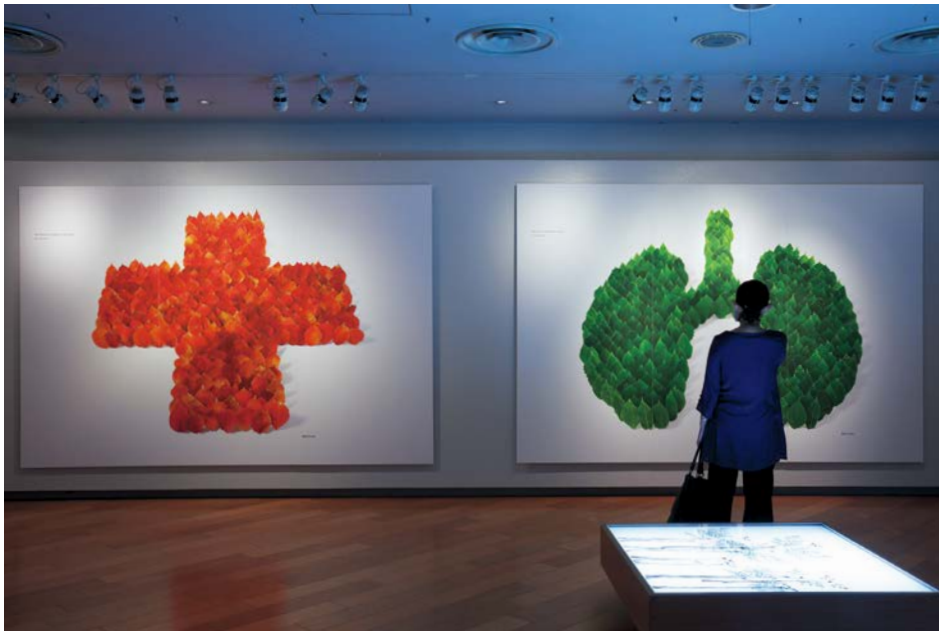
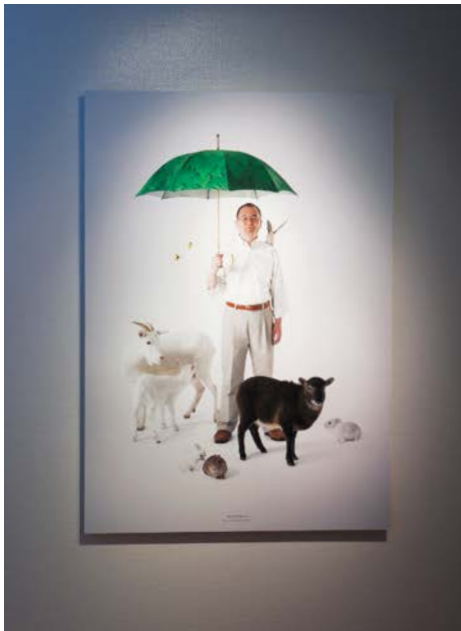
gggでの個展ということでかなりのプレッシャーがありました。展覧会の1年前から付き合っていましたカメラマンの関口尚志さんとアマナの皆さんのおかげで、充実した作品ができたと思っています。

新村則人

To prevent the exhibition from becoming a retrospective, I decided on a concept of an “exhibition that appeals to the senses.” I chose the title “Seas and Mountains and Norito Shinmura” with the intention of having visitors get a sense of the seas on the gallery’s ground level and a sense of the mountains in the basement level. To do so, I had a small barge brought in from Yamaguchi and exhibited pressed flowers I had gathered while out camping. I wasn’t sure whether the ground floor exhibits could be considered as graphics, but I was pleased when visitors told me they found the space refreshing.

Doing a solo exhibition at ggg put a lot of pressure on me. But thanks to the help I received from Takashi Sekiguchi, a photographer I had worked with for a year prior to the show, and everyone at Amana, I think the job was accomplished quite well.

Norito Shinmura



Kazunari Hattori: November 2010

November 4 – 27, 2010

服部一成 二〇一〇年十一月

ギャラリー内にベニヤ板で仮設の壁を巡らすことにしたが、予測が難しく不安のうちに設営日を迎えた。大工さんたちの見事な作業でどんどん壁が建ち、木の匂いが充ちていい気分になった。ベニヤの空間は木の肌が美しく、上から作品を貼ってしまうのが惜しいと思えるほどだった。展示内容はタイトル通り、2010年11月現在の、自分以上でも以下でもない姿を晒したつもりである。本来は日常の場にあるグラフィックデザインをギャラリー空間でどう扱うか、考えた末の展示プランであり、自分のデザインには仮設のベニヤ板が似合っていたと思う。作品の力不足は隠しようもないが、それでも少し浮かれた晴れがましさを味わううちに11月が過ぎた。

服部一成

I decided to create temporary plywood walls in the gallery, but it was with anxiety, unable to predict how they would actually look, that I approached the day to set them up. The carpenters did a wonderful job, and as the walls quickly took shape, the gallery became filled with the pleasant scent of wood. The wood surfaces were so beautiful, it seemed a shame to cover them with my works. In content, the exhibition was precisely what the title said: a straightforward show of my works as of November 2010, no more and no less. My display scheme was the result of my pondering how to treat graphic design, something that inherently is part of everyday life, within the spatial context of a gallery; and I think a temporary installation of plywood suited my designs well. There is no way of concealing my works' inadequacy in terms of power, but it was with a faint sense of joy and cheer that November passed.

Kazunari Hattori





The Euphrates Exhibition: From Research to Expression

December 2 – 25, 2010

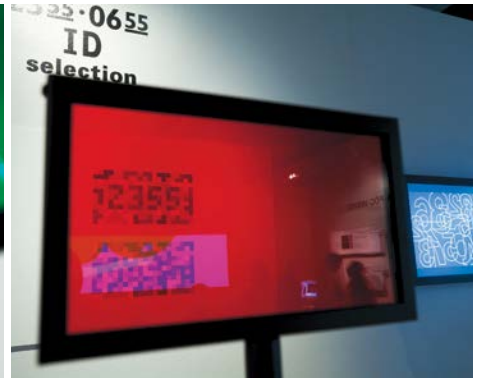
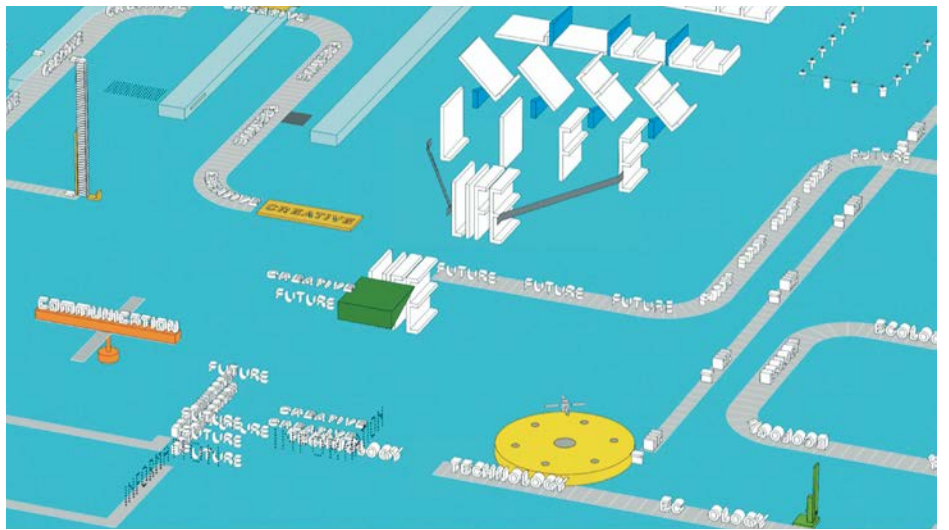
EUPHRATES ユーフラテス展 ～研究から表現へ～



映像、書籍、展示とメディアを問わず活動してきたユーフラテスにとって、ひとつの展示スペースで広く作品の紹介をすることは、それだけで難しい課題でした。そこで、今までの活動を横断するテーマとして「研究から表現へ」という副題をつけ、成果物としての映像や書籍の多くが、ユーフラテス独自の「研究活動」によって生まれた経緯を提示することにしたのです。それに加え、NHK教育テレビ『2355』『0655』の番組IDの実物展示や、この展覧会のための新作「空間の輪郭線」なども制作しました。この研究発表のような展覧会は、「研究」を基盤として生まれた表現が持つ強さ、面白さを自分たちが再確認する機会ともなりました。 ユーフラテス

For Euphrates, a creative group active across a broad media spectrum, introducing an array of works in one exhibition space posed a difficult challenge. The conclusion we reached was to affix a subtitle describing the theme that has run through all of our activities to date: “From Research to Expression.” We decided to present the process by which our unique “research activities” have given birth to a large number of visuals and books. In addition we showed a number of our earlier works, and also created new works specially for the exhibition. This exhibition akin to a “research report” gave us an opportunity to reaffirm to ourselves just how strong and interesting expression based on research can be. Euphrates





Shueitai 100

January 11–31, 2011

秀英体 100



DNPのオリジナル書体「秀英体」生誕100年を記念して24名+1組のグラフィックデザイナーの企画展が開催された。秀英体は金属活字の初号から八号までの明朝体から発足し、以来明朝を中心にしながらその品格・豊かさ・可読性など活字の王道を歩みながら改刻を重ねてきた。そしてデジタルフォントの現代に対応するゴシックを含めた書体が完成しつつある。そのような「秀英体」の魅力を伝えるために第一線で活躍する様々な年代のグラフィックデザイナーが「四季」をテーマに粋を凝らしたポスターを制作した。それ等は秀英体による季語を骨格にすえながら日本の四季それぞれの美しさを競い百花繚乱、秀英体の推移を表した展示と共に充実した内容であった。

永井一正



This exhibition, a collaborative effort by 24 graphic designers and one design team, was held to commemorate the 100th anniversary of the creation of Shueitai, an original typeface invented by DNP. Shueitai evolved out of the Mincho style, and while continually reinventing itself it has remained Japan's mainstream typeface due to its clean legibility and dignified beauty. Today, Gothic and other fonts are being perfected in response to the new era of digital fonts. To convey the appeal of Shueitai, leading graphic designers of all ages set to creating superlative posters on the theme of "The Four Seasons of Shueitai." With Shueitai acting as a "season word," the posters vied to show off the beauty of Japan's four seasons, resulting in an exhibition that both conveyed the transition of the Shueitai typeface and created a wondrous bouquet of outstanding works.

Kazumasa Nagai

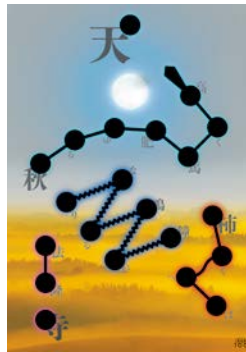




永井 一正 Kazumasa Nagai



杉浦 康平 Kohei Sugiura



勝井 三雄 Mitsuho Katsui



仲條 正義 Masayoshi Nakajo



平野 甲賀 Kouga Hirano



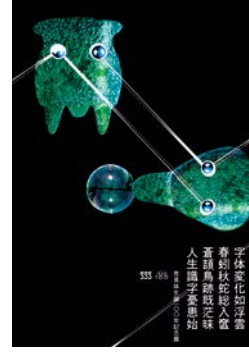
浅葉 克己 Katsumi Asaba



松永 真 Shin Matsunaga



佐藤 晃一 Koichi Sato



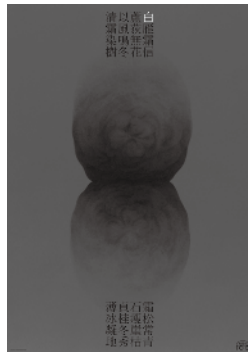
井上 嗣也 Tsuguya Inoue



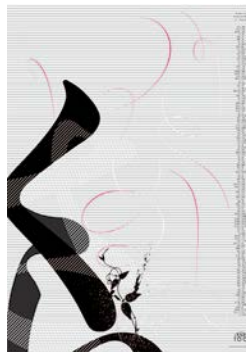
葛西 薫 Kaoru Kasai



杉崎 真之助 Shinnoske Sugisaki



平野 敬子 Keiko Hirano



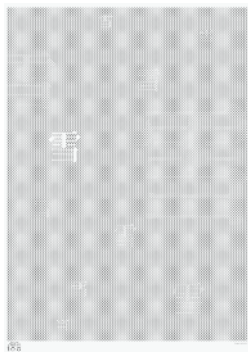
南部 俊安 Toshiyasu Nanbu



中島 英樹 Hideki Nakajima



原 研哉 Kenya Hara



三木 健 Ken Miki



祖父江 慎 Shin Sobue



高橋 善丸 Yoshimaru Takahashi



服部 一成 Kazunari Hattori



澁谷 克彦 Katsuhiko Shibuya



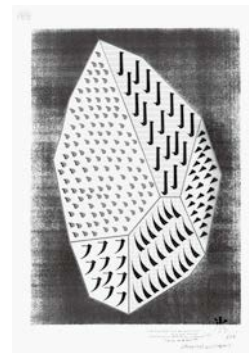
中村 至男 Norio Nakamura



立花 文穂 Fumio Tachibana



佐野 研二郎 Kenjiro Sano



長嶋 りかこ Rikako Nagashima



コントラプンクト(デンマーク) Kontrapunkt

Ian Anderson / The Designers Republic C(H—)ōme (+81/3)

February 4–28, 2011

イアン・アンダーソン／ザ・デザイナーズ・リパブリックがトーキョーに帰ってきた。



25年前、銀座にgggがオープンした、同じ年の7月14日、そこから西に約1万キロ離れた北イングランドのかつての工業都市—どこでもない北の方にあるサウスヨークシャー—で、ザ・デザイナーズ・リパブリック立上げが宣言された。バスター・キートン襲撃から197年後のことだ。

インターネット以前、1989年頃の北イングランド、雨。在庫一掃セールの中から一冊の日本のポスター集を見つけた。メンバー全員が心を奪われたポスターには、どれも特徴ある3つのgのロゴがあった。それだけが記憶に残った。のちにそれらがギンザ・グラフィック・ギャラリーのポスターであることを知る。我々はいつの日か自分たちの展覧会をgggでやれるかもしれないと夢にひたった。

すべてはつながっている。25年を経て、我々はつながった。故郷に戻った思いである。

イアン・アンダーソン／ザ・デザイナーズ・リパブリック



25 years ago in Tokyo, DNP first opened ggg in Ginza. In the same year, approximately 5861 miles to the slightly north west, in a post-industrial city in the north of England – let's call it SoYo North of Nowhere – The Designers Republic was declared on July 14th – 197 years to the hour after The Storming of the Bastille flash-pointed the French Revolution.

Before the internet, we read books, scanning their contents to find new starting points, different structures, better means of communication. We were limited to what we could find locally, and what we could afford pre-Amazon. Around 1989 we found a Japanese poster design book in a clearance sale in the north of England. It was probably raining. The poster designs in the book that most interested us all had strange triple-g logos on them. That's all we knew, the book was in Japanese.

Later we learnt from another book that they were ginza graphic gallery posters. From Tokyo. From Japan! WOW! We allowed ourselves the luxury of dreaming that one day we might have our own exhibition at ggg... and that we might walk on the moon.

Everything is connected. I'm happy that 25 years later we are connected. It was good to come home.

Ian Anderson / The Designers Republic



Design | Fumio Tachibana

March 4 – 28, 2011

デザイン 立花 文穂

ぼくは、ぼくの身近なひとたちが共感できる感覚を
抛りどころにものをつくっています。ぼくは、それ
をデザインと呼んでいる。ぼくがつくるデザインは
大抵ちいさい。本やちいさい印刷物は、手にとって
手元で見ることが魅力です。ぼくが展覧会をやる
理由は、その場にわざわざ足を運んで見てくれると
ころです。この展示では目の前にあるのに触れられ
ないもどかしさを含めました。想像力は、とても具
体的だ、とぼくは思うから。陳列された印刷物の触
感をふとしたときにイメージしてもらえるとうれし
い。この展覧会に併せて拵えた作品集『風下 立花文
穂』は、個人的な物語と消えてゆく本づくりのひと
つのあり様を合わせた。ぜひ手にとって見ていただ
きたい。

立花文穂

I create things in such a way that the people
around me can relate to what I make. This is
what I call "design." My designs are generally
small. I find taking a book or small print direct-
ly in hand to look at very appealing. The reason
I hold exhibitions is because people go out of
their way to come and see what I've made. For
this show, I added in the frustration of putting
the works in front of them but not enabling
them to touch them. I did so because I think
the powers of imagination are very specific. I
hoped that visitors would use their imagina-
tion about what the printed works on display
feel like. In the collection of works I put togeth-
er in tandem with this exhibition – *Kazashimo:
Fumio Tachibana* – I told my personal story
and also conveyed one way of binding books,
a disappearing art. In this case, I hoped visi-
tors would take the book in hand, by all means.

Fumio Tachibana





ddd gallery 10-11

January 18 – March 9, 2011

GRAPHIC WEST 3

phono / graph – sound · letters · graphics –

March 23 – May 12, 2010

Issay Kitagawa

May 21 – July 3, 2010

Tokyo Type Directors Club Exhibition 2010

July 13 – September 4, 2010

DNP Graphic Design Archives Collection III

Shigeo Fukuda's Visual Jumping

September 14 – October 30, 2010

2010 Tokyo Art Directors Club Exhibition

November 9 – December 22, 2010

DNP Graphic Design Archives Collection II

Ikko Tanaka Posters 1953 – 1979



GRAPHIC WEST 3

phono / graph – sound・letters・graphics –

January 18 – March 9, 2011

GRAPHIC WEST 3 phono / graph — 音・文字・グラフィック —



マン・レイは「私は自分を光度測定記録者 (photometrographer) に分類する」と書いている。これはエリック・サティが「私は自分を音響測定記録者 (phonometrographer) に分類する」と書いていたテキストをアレンジしたものである。

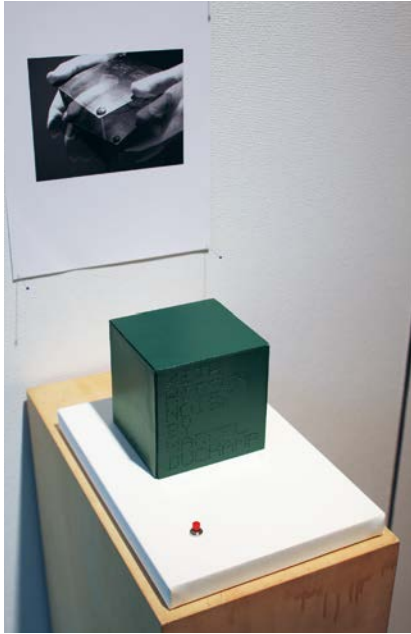
音や光を何らかの形に「記録 (graph)」することは、創造行為というよりもむしろ本能なのではないだろうか。その記録することに対する無邪気な好奇心は、メディアの変換する時期に面白い振る舞いをする。紙というメディアが消えようとしている今、phono / graph の立場から文字を考えてみたくて展覧会を構想した。その結果展覧会場では文字が動き出していた。

藤本由紀夫

In his writings, Man Ray categorized himself as a “photometrographer.” He was alluding indirectly to how Erik Satie had categorized himself as a “phonometrographer.” Taking sound or light and recording it (=graph) in some form is not so much a creative act as it may be human instinct. The simple curiosity toward such recording behaves in interesting ways when media are in flux. Today, when the medium of paper is in the process of disappearing, I conceived of this exhibition out of a desire to think about the written word from the standpoint of phono/graph. The result was an exhibition at which the written word set in motion.

Yukio Fujimoto

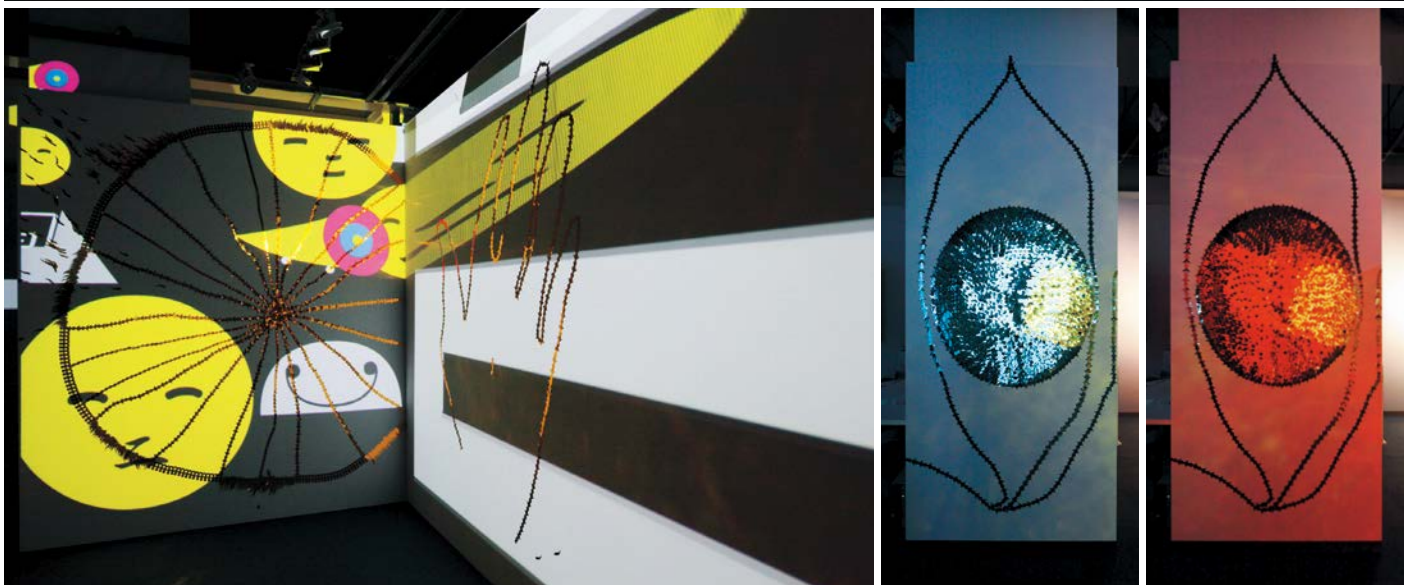




Issay Kitagawa

March 23 – May 12, 2010

北川 一成



Tokyo Type Directors Club Exhibition 2010

May 21 – July 3, 2010

TDC展 2010



DNP Graphic Design Archives Collection III

Shigeo Fukuda's Visual Jumping

July 13 – September 4, 2010

DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展III 福田繁雄のヴィジュアル・ジャンピング



2010 Tokyo Art Directors Club Exhibition

September 14 – October 30, 2010

2010 ADC展

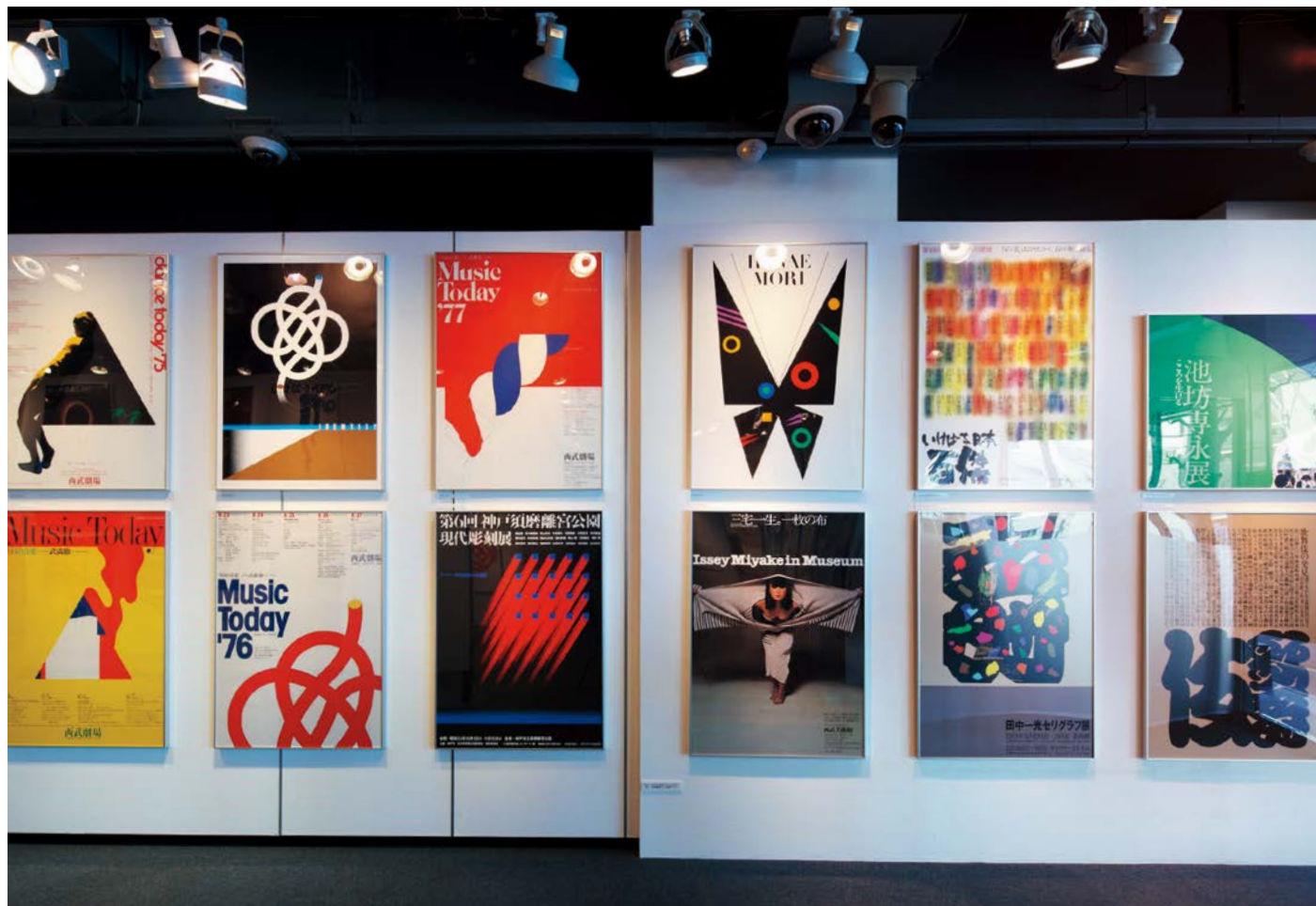


DNP Graphic Design Archives Collection II

Ikko Tanaka Posters 1953 – 1979

November 9 – December 22, 2010

DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展II 田中一光 ポスター 1953 – 1979



Center for Contemporary Graphic Art and Tyler Graphics Archive Collection 10

March 6 – June 6, 2010

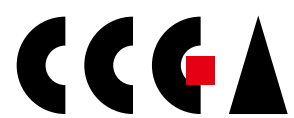
**DNP Graphic Design Archives Collection II
Ikko Tanaka Posters 1953 – 1979**

June 12 – September 12, 2010

**Roy Lichtenstein:
22nd Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection**

September 18 – December 23, 2010

**DNP Graphic Design Archives Collection III
Shigeo Fukuda's Visual Jumping**



DNP Graphic Design Archives Collection II

Ikko Tanaka Posters 1953–1979

March 6 – June 6, 2010

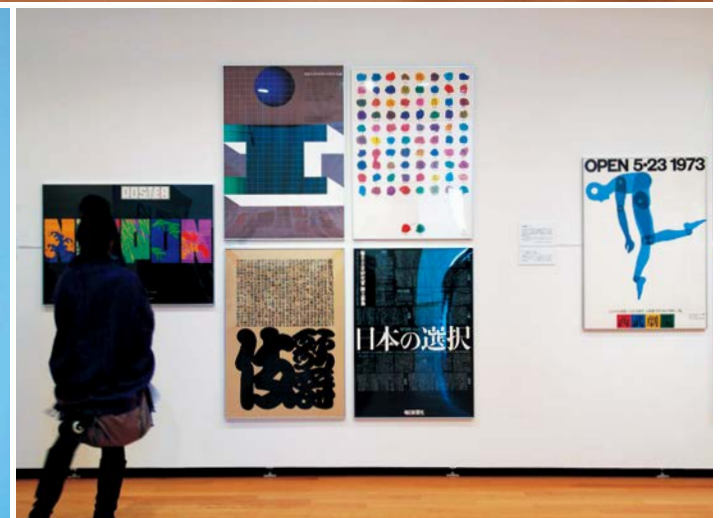
DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展II 田中一光 ポスター 1953–1979



日本および世界のデザイン界に痛切な喪失感を残した田中一光の急逝（2002年1月）から7年、財団法人DNP文化振興財団への2万点におよぶ作品、資料の寄贈によって、2008年12月に田中一光アーカイブが設立された。傑出した制作活動にくわえて優れた指導力を発揮した彼の業績のなかでも、とりわけ特筆されるのがポスター作家としての歩みである。本展は、田中一光が1950年代から70年代に制作した約550点に及ぶポスターの中から161点を精選して展示し、その創作活動の原点を振り返るとともに、世界屈指のポスター作家へと着実にステップを踏んでいった時代の奥深い魅力を探った。

Seven years after Ikko Tanaka's untimely death in January 2002, an acute loss for the realm of design both of Japan and the world, the Ikko Tanaka Archives were established in December 2008 following a donation of some 20,000 items – his works and related materials – to the DNP Foundation for Cultural Promotion. Among Mr. Tanaka's outstanding creative activities and his vast achievements as a leading force within the field, his development as a poster artist merits special mention. For this exhibition, 161 of his posters were selected from among the roughly 550 he created between the 1950s and 1970s. The exhibition offered visitors a retrospective look at the origins of Mr. Tanaka's creative activities, and also probed his profound appeal during the period in which he made steady progress toward leaving his indelible mark as one of the world's foremost poster artists.





Roy Lichtenstein: 22nd Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection

June 12 – September 12, 2010

ロイ・リキテンスタイン展：タイラーグラフィックス・アーカイブコレクション展 Vol.22

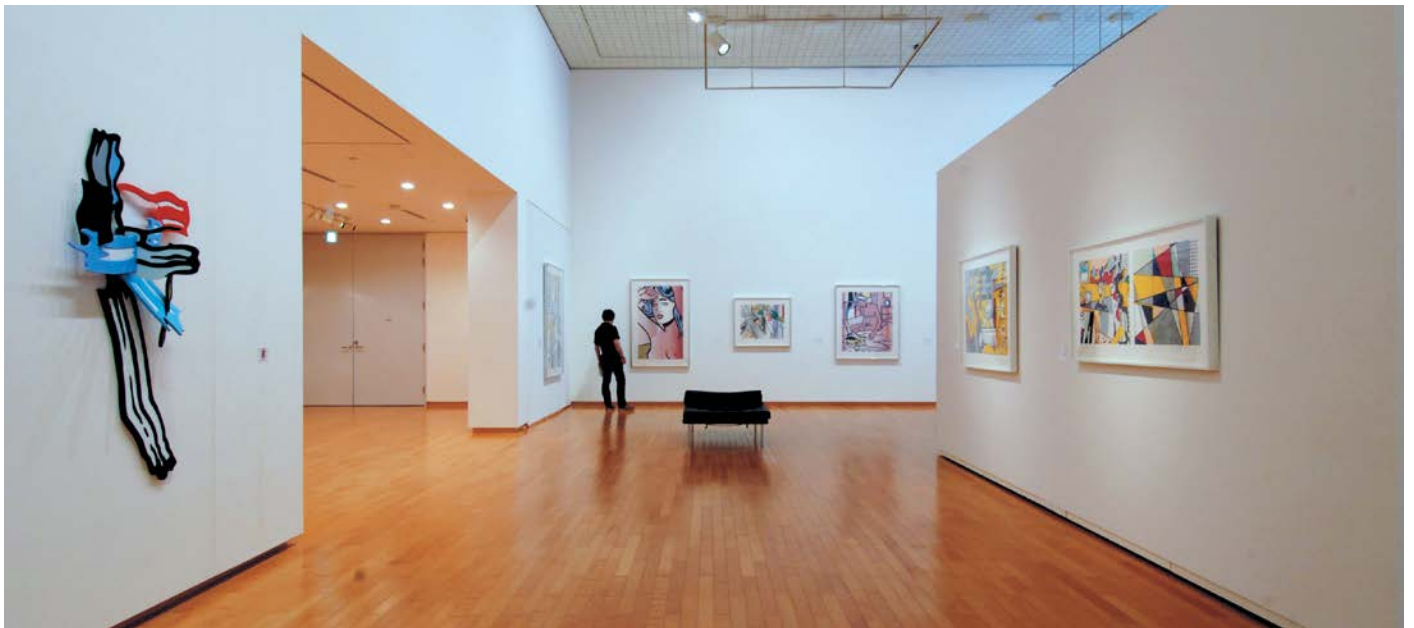


ロイ・リキテンスタインは1960年代初頭、広告や漫画のイメージを直接引用した絵画により、ポップ・アートの旗手として注目を浴びた。消費社会のアイコンをそのまま美術の中に持ち込んだインパクトだけでなく、印刷の網点やストライプ、太い輪郭線とフラットな原色から作り出される独特の強固な絵画空間によって、彼はポップ・アートのみならずアメリカ現代美術を代表する作家であり続けた。リキテンスタインは、自身の作風を実現するのにかっこうのメディアとして版画制作にも情熱を燃やし、数々の名作を生み出してきた。本展は、リキテンスタインがタイラーグラフィックスで制作した版画を展示し、その作品世界の魅力に迫った。



In the early 1960s Roy Lichtenstein garnered attention as a standard-bearer in Pop Art, his fame drawing on his paintings directly citing images from advertising and comics. He remained a representative presence within not only Pop Art but also American contemporary art not merely because of the impact of his infusing the icons of consumer society into the realm of art, but also because of the unique, well-defined spaces he created through the use of Ben-Day dots, stripes, thick contour lines and flat primary colors. Lichtenstein was also a passionate proponent of printmaking, which he viewed as the perfect medium suiting his artistic style, and he produced a wealth of print masterpieces. This exhibition showed prints he created at Tyler Graphics, giving visitors an overview of his superb appeal in this artistic realm.





DNP Graphic Design Archives Collection III

Shigeo Fukuda's Visual Jumping

September 18 – December 23, 2010

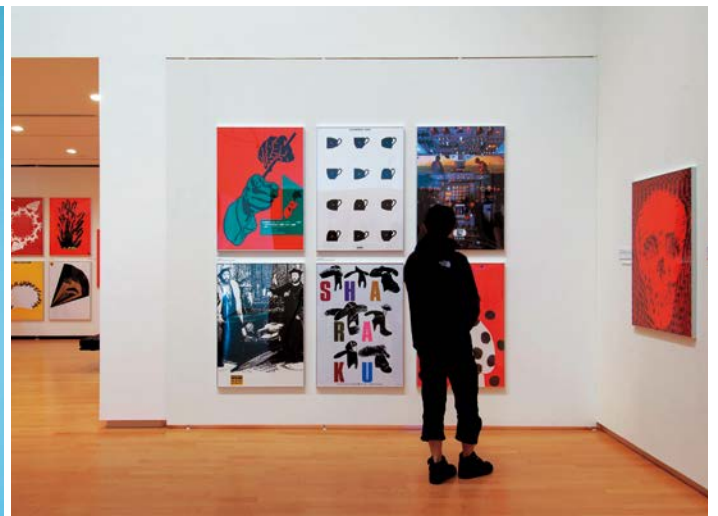
DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展III 福田繁雄のヴィジュアル・ジャンピング



2009年1月、福田繁雄の急逝の知らせは世界のデザイン界に大きな衝撃と深い喪失感を与えたが、彼が残した作品は、デザインとアート界における貴重な遺産としてその評価がますます高まり、存在感が揺るぎないものになっている。本展は、ご遺族からの寄贈により2009年8月に設立された福田繁雄アーカイブを記念し、彼が生涯制作した約1,200点のポスターの中から精選した作品を紹介する追悼特別展として企画された。今も世界中の人々の心を捉えて離さない、高度なユーモアと独自のウィットが盛り込まれたポスターに、海外からのメッセージや貴重なインタビュー映像等も交え、作家の偉業を浮き彫りにした。

News of Shigeo Fukuda's sudden death in January 2009 came as a great shock and profound loss for the realm of design worldwide, but the works he left behind have been winning rising acclaim as a valuable legacy of both design and art, giving him an unshakable presence. This exhibition was held to celebrate the establishment of an archive in his name in August 2009, the outcome of a donation of his works by his family. It was also planned as a special show celebrating Mr. Fukuda's life through a carefully picked selection from among the near 1,200 posters he created during his career. The exhibition set his artistic achievements in high relief through his posters – works that continue to make a lasting impression on people everywhere with their sophisticated humor and Mr. Fukuda's unique wit. These were augmented by messages from overseas and rare interviews with Mr. Fukuda on video.





教育・普及事業

Education & Enlightenment

ggg, ddd Gallery Talk Overview

ギャラリートーク概要

NB@ggg ネヴィル・プロディ 2010

出演者：ネヴィル・プロディ

自身がデザイナーとしてのキャリアをスタートさせて以来の25年間を振り返って思うこと—単一化された文化、デジタル化による価値の低俗化、アイデンティティの喪失、自由すら自由という概念無しには成り立たない現実—そういった強い思いを胸に創作活動に臨んでいることがまざまざと伝わってくるネヴィル・プロディ氏のトーク。そしてまた、デジタル世代の申し子であるプロディ氏は、けっしてデジタルを批判するわけではなく、アナログからデジタルへと移行した現在、その事象を教訓としてアナログを再発見しようというおもしろい時代であると語る。本展でも、ロンドンでつくった作品をデジタル化してそのデータを日本に送り、日本で出力=手に触れるものとして再生、gggという空間の中で、建築的、スケールの再構成されるという、アナログ→デジタル→アナログのプロセスをまさに体言した展覧会であったことを強調した。



ラルフ・シュライフォーゲル展

出演者：ラルフ・シュライフォーゲル+佐藤晃一

詩人がことばで詩を考えていくように、デザイナーが「版」でイメージを構築していく、そんな古典的な考え方のもとに作品制作を行なうシュライフォーゲル氏と、その版の構築過程のディテールを楽しまない限り本質的な彼の作品の楽しみはわからないという佐藤晃一氏が、実際の作品を前に、具体的な制作手法や印刷の詳細を語り合う。1993年以後の友人関係にあるシュライフォーゲル氏と佐藤氏。商業ベースの仕事よりも文化機関の仕事が多く、年間に制作する作品数も限られているなど共通点の多い二人は、新作ポスターを送り合うことで互いの近況を知るといふ。お互いに心から尊敬しあっていることがせつせつと伝わる対談となった。「デザイナーの仕事は本当に大変なこともあるが、満足感や楽しさをもたらしてくれるもの」最後にシュライフォーゲル氏より、シンプルで力強いメッセージが伝えられた。



EUPHRATES ユーフラテス展 ～研究から表現へ～

出演者：石川将也+山本晃士ロバート/ユーフラテス

1回目は、ユーフラテスの代表作のひとつ『アイデアの工場』をDNP五反田ビルのホールにて、高解像度3面スクリーンを使って本来の理想の状態上映。この『アイデアの工場』を例として、ユーフラテスの活動のキーワード「研究から表現」に至る過程を詳しく説明。2回目は、ユーフラテスのメンバー全員（山本晃士ロバート、貝塚智子、うえ田みお、佐藤匡、石川将也、米本弘史）が登場。彼らが掲げる「ある考え方から新しい表現をつくる」とはということかを、メンバー各々がたずさわったプロジェクトの紹介や、個人研究テーマの発表を通して具体的に示していった。ユーフラテスの活動の特徴づける研究活動が個々の興味を基に自由に幅広く行なわれており、実際に形になったもの以外に、その出番を待っているものが未だ数多くある。今後の活動への期待が膨らむイベントとなった。



秀英体100

出演者：港 千尋+大日本タイポ組合

フランス国立印刷所と秀英体活版現場の写真集を出した港千尋氏と、本展の告知および会場デザインを手がけた大日本タイポ組合（塚田哲也氏・秀親氏）による対談。100年という長い歴史の中でそのときどきの技術と結びついて変遷してきた秀英体を展覧会でどう見せるか。活字、写植、デジタルフォントと変化してきて、この先どうあるべきかが問われる中、歴史は歴史として押さえつつ、誰もが秀英体に親しめるエンターテインメントなスペースをということで今回の役目を担ったという大日本タイポ。告知デザインに込めた真意と会場構成の意図を披露しつつ、港氏が印刷所の撮影をしながら感じた文字の歴史と重み、我々が直面している電子書籍にはじまるデジタルフォントのこれからなど、展覧会同様、文字文化の過去と現在そして未来へとつながる話となった。「活字は旅をする」という港氏のことが印象に残る。



ブッシュビン・パラダイム

出演者：ポール・デイヴィス+マーナ・デイヴィス

ブッシュビン・スタジオの初期メンバーであり、その歴史の中でも大変に影響力のある存在となっているポール・デイヴィス氏と、同じく元スタジオのメンバーであったマーナ・デイヴィス夫人によるトーク。ブッシュビン創設当時のエピソードや、自身のスタジオ加入のいきさつから始まり、本展でフィーチャーした4名による60年代を中心とするブッシュビン作品について、一点一点丁寧に語った。ミルトン・グレイザー氏の作品を見れば、コンピュータなどない時代に拡大・縮小、切貼、作品自体のセグメント化などといった実験が常に試みられていることがわかり、そんな彼の作品を敬愛してきたというデイヴィス氏。メンバー同士の尊敬と信頼関係のほどをうかがわせるとともに、ニューヨークデザイン黄金期の圧倒的な「イラストレーションとデザイン」の魅力に迫った。



イアン・アンダーソン／ザ・デザイナーズ・リパブリックが トーキョーに帰ってきた。

出演者：イアン・アンダーソン

TDRの25年にわたる活動を個々のプロジェクトを通じて口早に説明するイアン・アンダーソン氏。ロンドンのデザインシーンやコミュニティから歩引いたスタンスを意識的にとりつつ、商業主義に対するアンチテーゼを打ち出したり、物事の二面性＝矛盾をつく作品を数多く発表してきた氏の強く一貫したコミュニケーションに対する姿勢が伝わってくる。「何を言うか」ではなく「いかに言うか」が重要なコミュニケーションにおいて、デザインの技術的な面よりもむしろデザインに抽象性をもたらすことに重きを置いた結果、自分では読めない日本語のかなを使い始めた。また商業主義のシンボルやディストピア的「ブレードランナー」の世界観としての日本のイメージがあり、TDRのデザインの中で日本のキャラクターやかなを多用するようになったとの話の中に、日本への愛情も感じた。



海と山と新村則人

出演者：新村則人+福島 治

実家がそれぞれ漁師と農家であり、専門学校出身と、生い立ちがそれとなく重なる新村則人氏と福島治氏は、学校卒業後の経歴も似ている。(本人たち曰く)田舎育ちで専門学校出身でも、こんなに素晴らしい作品をつくることができるようになる、展覧会ができるようになるのだ、ということをも身をもって体現する二人が、温かなことばで、「がんばればできる」と若い人たちを勇気づけるような話となった。生まれ育った環境から必然的に「自然」に魅せられてきた新村氏。本当に自分の好きなもの、自分自身のテーマ＝自然、を見つけたときに、おのずと結果もついてきた。展覧会のテーマをすばり「海と山」とする思い切りぶりがその心情を裏付ける。自分が好きで、美しいと思うものを来場者にも感じてもらいたい、という純粋な心持ちから、故郷、浮島を望む雄大な景色のインスタレーションが実現したのだ。



phono/graph—音・文字・グラフィック—

出演者：藤本由紀夫

情報の取得、伝達の手段が聴覚中心だった社会から、文字／活字、そして遠近法の発明により視覚中心の社会になる。しかしラジオやレコードというメディアが登場した20世紀は聴覚空間を中心に切り替わるべきで、さらに平面的な視覚空間と360度広がる聴覚空間とが互いに補い合いながらトータルで作用している、とマーシャル・マクルーハンの言葉を引用。「graph」つまり「記録する」とは我々のいわば本能で、その記録メディアや意図は様々であるが、必ずしも視覚的なものだけを示す言葉ではない。そんな中graphicというものを考えるとき、紙がメディアとして以前のように機能しない今、graphという概念をもう一度考え直す段階にある。新しいメディアが登場したときに「官製の(官僚的な)文化が新しいメディアに古い仕事をするように強制すること」に警鐘を鳴らし、文化そのものを翻訳していく必要があると説いた。



服部一成二十年十一月

出演者：服部一成+室賀清徳／服部一成+寄藤文平

初回、「アイデア」編集長の室賀清徳氏が、デザイン誌編集者の視点から、今回の展覧会の構想と設計を聞き出すことで、服部一成氏のグラフィックデザインに対する深層心理を突けば、2回目、アートディレクターである寄藤文平氏は、服部氏のデザインを(浅田)真央のデザイン、自身のデザインを(キム)ヨナのデザインに喩え、独特の服部デザイン評、自身のデザイン観を繰り広げる。二つの対談から見えてきたのは、服部氏が中学生・高校生の頃に見たイラストレーションやデザインに対する「わぁ！すごい」と思った瞬間の、スタイルや目的やそれ以上のものを、全て瞬間的に理解してしまった感覚に対する確信。その感情を追い求め、記憶の中にあるものや感触を、形を変えてつくろうとしているということ。説明できない、ことばにならない部分があって、でも確かに人はそこに反応しているのだ。



北川一成

出演者：北川一成+田中良治+菅井俊之

TDC展 2010

出演者：一柳 慧+浅葉克己

2010 ADC展

出演者：中嶋貴久+石毛浩介+平山浩司+磯島拓矢

DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅱ 田中一光ポスター 1953-1979

出演者：永井一正

NB@ggg: Neville Brody 2010

Speaker : Neville Brody

Neville Brody's presentation conveyed a variety of the strong convictions that are behind his creative activities. He noted how, looking back over the 25 years since he began his career as a designer, he has always been conscious of cultural unification, the vulgarization of values that come from digitalization, loss of identity, and of the fact that freedom cannot exist when there exists no concept of freedom. Being himself a product of the digital age, Brody is by no means critical of digital technology; rather, he says that these current times, when a transition has occurred from analog to digital, constitute an interesting era conducive to rediscovering analog as a lesson to be learned from that transition. For this exhibition, the works Brody created in London were digitally converted and sent as data to Japan; in Japan they were reproduced as tangible objects within the spatial parameters of ggg, reconfigured architecturally and in scale. The exhibition thus demonstrated the actual process of conversion from analog to digital, and then back to analog.



Ralph Schraivogel

Speakers : Ralph Schraivogel + Koichi Sato

Ralph Schraivogel's works are created based on the classical thinking that a designer puts together an image using plates in the way a poet conjures up a poem using words. Koichi Sato says that unless one revels in the details of the process by which those plates are configured, he cannot appreciate a work in its essence. This Gallery Talk thus proceeded with Sato asking Schraivogel in probing detail about the specific production and printing methods used in the works at hand before them. The two share much in common, including their preponderance of works created for cultural institutions rather than on a commercial basis, and the limited number of works they each create per year. They keep each other up-to-date on their doings by sending each other their new posters, and during their talk it was clearly evident just how much respect these two artists have for one another. The session closed with a simple but powerful message by Schraivogel: that the work of a designer may be very demanding but it brings enjoyment and a sense of satisfaction.



The Euphrates Exhibition: From Research to Expression

Speakers : Masaya Ishikawa + Kohji Robert Yamamoto /
Euphrates

At the first session, one of Euphrates' representative works "Factory of Ideas," was shown under the ideal conditions for which it was originally intended, using 3 high-resolution screens. Using that work as an example, the two guests explained in detail the process behind the main orientation of Euphrates' activities: "from research to expression." The second session featured all of Euphrates' members. They introduced a project in which he or she was involved, or described a personal research topic to illustrate specifically how it led to the creation of a new form of expression from a particular idea—Euphrates' underlying aim. The research that sets Euphrates' activities apart is carried out freely, across a wide spectrum, based on the interests of each member. Some expressions coming out of that research have already taken shape, while others await their time to appear, suggesting that Euphrates will still have much to offer in future.



Shueitai 100

Speakers : Chihiro Minato + Dainippon Type Organization

The discussion by Chihiro Minato, who has published photo collections for Imprimerie Nationale and for Shueitai workshop, and Dainippon Type Organization (Hidechika and Tetsuya Tsukada), the duo in charge of this exhibition's publicity materials and spatial design, focused on how to show Shueitai and the changes it has undergone, linked to technological developments, during its 100 long years in existence. Dainippon said that while introducing Shueitai's history, they fulfilled their role by creating an exhibition space that would be entertaining. While they revealed the true intent injected into the publicity design and the aim behind the exhibition layout, Minato spoke of the history and weight he felt while doing the photo shoot, and of where digital fonts, commencing with electronic books, are heading – an issue we face today. The conversation then turned, as with the exhibition, to a discussion of the past, present and future of the written word. Minato's expression of "type travels" left a particularly strong impression.



Push Pin Paradigm

Speakers : Paul Davis + Myrna Davis

This Gallery Talk featured two guests: Paul Davis, a member of Push Pin Studios during its early years who historically had one of the most seminal influences on the studios; and Myrna Davis, also one of the studios' former members. The session began with each guest relating anecdotes from the studios' formative years and explaining how they came to join Push Pin. They then talked in great detail about each of the works on display: posters by four designers created primarily in the 1960s. Mr. Davis spoke of his enduring admiration for the works of Milton Glaser. Looking at Glaser's works, he said, it was clear how, in an era without computers, Glaser continuously experimented with enlargement/ downscaling, cut and paste, segmentation and the like. The talk afforded insight into the mutual respect and trust exercised by Push Pin's members, as well as a glimpse into the golden age of design in New York, and probed into the overwhelming appeal of illustration and design.



Seas and Mountains and Norito Shinmura

Speakers : Norito Shinmura + Osamu Fukushima

Norito Shinmura and Osamu Fukushima's upbringings are in some ways similar: one hailing from the family of a fisherman and the other a farmer's family; both are graduates of vocational schools; and both have followed similar professional paths since graduation. The two designers said they demonstrate that it is possible for someone from the boonies, someone whose education hasn't gone beyond the level of vocational school, to create wonderful works. They thus sent out a message of encouragement to young people, telling them that if you stick with it, you too can succeed. The environment in which Shinmura grew up inevitably imbued him with a fascination for nature, and he said that once he found what he liked truly the most to serve as his creative theme – nature – the rest all came “naturally.” With the exhibition title “Seas and Mountains,” he simply hoped to have visitors share in his appreciation of what he likes and thinks is beautiful, the source of his inspiration being the dynamic landscape of his birthplace, the island of Okushima.



Kazunari Hattori: November 2010

Speakers : Kazunari Hattori + Kiyonori Muroga /
Kazunari Hattori + Bunpei Yorifuji

Kiyonori Muroga, editor-in-chief of *Idea* magazine, used his perspective as editor of a design magazine to ask Kazunari Hattori about the underlying concept and design of the exhibition, his intent being to get to the very heart of what Hattori thinks about graphic design. Bunpei Yorifuji, art director, assessed what makes Hattori's design unique as he spoke of his own views toward design. He compared Hattori's design to the figure skating of Mao Asada, and said his own design was more like that of Yuna Kim. What came out of the two sessions was that when Hattori, as a student, was instantaneously enthralled by certain illustration or design, he was confident of his ability to understand, in a moment, a work's style or purpose or something more. It also became clear that Hattori seeks after that sensitivity and strives to create what lurks in his memory, his feelings, in different forms. There is definitely something about his works that people react to, something inexplicable that cannot be expressed in words.



Ian Anderson / The Designers Republic C(H)ōme (+81/3)

Speaker : Ian Anderson

Ian Anderson, founder of The Designers Republic, spoke of the group's 25 years of activity, illustrating his remarks by citing its various projects. His strong and consistent stance toward communication was readily in evidence: while consciously maintaining a position one step removed from London's design scene and community, he opposed commercialism and created numerous works pointing out the dual nature – the inherent contradiction – in things. In communication, he contends that what is important is not *what* one says but rather *how* one says it, and places greater weight on bringing abstractionism into design; and it was as a result of this stance that he began using Japanese kana, which he himself is unable to read. The images held of Japan, he said, are as a symbol of commercialism or a dystopian worldview in the style of *Blade Runner*. In Anderson's discussion of the abundant use of Japanese characters and kana in TDR's designs, one could sense his love for Japan.



phono/graph – sound · letters · graphics –

Speaker : Yukio Fujimoto

Marshall McLuhan said that whereas in early times information was acquired and transmitted primarily acoustically, as a result of the inventions of writing, the printed word and perspective, orientation has shifted to the visual. But in the 20th century, he opined, the focus should have shifted again to the acoustic with the emergence of radio and gramophone recording; furthermore, the two-dimensional visual realm functions in total, when augmented by the acoustic realm extending 360 degrees. Yukio Fujimoto said that recording, i.e. *graph*, is a human instinct, and although there exist a variety of recording media and intents, the word “graph” is not used exclusively to indicate the visual. In pondering the meaning of “graphic” today, when paper no longer functions as its medium, the concept of “graph” is being rethought. When a new medium appears, a warning is sounded: “In the name of ‘progress,’ our official culture is striving to force the new media to do the work of the old” (McLuhan), and Fujimoto stated that culture itself needs to be translated going forward.



Issay Kitagawa

Speakers : Issay Kitagawa + Ryoji Tanaka + Toshiyuki Sugai

Tokyo Type Directors Club Exhibition 2010

Speakers : Toshi Ichiyanagi + Katsumi Asaba

2010 Tokyo Art Directors Club Exhibition

Speakers : Takahisa Nakajima + Kosuke Ishige +
Koji Hirayama + Takuya Isojima

DNP Graphic Design Archives Collection II Ikko Tanaka Posters 1953-1979

Speaker : Kazumasa Nagai

Gallery Talk

イアン・アンダーソン／ザ・デザイナーズ・リパブリックがトーキョーに帰ってきた。

イアン・アンダーソン

イアン・アンダーソン 我々「ザ・デザイナーズ・リパブリック」(以下、TDR)はイングランドの北の方のシェフィールドを拠点に25年にわたって1000を超えるプロジェクトを手がけてきたわけですが、ロンドンのデザインシーンとか、デザインコミュニティから一歩引いた感じのスタンスを意識的にとっていました。というのも我々の存在を常にミステリアスな状態にキープしたかったから。どこの会社なのか、何をしていたのかということをおまわり表に出さないように、と。

だから、もしかしたら他の誰かが、「日本のすごく巨大なデザイン会社なのか」と想像するような状況を楽しんでいたわけです。常にそういう遊びをおりこんだ活動をしていたので、たとえば「ファック・ユー・カンパニー」とか、そんなのでOKという感じです(笑)。

また、我々のビジュアルには商業主義へのアンチテーゼとしての意味合いがあって、脱構築的なイメージを多用しています。商業主義の社会では国からいろいろなコントロールがきますけれど、あくまでも消費者である我々がほんとうのパワーを持っている。その消費者のパワーによって、脱構築的なイメージを持続させようとしているわけです。商業主義へのアンチテーゼと関連して、ビジュアルなセックス・シンボルとして女性イメージが乱用されていることへの批判を込めた作品もあります。マクドナルドのロゴを逆さにした作品は、消費させるためのツールとして女性を扱うことに抵抗したものです。

同時に、我々TDRは日本のタイポグラフィや日本のイメージを多用してきました。たとえばこの「ワイブアウト」というプレイステーションのゲーム。ラフアイデアを何個か持って行ってクライアントに見せたら、クライアントが想像していた日本のイメージがあまりなくて、ちょっとがっかりしていました。「日本のカタカナとか使ったやつはないのか…」という感じ。日本のフォントのストックがあまりなかったので、我々TDRのロゴを修正して持参したら納得してくれました。

我々はイギリス人に向けてのビジュアルをつくっていたわけですが、その過程で日本語のタイポグラフィに興味を持ちました。読めないけれど単純にグラフィックとして素晴らしいということで使

い始めたんですが、言語としての用途では使っていませんでした。ただし、その後日本のクライアントと仕事をするようになってからは、なるべく何て書いてあるか事前に把握してから使うようにしています。

そういうこともあって、必ず聞かれる質問の一つが、「TDRはなぜ日本のタイポグラフィである漢字やカタカナ、キャラクターを使っているのか?」なんです。それに対する回答は、まず一つは私たちが使う日本語やキャラクターというのは、どれも直接的に日本には関係しているつもりはないということです。

私には商業主義というものをシンボライズしたいという大きなテーマがありました。私が若い頃の日本のイメージというのは「ウォークマン」であったり、その他のラジカセであったり、テレビであったりというように、商業主義を象徴するものすべてが“Made in Japan”だったわけです。それから1980年代終わりに日本からのニュースで流れてくる渋谷や新宿の風景を商業主義のパラダイスのようなイメージで捉えていました。

もう一つ、影響を受けているかもしれないのはアメリカ映画「ブレードランナー」です。常に興味があるのは近未来に関するサイエンス・フィクション的な世界。“今あるもの”ではなく、“もしも”の世界に関心があります。「スター・トレック」のようなはるか先のユートピア的未來よりも、ディストピア的な「ブレードランナー」の世界観の方に非常に惹かれます。

私はデザイナーとして他者とのコミュニケーションを第一義に重要視しています。デザインしているときは常に、誰に向けて、どのように、どういった形でコミュニケーションをとるかということがいちばん重要であって、たとえば文字詰めであったり、行間のバランスだったりといった、いわゆる技術的なことはそんなに重視していません。

その当時、私が心がけていたのは、コミュニケーションをとるということを主軸に置きながら、どれだけ作品に抽象性を盛り込めるかということでした。“何を言うか”ではなく、“いかに言うか”が重要で、日本のマンガなどを読んでいても、文字は当然理解できないが、何が行われているかというのはタイポグラフィなりグラフィックなりの情報



から読み取り、理解することができました。

当時はまた、普通には読めない新しいアルファベットをたくさん考えていた時期でした。他の言語、それこそロシアのキリル文字だったり、ヘブライ文字だったり、当然、ハングルなども研究していて、試行錯誤しながらアルファベットをつくっていたんですが、たとえばここに日本語の漢字、カタカナ、ひらがながある。これだって自分たちにとっては読めない。読めないという状況は一緒じゃないか。これを単純に引っ張り上げて、再構成するということでもいいんじゃないかと、ふと思いつきました。それが、日本語のカタカナを使い始めたきっかけです。なぜか日本語がいちばん自分たちにフィットした。それが日本語をピックアップした理由です。表現の抽象性と、純粋に新しいコミュニケーションの道具として存在していたわけですね。

我々が日本のカナを多用していた頃というのは、誰もそれが日本語か、そうではないかも分からないくらいの情報量しかなかった。今はある程度、世界的にも日本語というものが浸透していて状況が違いますよね。だから、このあと中国の経済が大きく発展して、例えば同じようなトークを北京でしたときに、「なぜ日本語しか使わないんだ」と突っ込まれると非常に困ることになる。純粋に自分の興味の対象が日本語だったということなんです。次は、カタカナだけではなく、「ひらがな」によるアートワークを実現することを約束したいと思います。

Gallery Talk

Ian Anderson / The Designers Republic C(H-)ōme (+81/3)

Ian Anderson

Ian Anderson After 25 years and thousands of different projects for hundreds of different reasons, it's impossible for me to give an overview of what we do. And in a sense, I feel that the work really talks for itself.

One of the things that we used to do with the Designers Republic was we tried to stay away from networking with other designers so that we deliberately kept a kind of mystique, developed a mystique about who we were and what we did, just because it amused us. The designing part of the Designers Republic is just what we do, but it's not really what we are. And so we had all these different kinds of names that we'd work under, and we'd tell people that the Designers Republic was part of a huge Japanese corporation.

We did a lot of stuff where we were using deconstructed imagery to try and suggest about deconstructed concepts and things. We did a whole load of things that were taking the consumerism further, the idea of the power over the consumer in bigger sense.

This upside-down golden arches = McDonald's one is basically a consumerist sort of thing about female imagery being used, about how sex sells. It's a kind of observation about how women are treated - get the female, dress it up, put the text on, there's an ad.

We were using a lot of Japanese imagery in our work. What happened when we designed for *Wipeout*, a PlayStation game, was we presented the final artwork to the head guy at the games developer for *Wipeout* and he was a bit disappointed because he was expecting to get some Japanese typography on there. But this was in the days before laptops, so we basically just had what we had and the only Japanese typography we had on a disc was the Japanese for "The Designers Republic," so we just put that on the cover and he said, "That's brilliant, that's exactly what I want."

When we first started using Japanese typography, I hadn't been to Japan or to Tokyo, and so we were really just some designers in a northern English city aiming our work at an English-speaking audience, so we really sampled bits of Japanese typography that we

thought looked good, graphically, with our work, knowing that no one else would be able to read it anyway. It wasn't really until we started actually working with Japanese companies and then coming to Tokyo that we thought, "Well, we actually ought to find out what things say beforehand."

I'm aware that time is getting on and I often get asked about why the Designers Republic started using a lot of Japanese imagery or typography and things and what influenced us to do that.

There are a lot of different reasons, none of which are really directly related to Japan itself. The first one is I find a lot of inspiration in consumerism. If you go back to when we started the Designers Republic in the mid-80s, it was before the Japanese economic bubble burst. In the UK, and I think in the West in general, there was just all the best Sony gadgets, the smallest Walkmans, TVs and everything, and everything that a young man aspired to own, seemed to be Japanese. Also the images that we saw of Tokyo in magazines looked to be just sort of a consumer heaven. So in some ways, for us, using Japanese imagery for a primarily UK audience, it was really that Japanese modern culture was used as a shorthand for consumerism.

And another thing is a reference to a lot of the ideas in the film *Blade Runner*. I'm interested in "what if" than in "what is," and that translates into a sense of near future, in sort of sci-fi terms as opposed to the far future. So it's more the dystopia of *Blade Runner* than the utopia of *Star Trek*.

And the third reason is, this is more specifically about the typography and one of the things that drives me now, I'm more interested in communication and the impact of that than graphic design. Design is really just there as a vehicle for the ideas.

So for me, what I'm interested in is what you say, why you say it, who you say it to, and how. That's what I consider, really, when I'm thinking about a piece of work. What I was trying to find was different ways of communication. And to do that, what I wanted to do was to



see how far you could abstract graphic design or, more specifically, typographic design before it became totally illegible.

I wanted just to see how much, in terms of typographic communication, was down to the how you say as much as the what you say element of it. So, I could look at Japanese magazines or Japanese ads, and although I couldn't read it, I could understand or have an idea of what it was about, purely because of the tone of voice of the typography.

The first thing that we did was we started to try to draw a new alphabet that nobody could read, a series of symbols that suggested letterforms.

The reason we landed on the Japanese typography was that we realized that for all we were trying to draw a new font or a new alphabet that was illegible to our audience, a UK audience, there's actually already one that existed and it was Japanese. So really, one of the reasons that there's a lot of Japanese stuff at that time in our work was as much about a typographical experiment. We were just literally lifting things that expressed something, but we knew that our target audience wouldn't be able to read it. We were just trying to find vehicles for different ideas.

When we were going through the process of looking to build our own alphabet, we didn't just look at Japanese. We looked at Cyrillic, Russian, Hebrew, and the Korean alphabet as well. With Japanese, just by using Japanese text, from an English perspective in the 80s and 90s, Tokyo seemed to be like a parallel universe. Everything seemed to be familiar, except we couldn't read anything.

I think there's a difference now in that although it's only 25 years ago, the world was quite a different place, as you know. When we were using Japanese imagery, it really was just something that you could have made up, there was the sense that people wouldn't go there, it was the other side of the world, but I think we're much more aware now.

And I promise that we'll do some artwork with not only katakana but also with "hiragana" in the future.

Gallery Talk

GRAPHIC WEST 3 phono/graph — 音・文字・グラフィック —

藤本 由紀夫



藤本由紀夫 今回phono/graphというタイトルで僕を含む5組のクリエイターと発表をしたわけですが、実は2001年に「四次元の読書」という個展をCCGAで開催した経緯があります。マルチメディアという考えのもとに、視覚だけではない読書というものを多角的に捉えようとしてしました。それから10年経って、去年あたりからの流れは、紙というものが無くなるかもしれないという状況が現実的になってきた。そういう中でもう一度書物を考えられないかと思って、今回の展覧会を企画したわけです。

phono/graph という音にかかわるテーマを取り上げた契機が3つあります。

ひとつは、1970年に稲垣足穂という小説家がラジオに出ると新聞で知って、テープレコーダーで録音したわけです。当時、足穂にはまっていた、繊細な小説家のイメージがあったのですが、ものすごいダミ声の関西弁の早口でびっくりしました。このインタビューは後に出版されましたが、文字だとあっさりとしています。音を正確に文字にすること、graphすることは不可能ではないかという考えが浮んだ最初の強烈な体験です。

もうひとつは、マルセル・デュシャンが1957年に、アートについて講演をしたときの文字原稿を自身が朗読したものが録音されていて、CDになった。それを聞いたんですが、しゃべり方の独特のリズムが気になった。「あ、これ音楽だ」と思ったので、CDをかけながら、卓上にあったキーボードのリズムボックスを鳴らして勝手に和音の伴奏を付けてみました。そうしたらリズムに合わせて、みごとにデュシャンが歌い出したんです。こうやって聞くと、彼はそれほど難解なことを言っているのではないことが感じられます。声の力って強いなと感じました。

3つ目やはりデュシャン。彼が言うところの半レディメイド(既製品に少し手を加えている作品)に「WITH HIDDEN NOISE(隠された音に)」があります。荷造り用麻縄の巻き玉を2枚の真鍮の板の間に、4本のボルトでネジ止めた作品です。巻き玉のなかには、本人も知らない何かが入っている。この作品は振って音を出さないと意味がないと僕は思う。音が聞えて初めて存在がわかるわけです。これも「目に見えない」ということを

記録しようとする彼のひとつの挑戦の現れでしょう。彼は網膜に映る像を記録する絵画を非難しています。絵画は知性で描くのだと言っています。

デザインの分野では「視覚」が絶対的で、聴覚について考慮することはほとんど無いと思うのですが、僕は逆に目よりも耳の方が多くの情報を受け止めたり、操作したりしているのではないかと思います。それは哲学者であるヴィトゲンシュタインの言う、「自分の目の前にあるものを見るというのは、なんと難しいことだろう」ということでもありますね。見るというのは、自分から距離を離さないといけない。しかも視野が限られているので全てを見ることができない。それに対して、寺田寅彦のように耳を閉じることはできない、いつも受け入れなければならない。目と違って前後左右360度、全部の音を聴いている。この違いは大きい。

マクルーハンは20世紀が電子メディアになっていって、社会生活や思考、表現がまったく変わると言ったわけですが、要は聴覚機能を取り戻せということ。我々の生活の中における情報空間は、もともとは聴覚がメインだったと言っている。それがひとつは文字がグーテンベルクによって活字化され、目で読む社会になった。もうひとつは、絵画では同じ頃に遠近法が登場したことによって、情報の主役が視覚に変わってしまった。彼はそれを攻撃しているわけです。

人間には何かを記録しようという本能があって、いろんな記録方法があるわけですが、それはたぶんgraphという言葉になるんだと思う。

phonographはエジソンが蓄音機に付けた名前です。graphは決して視覚的なものだけを表すものではない。何らかの形で異なるメディアに残そうという、人間の好奇心が生み出すものではないでしょうか。グラフィックデザインの場合は、今までは紙の上にビジュアルで載せていくことが主役だったけれど、紙だけではメディアとして機能していかない時代になっていることを、もう一度我々自身が考え直さなきゃいけないのではないのでしょうか。

タイトルのphono/graphですが、エジソンが発明するより20年くらい前の1860年にフランス人のレオン・スコットという人が既に音を記録して

いたんです。それがphonograph。phono-auto-graphで「音を自動的に記録する」装置をつくった。興味深いのはスコットが印刷技師だったことです。エジソンが音の記録及び再生にこだわったのに対し、スコットは、目にみえない音をいかに視覚的に記録するかだけにこだわっていたことが、phono/graphというタイトルを思いついたきっかけです。そういったことも踏まえて、graphを軸にするともっと広がったアプローチができるのではないかと考えて展覧会名にしたわけです。

メンバーは何の迷いもせずに今回参加して頂いた方たちが浮かびました。そして、私が作品を選ぶのではなく、phono/graphというキーワードを提示したら、今どういう作品が出てくるんだろうということからスタートしました。と同時に、今回参加したニコール・シュミットさんの五分冊の本をみんなに見てもらい、これをもとに展覧会を構成できないかと提案したんです。彼女の「文字と音」という、世界でも例を見ない、音と文字について総合的にまとめた本です。なお、ニコールさんのお父さんは有名なタイポグラフィのヘルムート・シュミットさんです。ヘルムート・シュミットさんも、音と文字について非常に興味深い実験的な取り組みをされています。文字・音・グラフィックという3つの関係の中で、それぞれ、自由に考えてもらって表現をする。それが大きなコンセプトとなりました。

それで今回も分かったんですけど、やはり紙は減びない、紙はすごいということ。展覧会にもいろんな形のもが出てきている。それは、会場に来てくれたみなさんも感じてくれていると思うんですね。

Gallery Talk

GRAPHIC WEST 3 phono / graph – sound · letters · graphics –

Yukio Fujimoto

Yukio Fujimoto At this exhibition under the title “phono/graph,” I showed my works along with four other artists; previously, however, I held a one-man show at CCGA in 2001 titled “Reading to Another Dimension.” On that occasion, based on the concept of multi-media I attempted to express the act of reading not just as a visual experience but from multiple angles. Ten years later, the trend in evidence since last year or so suggests that paper may be heading toward oblivion. Against that backdrop, I began to wonder whether it might be possible to think about books once again – and this is what led me to plan this latest exhibition.

Three occurrences occasioned my choosing “phono/graph,” a concept having to do with sound, as my theme.

First, in 1970 I read in the newspaper that Taruho Inagaki, a novelist, was to give an interview on the radio, and in happy surprise I decided to record it using a tape recorder. I was totally enthralled by Inagaki’s works at the time and the image I held of him was of a sensitive writer; yet what I heard coming from the radio live was someone speaking in a gruff voice in Kansai dialect at great speed. On the written page later published, what he said came across quite placidly. That was the first time in my life that I experienced so powerfully that transforming sound to letters – the process of graph – is beyond the realm of possibility.

The second time was when I heard a CD of Marcel Duchamp reading the written text of a lecture on art he had given. As I listened I felt there was something unique about the rhythm of his speech. “This is music!” I thought. I used the rhythm box of the keyboard on my desk to create a harmonic accompaniment. I immediately discovered that Duchamp was “singing along” in perfect step. When you listen to him this way, what he says no longer seems so abstruse – that’s how strong the power of the voice is, I now realized.

The third occasion also had to do with Duchamp: a work of his titled “WITH HIDDEN NOISE,” which he referred to as a “semi-ready-made,” something created from an existing

object but with touches added. “WITH HIDDEN NOISE” consists of a ball of twine pressed between two brass plates joined by four long screws. The ball of twine contains something – its actual identity unknown even to Duchamp himself – that produces a rattling noise when the work is shaken. I think the work would be meaningless if it didn’t produce any noise. When you hear the noise, you realize it actually exists. It’s an expression of Duchamp’s attempt to record something that is invisible to the eye. Duchamp was critical of paintings that record images that are reflected by the retina; he said paintings were meant to be created by human intellect.

In the realm of design, though, the visual is accorded absolute importance and no thought is given to our sense of hearing. In my opinion, however, we actually take in and manipulate more information with our ears than with our eyes. This is what the philosopher Ludwig Wittgenstein was referring to when he wrote how difficult it is to see what is before one’s very eyes. By contrast, it is impossible, as physicist and author Torahiko Terada said, to close one’s ears; one must always take in what they hear. Unlike the eyes, the ears hear all the sound around us – 360 degrees. This is an enormous difference.

Marshall McLuhan said that the 20th century would become an era of electronic media, the result of which would be total changes on the fabric of society, its thinking and its ways of expression. The gist of what he suggested is that we should recover our aural capabilities. He states that originally it was the human sense of hearing that formed the core of the information zone within our lives; then society shifted to reading with the eyes, by the invention of printing by Gutenberg. Also, with the emergence of perspective in the realm of painting, the visual came to take center stage as the source of information – a trend against which McLuhan rebelled.

Humans have an instinct desire to record things, and there exist various ways of recording – summed up in the word “graph.”

“phonograph” is the name given by Edison to



his gramophone machine. It is by no means limited to an expression of the visual alone. The desire to leave a record in some form in a different medium perhaps derives from our human curiosity. In the case of graphics, until now the process of recording something visually on paper was of key importance; but today I believe we ourselves must recognize anew that paper alone will not continue to function as the sole medium for doing so.

Some twenty years before Edison invented his phonograph, in 1860 Edouard-Leon Scott de Martinville of France created a device that recorded sound. He named it the “phonograph” from the words meaning “automatic recording of sound.” Of interest is the fact that Scott de Martinville was a printer by profession. In contrast to Edison, who focused on the recording and reproduction of sound, Scott de Martinville was interested only in how to record visually sounds invisible to the eye, and this was the inspiration behind my coming up with the title “phono/graph.”

It came to my mind immediately, and without wavering, just whom I should ask to participate in the exhibition. And rather than describing any specific direction for their works, I merely presented them with the title “phono/graph” and waited to see what kind of works they would come up with. Meanwhile I had everyone look at the five-part book series by Nicole Schmid, one of the participants, and proposed that perhaps the exhibition could be configured around it. The book is a compendium, without equal anywhere, of her research in the realm of letters and sound. Ms. Schmid is the daughter of Helmut Schmid, the renowned typographer who also undertook extremely interesting experiments relating to letters and sound. I had the other participants think and express themselves freely within the relationships among letters, sound and graphics, which became the overall concept.

What I learned from this exhibition is that paper is amazing – and not about to vanish after all. The exhibition produced things in a variety of forms. This is something I believe everyone who came to see the show felt also.

秀英体100 トークショー

片塩 二郎、鳥海 修、石岡 俊明、
伊藤 正樹（DNP 秀英体開発室 司会）



大日本印刷の前身秀英舎は、佐久間貞一、大内青樹、
宏弘海、保田久成らによって、1876年(明治9)に京
橋区西紺屋町角(数寄屋河岸御門外弥左衛門町1番地)
で、当時最新技術の活字版印刷所として創業した。
当初は『明教新誌』や『開知新聞』などの定期刊行物の
請負印刷が多かったが、英国人サミュエル・スマイル
ズによる『Self Help』の翻訳書『西国立志編』(中村正
直訳 1872年木版刊本11巻で刊行)の再版を、佐久間
貞一自身の説得によって活字版印刷による受注に成
功し、活字版刷り洋装本全1巻として1877年(明治
10)に刊行された。同書は文明開化に沸き立つ明治の
読書人の心を捉え、大ベストセラーとなって経営的な
基盤の確立をみた。

創業当時の秀英舎では、平野活版所(東京築地活版製
造所)や紙幣局活版部(印刷局活版部)から活字を購入
することが専らだった。しかしながら日日増大する組
版業務の旺盛な需要に応えるために、保田久成の主導
によって自社における活字鑄造、活字原字製作、活字
母型製造までを次第に手がけるようになった。
手はじめに1881年(明治14)7月に活字鑄造機とわず
かな活字母型を購入し、翌年9月に秀英舎活字鑄造部
として、逸見久五郎を代表とする製文堂を京橋区山下
町に新設した。製文堂は1886年(明治19)にほど近い
京橋区元数寄屋町(現在の銀座ソーニビルあたりに)
に移転し、それ以後1923年(大正12)関東大地震で罹
災するまで同所を活字製造の本拠地とした。活字鑄造
機も素朴な流し込み式活字鑄造器(ハンド・モールド)
から、ブルース型手廻し活字鑄造機、トムソン型自動
活字鑄造機へと発展し、さらには大量のページ物組版
に対応するために、各社から相次いで開発された自動
活字鑄植機を積極的に採用した。すなわちここが「秀
英体・秀英型」と呼ばれるに至った活字書風の揺籃の
地であり、熟成の地となり、「秀英体」にとっては記念
すべき場所となった。

秀英舎と東京築地活版製造所は、銀座と築地という隣
接地にともに社屋を構え、両社の創業者の佐久間貞一
と平野富二が「肝胆相照らす仲」とされるほど多方面
での提携を重ねた企業であり、またよき競争相手でも
あった。奇妙な偶然だったとされるが、英国人ジョン・
サウスワードの782ページに及ぶ大冊『Practical
Printing』(John Southward, 4th ed. Printers
Register, London, 1892)を、秀英舎第2代社長・保
田久成が翻訳して『印刷全書』(全3巻 印刷雑誌社 明治
25年12月27日)として刊行した。また東京築地活版
製造所第2代社長・曲田茂が抄訳『実用印刷術珍書』
(全9巻 東京築地活版製造所 明治25年11月24日)と

してほぼ同時期に刊行した。このように両社には第一
等の教養人が中核におり、また双方の熾烈な切磋琢磨
の相乗効果もあって、活字製造はもとより、活字版印刷
術も明治の中期にいたると長足の進歩を遂げていた。
「秀英体」と呼ばれる活字書風は、一朝一夕にできあ
がったものではない。秀英舎が独自の冊子型活字見本
帳を製作したのは1894年(明治27)の『活字類見本 未
完成』である。これをみると和文活字書体のほとんど
は、源流としての東京築地活版製造所と紙幣局活版部
の活字形象から大きくは脱していない。しかしながら
四号明朝と三号明朝にはすでに相当独自色がみられ
て、改刻の跡が顕著にうかがえる書風を築きつつあ
る。とりわけ四号明朝体は『印刷雑誌』1895年(明治
28)4月号に広告が掲載され、相当の精力を傾注して
改刻を実施し、自社使用だけでなく、外部企業にお
けての活字販売に進出をはじめたことがわかる。いっ
ぱう本文書体として既に一定の完成をみていた五号
明朝体には、おおきな改刻の痕跡はみられない。

秀英舎はその後も精力的に『活版見本帖 未完』(1896
年ごろ)、『活版見本帖 Type Specimens』(1903年)と
いった大型活字見本帳を発行した。この『活版見本帖
Type Specimens』には、秀英体のフラッグシップと
もされる秀英初号明朝が本格的に紹介されている。秀
英舎の活字見本帳はこれ以後この『活版見本帖 Type
Specimens』をひとつの基準として増補をかさね、さ
らに書体と号数毎に、全字種を部首別に紹介する「活
字摘要録」の刊行が盛んとなった。この周辺の詳細は
『秀英体研究』(片塩二郎 大日本印刷 2004年12月12
日)に詳しい。
「秀英体」が活字書風として確立するのは初号明朝か
ら八号明朝までのフルサイズの本文用書体を完成し、
補完するゴシック体、楷書体、欧文活字、装飾活字な
どが出揃った1912年(明治45)とみてよいであろう。
すなわち明治45年、大正元年にあたる1912年に秀英
体活字は最高潮を迎えていたのである。
しかしながら、大正時代から昭和期の前半、第二次世
界大戦の終結までの秀英体は、号数体系活字からポイ
ント制活字への慌ただしい移植の時代を迎え、比喩的
にいうと、雨後のタケノコのように林立した活字母型
製造所などによって、小さな靴をむりやり履かされたり、
プカプカのシャツを着せられる時代を迎えた。世
はまさに円本ブームに沸き立ち、書物の製作に速度と
経費が異常に重視される時代を迎えた。そしてこの間
に、活字種字彫刻士や活字母型修復士はほとんどわが
国から払底していた事実は看過できない。
さらにその後の秀英体には、関東大地震、太平洋戦争

などの災禍がおそいかかった。その間に最大のライバ
ルであった東京築地活版製造所は、関東大地震の激甚
な被害を回復できないまま、業績不振を理由として
1938年(昭和13)3月に自らの手によって解散を決議
して、ひっそりと消えていった。
秀英舎にも地震と戦災の被害は激甚なものがあつたが、
幸い銀座周辺から市谷に工場施設の一部を移転して
いたため、ふたつの大きな試練を乗り越えることがで
きた。戦後の再建にあたって、大日本印刷ではそれま
での活字製造の伝統を再評価するとともに、その敏速
な回復をはかるために活字製造における戦略的な展
開をはかった。それは新技術の機械式活字父(母)型彫
刻機(わが国ではベントン／ベントン型彫刻機と略称
されたが、ほとんど活字母型の彫刻に用いられた)の
採用であり、それにとまなう活字原字の整備であつた。
大日本印刷では自社の活字資産のうち、明治末期から
の秀英体の蓄積をもととして慎重に活字原字を整備
した。その整備の作業は戦後まもなくの1948年(昭
和23)から着手され、機械式活字母型彫刻機によるあ
たらしい活字が1951年(昭和26)から通称「A1明朝」
をはじめとして続々と誕生した。復興にあたって各種
の戦前からの活字書体を検証しているが、このときに
採用されたのは秀英四号明朝活字からの清刷りであ
つたことは特筆されて良い。そしてそれは光学式活字
組版機「電算写植機」に継承され、さらには電子式活
字組版機「タイプ・セッター」にも継承されて、現在
の文字活字と画像を一括処理する「イメージ・セッ
ター」にまで継承されている。
その戦後からの50年ほどのあいだに、これもまた比
喩的にいうと、秀英体にはまず機械式活字母型彫刻機
による機械メスが入られ、ついでビットマップ・フ
ォント・フォーマット、アウトライン・フォント・フ
ォーマットという電気メスが容赦もなく入れられつ
づけてきたといえる。
つまり秀英体はその誕生から100年余を経過して、工
芸者・技芸者の時代から技術者の時代を経てきた。そ
の間に工芸者たる活字父型彫刻士の彫刻刀による微
細なカーヴや、いうにいわない手技のぬくもりのこ
ときものは、機械メスと電気メスによって脱落させら
れた。したがって当時の秀英体は一見精緻なたたずまい
をみせていたものの、すっかり整形され、ある意味で
は機械生産品がもつ、均一ながらも無表情で鋭利な文
字形象と化し、いくぶん痩せ衰えた形姿になってい
た。つまるところ、わが国のすべての明朝体とは、明治
からの遺産を食いつぶしてきたともいえたのである。
秀英体の書風の変遷を分析した『秀英体研究』の刊行



Shueitai 100 Talk Show

Jiro Katashio, Osamu Torinoumi, Toshiaki Ishioka,
Masaki Itou (Shueitai Development Department: Moderator)

がひとつの契機となって、2005年(平成17)秀英体の原点を再検証し、この貴重な文化資産をリニューアルし、次世代に継承するための大事業「平成の大改刻」がスタートした。まず結集したメンバーは、ながらく「秀英体プロジェクト(現・秀英体開発室)」として『秀英体研究』刊行までの4年余の苦楽をともにしたDNP内部の俊英だった。

本文用基幹書体の「秀英細明朝」「秀英中明朝」「秀英太明朝」の開発では、昭和中期の先達が試みた「A1明朝」のプロセスを検証し、さらに「秀英四号明朝」を徹底的に分析・調査することからはじまった。こうしてプロトタイプをワーキング・グループのメンバーを交えて再再の合議をかさね、さらに印刷適性を実機をもちいて各種の本文用紙のうえで検証をかさねた。

こうして一定の合意を得た秀英明朝体の骨格を援用して、あらたな「秀英角ゴシック」の開発もスタートした。また別のワーキング・グループでは、秀英体のフラッグシップともいえる「秀英初号明朝」を、こちららは金属活字時代の形象に極力肉薄する「復刻作業」として進化した。あわせて顧客から要望の多い「秀英丸ゴシック」の新開発にも着手した。

この間、主要顧客と斯界の権威をたすねて、プロトタイプに関する要望を録取し、それを開発メンバーに還元しながら作業の進捗を図った。また2009年からはモリサワからの一般販売も順次はじまっている。

秀英体が活字書風として確立したのは既述のように1912年(明治45)のことであった。すなわち2011年(平成23)は秀英体100年目にあたることになる。「秀英体100」展が各地で開催され、多くの来場者を迎えているのは嬉しいことである。また明治から昭和にかけて発行された秀英体のさまざまな見本帳が閲覧できるiPhoneアプリの公開や、秀英体の歴史と現在を連結するところも積極的におこなわれている。

「平成の大改刻」の取り組みは、100年余におよぶ長い歴史の資産を継承しつつ、つねに時代の風潮に適合し、柔軟に姿と形を変えてきた文字文化資産「秀英体」の100年を継承し、さらなる100年への歩みの第一歩を踏み出したにすぎない。まだまだウェイトと字種の拡張、新書体の開発と、道のりははてなく続く。その中間報告としての「秀英体100」展である。

秀英体「平成の大改刻」監修者：片塩二朗

※本稿は、ggg「秀英体100」展関連イベントとして開催された<秀英体展示室見学&トークショー>を基に、平成の大改刻監修者である片塩二朗氏に、秀英体の誕生から平成の大改刻までの流れを改めてまとめていただいたものである。

Shueisha, the forerunner of Dai Nippon Printing Co., Ltd. (DNP), was founded in Tokyo, in the area today corresponding to Sukiwabashi, in 1876. Its founders, who included Teiichi Sakuma, Seiran Ouchi, Hiroshi Bukkai and Hisanari Yasuda, started Shueisha as a company specializing in letterpress printing, a brand-new technology at the time.

Initially the company was heavily dependent on printing periodical publications, notably newspapers, on a contract basis. Then Teiichi Sakuma succeeded in winning an order to produce a reprint of the first Japanese translation (by Masanao Nakamura) of Samuel Smiles' *Self-Help*; this famed work would be printed as a single volume bound in Western style adopting letterpress printing, superseding the original 1872 version that had required 11 tomes produced by woodblock printing. The new book, published in 1877, won the hearts of Japanese readers in the Meiji era passionately seeking the cultural enlightenment of their country, and it became a bestseller, thereby setting Shueisha on solid financial ground.

In those early days Shueisha generally purchased its movable type from the forerunner of the Tokyo Tsukiji Type Foundry, which was established by Tomiji Hirano, or from the Paper Money Bureau, corresponding to today's National Printing Bureau. But to cope with rapidly expanding demand for typesetting, the company gradually took, under Hisanari Yasuda's lead, to manufacturing its own type and matrixes.

To begin, in July 1881 the company bought a type casting machine and a small quantity of matrixes. Then in September 1882 it established its own cast making department which it named Seibundo, headed by Hisagoro Itsumi. In 1886, Seibundo relocated to Sukiwabashi where the Sony Building is situated today, and here it continued to serve as Shueisha's main type manufacturing arm until it suffered damage in the Great Kanto Earthquake of 1923. Gradual advances were made in the company's type casting machinery: starting with a simple hand mold system, the company next adopted a Bruce pivotal type caster, then a Thompson type caster, and then various typesetting machines that had been developed by different manufacturers. Seibundo was thus where the typeface that came to be known as Shueitai was born and matured, and Sukiwabashi is where it all began. Shueisha and the Tokyo Tsukiji Type Foundry were

located in close proximity, Ginza and Tsukiji, and their founders – Teiichi Sakuma and Tomiji Hirano, respectively – were bosom buddies. The two companies entered into business tieups on various fronts as a result, even as they remained mutual competitors. The rivalry took a curious additional form: in December 1892 Shueisha's second president, Hisanari Yasuda, published his own translation of John Southward's 4th edition of *Practical Printing: A Handbook of the Art of Typography* (1892), a massive work of almost 800 pages; and just one month earlier, by complete coincidence Shigeri Magata, successor to Tomiji Hirano, published his own abridged translation of the same work. In this respect both Shueisha and the Tokyo Tsukiji Type Foundry were run by cultured men of the highest order, and the powerful synergy created by their collaboration fostered long strides of progress not only in movable type production but also in letterpress printing technology during the middle of the Meiji period (1868-1912).

The typeface known as "Shueitai" didn't come about overnight. In 1894 Shueisha created a type specimen book of its own design, but with clear notification that it was a work in progress. Moreover, scrutiny of the booklet reveals that nearly all its type in Japanese fundamentally diverged only modestly from the type forms of the Tokyo Tsukiji Type Foundry or the Paper Money Bureau. There were two notable exceptions, however: Mincho type No.3 (16pt) and No.4 (13.75pt), which were quite unique and demonstrated that Shueisha was slowly but steadily forging a style of its own. In April 1895 the company even advertised the No.4 type in a magazine on printing, demonstrating its zeal to go beyond use of the new style in-house only and market its type to other enterprises. By contrast, little reworking was in evidence in the company's Mincho No.5 (10.5pt) type, which had already been largely perfected as a typeface for text copy.

Subsequently Shueisha continued its assiduous publication of large-scale type specimen books, first around 1896 and again in 1903. The latter book, titled *Type Specimens*, presented a full-fledged introduction to Shuei Mincho No.1 (42pt), which is considered the flagship in the Shueitai lineup. *Type Specimens* became a model on which the company's later specimen books were based. Gradually the company began publishing compen-

diums for each typeface and point size.

Shueitai can be said to have become firmly established as a typeface in 1912. That was the year Mincho was completed as a full lineup, from No.1 (42pt) to No.8 (4pt), for body text, complemented by Gothic, *kaisho* (square block), Western and ornamental variations. The year 1912, which also marked the transition from the Meiji to the new Taisho era (1912-1926), was in effect a high point for the Shueitai typeface.

From this time through to the end of World War II, however, Shueitai went through a period of change as typefaces made the transition from the native No.1-8 size system to the Western point system. In the interim, matrix manufacturers sprouted in great profusion amid a boom in the production of affordable series of complete works, and to an inordinate degree emphasis came to rest on speed and low production cost. Meanwhile the country itself was virtually stripped of manpower capable of sculpting or repairing movable type. Further blows were dealt by the Great Kanto Earthquake (1923) and then the war waged throughout the Pacific. Shueisha's foremost rival, the Tokyo Tsukiji Type Foundry, sustained such severe damage during the quake that it was unable to recover, and in March 1938, citing poor business performance, it chose to disband and vanished without fanfare. Shueisha too was immensely impacted by the Great Kanto Earthquake and the war, but fortunately, having partially relocated its factory facilities from Ginza to Ichigaya, the company was able to weather both of these formidable ordeals.

In the period of postwar reconstruction, DNP undertook a reevaluation of its traditions in type production and took strategic initiatives in this area in a quest to achieve swift recovery. Those initiatives entailed the adoption of Benton type punch (matrix) cutting equipment, featuring innovative technology at the time, and stylistic reforms to its characters. DNP went about these reforms cautiously, based on its in-house legacy in movable type: its accumulated Shueitai legacy tracing back to the late Meiji period. The process was launched shortly after the war, in 1948, and with the adoption of mechanical matrix cutting equipment new typefaces began to appear in rapid succession, starting with the A1 Mincho in 1951. In the process of recovery, an examination was made of all type styles from the prewar era, and what DNP adopted

was a reproduction proof from Shuei Mincho No.4. This was carried on in photo-typesetting equipment, then in electronic typesetting systems, and ultimately in today's imagesetters for processing both type and images.

In the half-century after the war, Shueitai first underwent unmerciful "mechanical surgery" via mechanical matrix cutters and then "electrical surgery" through bitmap font formatting and outline font formatting. As a result, in the more than 100 years since its advent, Shueitai went from the era of the artisan and craftsman to the era of the engineer. In the interim, the ineffable warmth and fine curves arising from the carving knife of the punch cutter – the artisan – were lopped away by mechanical and electrical surgical knives. As such, whereas in early times Shueitai had the appearance of a highly meticulous style, it was surgically transformed completely, in a sense becoming lettering forms that are uniform but expressionless and sharp, in the way mechanically produced products are; and it became somewhat a gaunt shadow of its former self. In a nutshell, Japan's Mincho types all developed by paring away their own legacy from the Meiji era.

In 2005, in tandem with the publication of a study on Shueitai by DNP, the company undertook a reexamination of the typeface's origins and launched a major project to renew Shueitai in a way befitting the current Heisei era, as a precious legacy to be passed on to the next generation. The project members were drawn from DNP's staff who had been engaged in the challenging work toward publication of the Shueitai study, an undertaking that had taken more than four years.

The project began with an examination of the three basic fonts for body text (Shuei Mincho light/medium/bold) and of the A1 Mincho process attempted roughly a half-century ago, coupled with a complete analysis and study of Shuei Mincho No.4. Rounds of discussions on prototypes took place together with members of the working group, and demonstrations were made of printing feasibility on different types of paper using actual production equipment.

In this way, the framework for a new Shuei Mincho type meeting a certain consensus was adopted, setting in motion the development of a new Shuei Gothic. Meanwhile another working group proceeded toward reviving Shuei Mincho No.1, the



flagship of the Shueitai style, as closely as possible to the forms used in the days of metal type. Concurrently, development was launched on a new Shuei Round Gothic, in response to strong customer demand.

During this phase visits were paid to core customers and authorities in the field, records were made of requests concerning prototypes, and work got under way as this information was relayed to the development team. Since 2009 the new typeface is being licensed to Morisawa.

As noted above, Shueitai was firmly established as a typeface style in 1912. The year 2011 thus marks its 100th anniversary in use, and to commemorate this milestone the exhibition "Shueitai 100" was held at multiple locations around Japan, attracting numerous visitors. An iPhone app was also opened that enables viewers to see a variety of Shueitai specimen books published between the Meiji and Showa eras, and other attempts are being proactively made to connect the history of Shueitai with the present.

Through its history of more than 100 years, Shueitai has formed a legacy continuously remolded to fit the atmosphere of its time, flexibly changing its forms. The initiative to renew Shueitai for the Heisei era is merely the first step in passing on that legacy for another 100 years. The road ahead is boundless, still involving expansion in weights and character types and the development of new typefaces. In that respect, the exhibition "Shueitai 100" constituted a progress report.

Jiro Katashio
Advisor to the project
to renew Shueitai for the Heisei era

* This text was based on the talk show held in conjunction with the "Shueitai 100" exhibition mounted at ggg. Mr. Katashio kindly agreed to rework that discussion and add in historical details from Shueitai's advent up through DNP's project to renew Shueitai for the Heisei era.

Publications 2010–2011

出版活動



■ Graphic Art & Design Annual 09-10

- ggg Books 93 ラルフ・シュライフォーゲル
- ggg Books 94 新村則人
- ggg Books 95 服部一成
- ggg Books 96 ザ・デザイナーズ・リパブリック
- ggg Books 88/2 ネヴィル・ブロディ
- プッシュピン・パラダイム
シーモア・クワスト | ポール・デイヴィス |
ミルトン・グレイザー | ジェームズ・マクミラン
- 風下◎立花文穂

- ggg Books 93 Ralph Schraivogel
- ggg Books 94 Norito Shinmura
- ggg Books 95 Kazunari Hattori
- ggg Books 96 The Designers Republic
- ggg Books 88/2 Neville Brody
- Push Pin Paradigm
Seymour Chwast | Paul Davis | Milton Glaser | James McMullan
- Kazashimo◎Fumio Tachibana



Special Event

Ralph Schraivogel Lectures and Workshop

ラルフ・シュライフォーゲル 特別講演会 & ワークショップ

DNP文化振興財団は、8月のggg企画展「ラルフ・シュライフォーゲル展」にあわせて、大阪市立近代美術館(仮称)心斎橋展示室で開催されたラルフ・シュライフォーゲル氏の講演会と地元デザイン学生向けのワークショップ開催に企画協力を行った。また、同様の講演会を、「現代のスイスポスター展」を開催中だった富山県立近代美術館でも開催し、スイス・グラフィックデザイン界と日本の地方美術館との交流を促進した。

富山県立近代美術館で開催された講演会では、シュライフォーゲル氏自身が学生時代から身を置いていたスイスのグラフィック状況を交えて紹介するとともに、自身が手がけた代表的なポスターについてその手法や表現について語った。大阪市立工芸高等学校で開催された2日間のワークショップでは、未来のデザイナーをめざす高校生たちが、「デザインアイデアの見つけ方」をテーマにしたワークショップに参加し、日常の学習では得ることのできない貴重な体験をすることができた。心斎橋展示室で開催された講演会では、タイポグラフィの輝かしい伝統を持つスイスのグラフィックデザインの最新事情を紹介した。



1) 講演会：「スイス・グラフィックについて」

日時：8月7日(土)
会場：富山県立近代美術館 1階ホール
主催：富山県立近代美術館
共催：財団法人DNP文化振興財団、財団法人富山県文化振興財団
対象：富山ADC会員および一般
関連事業：同館でシュライフォーゲル氏の作品10点ほどを含む「スイスのポスター展」を収蔵品から展示。

2) ワークショップ

日時：8月9日(月)、8月10日(火)
会場：大阪市立工芸高等学校
主催：大阪市立近代美術館建設準備室、財団法人大阪市博物館協会
協力：財団法人DNP文化振興財団
参加者：同校2年および3年の「ビジュアルデザイン」あるいは「美術」専攻の生徒から希望者のうち25名を選抜。
内容：
第1日 タイポグラフィの扱い方として、シュライフォーゲル氏が準備してきた文字を使い、コピー機を使い様々な作品を制作。
第2日 日本のスポーツ新聞から写真画像を利用、第1日目で作成したタイポグラフィの作品に組み合わせて作品を制作。プレゼンテーション。

3) 講演会：「スイス・グラフィックの変革」

日時：8月9日(月)
会場：大阪市立近代美術館(仮称)心斎橋展示室
主催：大阪市立近代美術館建設準備室、財団法人大阪市博物館協会
協力：財団法人DNP文化振興財団
後援：スイス大使館





The DNP Foundation for Cultural Promotion, in conjunction with the Ralph Schraivogel exhibition held at the ginza graphic gallery in August, assisted in the planning of a lecture by Schraivogel at the Osaka City Museum of Modern Art, Shinsaibashi Temporary Exhibition Space and a workshop for local design students. A similar lecture was also held at The Museum of Modern Art, Toyama, which was then holding the Contemporary Swiss Poster Exhibition, promoting exchange between the world of Swiss graphic design and a local Japanese art museum. In the lecture at The Museum of Modern Art, Toyama, Schraivogel talked about the world of Swiss graphic design, intermingling his own experiences there since his student days with discussion of the techniques and expressions used in some of his better-known works. The two-day workshop at the Osaka City Kogei High School was dedicated to the topic of "how to discover design ideas." It was a valuable experience for the aspiring-designer high school students who attended – an opportunity unobtainable through everyday coursework. The lecture held in Osaka focused on the latest trends in Swiss graphic design, heir to a brilliant tradition of typography.

1) Lecture: "On Swiss Graphics"

Date: Saturday, August 7
 Venue: The Museum of Modern Art, Toyama (1F Hall)
 Sponsor: The Museum of Modern Art, Toyama
 Cosponsors: DNP Foundation for Cultural Promotion
 Toyama Prefecture Foundation for Cultural Promotion
 Open to: Toyama ADC members and the general public
 Related events: The museum's Swiss Poster Exhibition, drawing on works from its collection including 10 by Schraivogel.

2) Workshop

Date: Monday, August 9 and Tuesday, August 10
 Venue: Osaka City Kogei High School
 Sponsor: Osaka City Museum of Modern Art
 Osaka City Museum Organization
 Cooperation: DNP Foundation for Cultural Promotion
 Participants: 25 second and third year students selected from among applicants majoring in either visual design or art.
 Content (Day1): Learn how to handle typography by producing various works with copy machines using letterforms prepared by Schraivogel.
 Content (Day2): Create works combining photographic images from Japanese sports newspaper with the typographic works from Day 1. Presentation.

3) Lecture: "A Revolution in Swiss Graphics"

Date: Monday, August 9
 Venue: Osaka City Museum of Modern Art, Shinsaibashi Temporary Exhibition Space
 Sponsors: Osaka City Museum of Modern Art
 Osaka City Museum Organization
 Cooperation: DNP Foundation for Cultural Promotion
 Support: Swiss Embassy

アーカイブ事業

Archiving

DNP Graphic Design Archives

DNPグラフィックデザイン・アーカイブ

DNP文化振興財団は、2000年に「DNPグラフィックデザイン・アーカイブ」を立ち上げ、ポスター等の収集・保存・整理を行ってきた。2011年3月末現在のコレクション数は、日本人作家67名、7,513点、海外作家39名、780点。総勢106名、総点数8,293点。

今年度の主なアーカイブ活動は、田中一光アーカイブ、福田繁雄アーカイブに続き、永井一正アーカイブを設立した。その他、日本では故・伊藤憲治氏他4作家、海外ではラルフ・シュライフォーゲル氏他2名より寄贈があった。

また、当アーカイブからの主要寄贈先は、スイスのチューリッヒ造形美術館、台湾・高雄の東方技術学院内、福田繁雄設計芸術館、岩手県の二戸市シビックセンター内 福田繁雄デザイン館、奈良県立美術館等。収蔵作品の主な貸出先は、Bunkamura、東京都庭園美術館、大丸京都、NHK等。また、誠文堂新光社、毎日新聞社等に対して、所蔵品のポジやデータ、画像等の貸出も行った。

Established by the DNP Foundation for Cultural Promotion in 2000, the DNP Graphic Design Archives collects, preserves, and organizes posters and other materials. As of the end of March 2011, the collection consists of 8,293 items by 106 artists (7,513 items by 67 Japanese artists and 780 items by 39 artists from overseas).

Among the major archival activities for the current fiscal year was the establishment, following the Ikko Tanaka and Shigeo Fukuda archives, of the Kazumasa Nagai archives. In addition, we received donations of work from the late Kenji Ito and four other Japanese artists as well as from Ralph Schraivogel and two other overseas artists.

The DNP Graphic Design Archives also donated works to organizations such as the Museum of Design Zurich in Switzerland; the Shigeo Fukuda Design Museum at the Tung Fang Design University in Kaohsiung, Taiwan; the Shigeo Fukuda Design Museum at the Ninohe City Civic Center in Iwate Prefecture; and the Nara

Prefectural Museum of Art.

Works have also been loaned to the Bunkamura Museum of Art, Tokyo Metropolitan Teien Art Museum, Daimaru Department Store in Kyoto, NHK and other organizations, while transparencies, digital files and caption data of collected works have been loaned to companies such as Seibundo Shinkosha Publishing and Mainichi Newspapers.



1. 田中一光 アーカイブ

2010年度は、作品分類を完了しデータベース(DB)整備を進行。他作家コレクション作品やポスター以外の作品や資料の情報を精査し、DBへの登録を進行中。(総数、約20,000点)

<アーカイブ内訳>

① 本人作品	ポスター	約2,600点
	版画	約240点
	エディトリアル	約1,800点
	原画類	約90点
	その他	約2,000点
② 資料	作品ポジ	約1,500点
	その他資料類	約5,700点
③ 他作家作品	ポスター・版画等	約2,200点
④ 蔵書		約4,000点

2. 福田繁雄 アーカイブ

2010年度は、福田繁雄氏の寄贈アーカイブの整理ならびにDBへの登録を継続して行った。

<アーカイブ内訳>

① 本人作品	ポスター	約1,500点
	版画	約180点
	その他	約100点
② 資料	作品ポジ	約1,500点
	その他資料類	約5,700点
③ 他作家作品	ポスター・版画等	約370点

3. 永井一正 アーカイブ

2010年度に、永井一正氏からポスター作品等の寄贈を受け、DB整理に着手した。

<アーカイブ内訳>

① 本人作品	ポスター	約850点
	版画	約300点
	エディトリアル	約1,200点
	原画類	約140点
	その他	約560点
② 資料	作品ポジ	約490点
	その他資料類	約40点
③ 他作家作品	ポスター・版画等	約100点
④ 蔵書		約80点

1. Ikko Tanaka Archives

In FY2010 we finished classifying the works and made progress in organizing them into a database. Items including works from the collections of other artists, non-poster works and informational materials were studied carefully and are now being entered into the database. (Total 20,000 items)

Archive materials

1) Works by Tanaka	Posters	2,600
	Prints	240
	Editorial	1,800
	Originals	90
	Other	2,000
2) Materials	Photo positives	1,500
	Other	5,700
3) Works by other artists	Posters/Prints	2,200
4) Books		4,000

2. Shigeo Fukuda Archives

In FY2010 we continued organizing and entering into a database the donated materials in the Shigeo Fukuda archives.

Archive materials

1) Works by Fukuda	Posters	1,500
	Prints	180
	Other	100
2) Materials	Photo positives	1,500
	Other	5,700
3) Works by other artists	Posters/Prints	370

3. Kazumasa Nagai Archives

In FY2010 we received a donation of poster works and other materials from Kazumasa Nagai and began organizing it into a database.

Archive materials

1) Works by Nagai	Posters	850
	Prints	300
	Editorial	1,200
	Originals	140
	Other	560
2) Materials	Photo positives	490
	Other	40
3) Works by other artists	Posters/Prints	100
4) Books		80

4. ポスターアーカイブ(2011年3月現在)

① 収蔵作家：106名(国内作家67名、海外作家39名)	
② 総点数：約8,293点	
③ 2010年4月～2011年3月の受け入れ状況：	
・伊藤憲治	72点
(カレンダー、パッケージ等	575点)
・森本千絵	134点
・日比野克彦	314点
・井上嗣也	173点
・佐藤卓	71点
・ラルフ・シュライフォーク	28点
・ビエール・メンデル	13点
・ゲルヴィン・シュミット	1点

5. アーカイブ作品寄贈

田中一光アーカイブ、福田繁雄アーカイブ、永井一正アーカイブのパーマネントコレクション以外の作品をセット組み、内外の美術館等に寄贈を行った。

- ① 福田繁雄設計芸術館(台湾・高雄／東方技術学院)：2010年10月
福田繁雄ポスター 1,152点
- ② 福田繁雄デザイン館(岩手県二戸市／二戸市シビックセンター)：2011年1月
福田繁雄ポスター 1,303点
- ③ 奈良県立美術館：2011年1月
田中一光版画作品 111点と産経観世能ポスター34点
- ④ チューリッヒ造形美術館(スイス)：2011年2月
田中一光ポスター 400点、永井一正ポスター 400点、福田繁雄ポスター 400点

4. Poster Archives (As of March 2011)

- 1) Artists represented: 106 (67 domestic, 39 from overseas)
- 2) Items in collection: 8,293
- 3) Items received between April 2010 and March 2011:
 - ・Kenji Ito 72 (plus 575 calendars, packages, etc.)
 - ・Chie Morimoto 134
 - ・Katsuhiko Hibino 314
 - ・Tsuguya Inoue 173
 - ・Taku Satoh 71
 - ・Ralph Schraivogel 28
 - ・Pierre Mendell 13
 - ・Gerwin Schmidt 1

5. Donation of Archived Works

Sets of works not part of the permanent collections of the Ikko Tanaka, Shigeo Fukuda and Kazumasa Nagai archives were donated to museums in Japan and overseas.

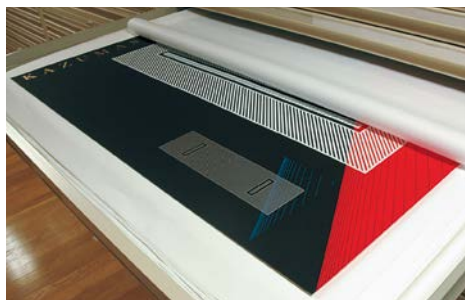
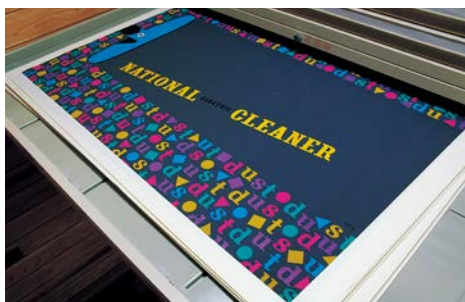
- 1) Shigeo Fukuda Design Museum (Tung Fang Design University / Kaohsiung, Taiwan): October 2010
1,152 Shigeo Fukuda posters
- 2) Shigeo Fukuda Design Museum (Ninohe City Civic Center / Iwate Prefecture): January 2011
1,303 Shigeo Fukuda posters
- 3) Nara Prefectural Museum of Art: January 2011
111 Ikko Tanaka prints and 34 Sankei Kanze Noh posters
- 4) Museum of Design, Zurich (Switzerland): February 2011
400 Ikko Tanaka posters, 400 Kazumasa Nagai posters, 400 Shigeo Fukuda posters

6. アーカイブ作品の貸出

- ① 展覧会名：木田安彦の世界「三十三間堂」展
会場：大丸京都大丸ミュージアム
会期：2010年10月6日～18日
主催：大丸京都
貸出作品：掛け軸1点
- ② 展覧会名：SO + ZO展「未来をひらく造形の過去と現在 1960s→」
会場：Bunkamura ザ・ミュージアム
会期：2010年11月12日～28日
主催：学校法人桑沢学園
貸出作品：青葉益輝氏ポスター6点
- ③ 展覧会名：20世紀のポスター[タイポグラフィ]
会場：東京都庭園美術館
会期：2011年1月29日～3月27日
主催：公益財団法人東京都歴史文化財団、東京都庭園美術館、日本経済新聞社
貸出作品：田中一光、亀倉雄策、木村恒久3氏のポスター計3点
- ④ 番組名：NHK BS「美の壺」フォント特集
(2011年3月3日放映)
貸出作品：田中一光作品 計14点+ポートレート写真

6. Lending of Archived Works

- 1) Exhibition: "The World of Yasuhiko Kida: Sanjusangendo"
Venue: Daimaru Museum, Daimaru Department Store, Kyoto
Period: October 6-18, 2010
Sponsor: Daimaru Department Store, Kyoto
Loaned works: 1 hanging scroll
- 2) Exhibition: "SO+ZO — The Past and Present of Design that Opens the Future: 1960s→"
Venue: The Bunkamura Museum of Art
Period: November 12-28, 2010
Sponsor: Kuwasawa Design School
Loaned works: 6 Masuteru Aoba posters
- 3) Exhibition: "Typographic Posters of the 20th Century"
Venue: Tokyo Metropolitan Teien Museum
Period: January 29-March 27, 2011
Sponsors: Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture, Tokyo Metropolitan Teien Museum, and Nikkei, Inc.
Loaned works: 3 posters by Ikko Tanaka, Yusaku Kamekura, and Tsunehisa Kimura
- 4) Program: "Bi no tsubo" font special on NHK BS
Broadcast date: March 3, 2011
Loaned works: 14 works by Ikko Tanaka and a photographic portrait



収蔵作家

青葉 益輝	上條 喬久	下谷 二助	平野 甲賀
秋田 寛	亀倉 雄策	新村 則人	福島 治
秋月 繁	河村 要助	鈴木 八朗	福田 繁雄
秋山 育	河原 敏文	副田 高行	松永 真
秋山 具義	木田 安彦	タイクーングラフィックス	三木 健
浅葉 克己	北川 一成	田中 一光	宮田 誠
新井 苑子	木村 勝	戸田 正寿	森本 千絵
栗津 潔	木村 恒久	永井 一史	矢萩 喜從郎
五十嵐 威暢	清原 悦志	永井 一正	矢吹 申彦
伊藤 憲治	K2	中島 英樹	山形 季央
井上 嗣也	小島 良平	仲條 正義	山口 はるみ
宇野 亜喜良	佐藤 可士和	中村 誠	山本 容子
蝦名 龍郎	佐藤 晃一	灘本 唯人	湯村 輝彦
太田 徹也	佐藤 卓	新島 実	横尾 忠則
大橋 正	U.G. サトー	服部 一成	吉田 カツ
葛西 薫	佐野 研二郎	早川 良雄	若尾 真一郎
勝井 三雄	澤田 泰廣	日比野 克彦	

アン・サンスー	イ・ソンビョ	カリ・ピッポ
バラリンジ・デザイン	ウーヴェ・レシュ	ヤン・ライリッヒ・Jr
チョン・ビョンギュ	ルーバ・ルコーバ	リュウ・ミュンシク
スタシス・エイドゥガヴィチウス	ビクトル・ヒューゴ・マレイロス	ステファン・サグマイスター
グラフィック・ソート・ファシリティ	オルガー・マチス	ポーラ・シェア
ハン・ジェジュン	チャズ・マヴィヤネ・デイヴィス	ゲルヴィン・シュミット
ボジダル・イコノモフ	ピエール・メンデル	ラルフ・シュライフォーク
メルク・インボーデン	ミン・ビョンゴル	シー・リンホン
キム・ドゥソプ	エム/エム(パリ)	ソ・ギフン
キム・ジュソン	ヘルマン・モンタルボ	ニクラウス・トロックスラー
ザビーネ・コッホ	ヴォン・オリバー	ウン・ヴァイメイ
クロード・カーン	イシュトヴァン・オロス	ウォルフガング・ワインガルト
フリーマン・ラウ	バク・クムジュン	イエ・クオソン

Artists List

AOBA Masuteru	KAMIJYO Takahisa	SHIMOTANI Nisuke	HIRANO Kouga
AKITA Kan	KAMEKURA Yusaku	SHINMURA Norito	FUKUSHIMA Osamu
AKIZUKI Shigeru	KAWAMURA Yosuke	SUZUKI Hachiro	FUKUDA Shigeo
AKIYAMA Iku	KAWAHARA Toshifumi	SOEDA Takayuki	MATSUNAGA Shin
AKIYAMA Gugi	KIDA Yasuhiko	TYCOON GRAPHICS	MIKI Ken
ASABA Katsumi	KITAGAWA Issay	TANAKA Ikko	MIYATA Satoru
ARAI Sonoko	KIMURA Katsu	TODA Seiju	MORIMOTO Chie
AWAZU Kiyoshi	KIMURA Tsunehisa	NAGAI Kazufumi	YAHAGI Kijuro
IGARASHI Takenobu	KIYOHARA Etsushi	NAGAI Kazumasa	YABUKI Nobuhiko
ITOH Kenji	K2	NAKAJIMA Hideki	YAMAGATA Toshio
INOUE Tsuguya	KOJIMA Ryohei	NAKAJO Masayoshi	YAMAGUCHI Harumi
UNO Akira	SATO Kashiwa	NAKAMURA Makoto	YAMAMOTO Yoko
EBINA Tatsuo	SATO Koichi	NADAMOTO Tadahito	YUMURA Teruhiko
OHTA Tetsuya	SATOH Taku	NIJIMA Minoru	YOKOO Tadanori
OHASHI Tadashi	SATO U.G.	HATTORI Kazunari	YOSHIDA Katsu
KASAI Kaoru	SANO Kenjiro	HAYAKAWA Yoshio	WAKAO Shinichiro
KATSUI Mitsuo	SAWADA Yasuhiro	HIBINO Katsuhiko	

AHN Sang-Soo	LEE Sung-Pyo	PIIPPO Kari
Balarinji Design	LOESCH Uwe	RAILICH JR. Jan
CHUNG Byoung-Kyu	LUKOVA Luba	RYU Myeong-Sik
EIDRIGEVIČIUS Stasys	MARREIROS Victor Hugo	SAGMEISTER Stefan
Graphic Thought Facility	MATTHIES Holger	SCHER Paula
HAN Jae Joon	MAYIYANE-DAVIS Chaz	SCHMIDT Gerwin
IKONOMOV Bojidar	MENDELL Pierre	SCHRAIVOGEL Ralph
IMBODEN Melchior	MIN Byung Geol	SHIH Ling-Hung
KIM Doo-Sup	M/M(Paris)	SHUR Ki-Heun
KIM Joo-Sung	MONTALVO German	TROXLER Niklaus
KOCH Sabine	OLIVER Vaughan	UNG Vai-Meng
KUHN Claude	OROSZ István	WEINGART Wolfgang
LAU Freeman	PARK Kum-Jun	YEH Kuo-Sung

“3GD Archives” Poster Donation Project Gets Under Way

『3GDアーカイブ』ポスター寄贈プロジェクト始動

前期より準備を進めてきた海外へのポスター寄贈計画が、今期より本格的に動きだした。田中一光、永井一正、福田繁雄の三氏より、DNP文化振興財団が寄託を受けた作品「3GDアーカイブ」から、約1,200点のポスターや版画を選定し、順次海外の主要美術館などへ寄贈を行う。

2011年2月、その第一弾としてスイスのチューリッヒ造形美術館へ田中一光作品と福田繁雄作品の引渡しをCCGAにて行った。引き続き今秋、永井一正の作品を寄贈予定。充実したポスターコレクションを有するチューリッヒ造形美術館は、作品の研究および広く一般への公開を、ウェブサイトや企画展を通じて積極的に行っている。

チューリッヒ造形美術館ポスターコレクション部部长リヒター・ベッティナ博士より

当美術館のポスターコレクションは、同種のコレクションの中でも規模と重要性において世界有数のアーカイブの一つです。33万点以上の収蔵作品のうち12万点について調査と目録作成が完了しており、政治、商業、文化ポスターを含むこれら収蔵作品全体が、そのまま、草創期である19世紀中葉から今日までのスイス国内外のポスターの歴史の再現となっています。地域的にはスイス、ヨーロッパ、日本、キューバ、旧ソ連、アメリカに重点が置かれています。歴史的、主題的、地域的に多様な当コレクションは、ポスター芸術の研究を促進し、また、日常における視覚アーカイブとしても機能しています。

1990年代以降、当館のポスターコレクションは、1960年代より着実な発展を見せてきた日本のグラフィックデザインに特に関心を寄せています。官能性、詩情、完成度に現れたその独特の美学を通じて、日本のポスターは短期間のうちに世界のポスター史における傑出した地位を獲得しました。今日では当コレクションは、日本のポスターという特筆すべきラインナップを備えています。それは「キレイ——日本のポスター1978-1993」(1993)や「今日の日本のポスター展」(2006)などの展覧会として結実しました。

他に5つの有名なデザインコレクションがある中で、2011年初頭、DNP文化振興財団の「3GDアーカイブ」の中から田中一光および福田繁雄作品の寄贈を受けることができ光栄です。田中一光(1930-2002)、福田繁雄(1932-2009)、永井一正(1929-)といった著名なグラフィックデザイナーの約1,200点の貴重なポスターによって、当館が所有するアーカイブを補完することができました。三者三様に日本のポスターの偉大な伝統を具現している田中、福田、永井各氏の作品を全般的に所有したことになり、これはたいへん幸運なことです。これら三氏の作品はすべて、調査と目録作成を経たのち一般に公開され、また最新の保存基準に則って保管されることになっています。

This past year a plan to donate posters overseas, preparations of which were launched last year, got under way in earnest. Under this project, approximately 1,200 of the works in the “3GD Archives” – posters and prints donated to the DNP Foundation for Cultural Promotion by Ikko Tanaka, Kazumasa Nagai and Shigeo Fukuda – are to be selected and progressively donated to major art museums and other facilities abroad.

As the first initiative under this project, in February 2011 works by Ikko Tanaka and Shigeo Fukuda were presented to the Museum of Design, Zurich at CCGA. Works by Kazumasa Nagai are slated to be donated this autumn. The museum, which boasts a rich collection of posters, is actively engaging in research on their poster collection and also showing the works broadly to the public through its website and exhibitions.

A Message from Dr. Richter Bettina, Head of the Poster Collection, Museum für Gestaltung Zürich (Museum of Design, Zurich)

Our Poster Collection is one of the most extensive and important archives of its kind in the world. Over 330,000 objects, 120,000 of them researched and inventoried, document Swiss and international poster history – including political, commercial, and cultural posters – from its beginnings in the mid-nineteenth century to the present day. The geographical emphasis – itself determined by the history of poster design – is on Switzerland, Europe, Japan, Cuba, the former Soviet Union, and the United States. The collection's historical, thematic, and geographical diversity offers both a survey of poster art and a look into a visual archive of the every day world.

Since the 1990s the poster collection is particularly interested in Japanese graphic design, which since the 1960s has been continuously developed. Through its characteristic aesthetic that is featured by sensuality, poetry and perfection, Japanese posters conquered an outstanding position within international poster history within a short period of time. The poster collection today disposes a significant portfolio of Japanese posters, which have been acknowledged in exhibitions such as “Kirei – Posters from Japan 1978-1993” (1993) and “Japanese Posters – today” (2006).

Among other five renowned design collection, the Museum für Gestaltung Zürich is proud to have received at the beginning of 2011 a comprehensive donation of Ikko Tanaka works and Shigeo Fukuda works selected from the 3GD Archives of DNP Foundation. The poster collection could complement its existing portfolio with some 1,200 valuable posters of the renowned graphic designers, Ikko Tanaka (1930-2002), Shigeo Fukuda (1932-2009) and Kazumasa Nagai (born 1929), that is planned to be donated this October. The collection is very fortunate to possess now the overall oeuvre of Fukuda, Tanaka

and Nagai, whose work incarnate the great traditions of Japanese Posters, each in their own individual way. All posters will be researched and inventoried and therewith made accessible to a broad public. Furthermore, they will be stored in the archives of the collection with latest conservation standards. The Museum für Gestaltung Zürich is very grateful to the donors for this generous donation.



チューリッヒ美術館を代表して、ヨーグ・アベグ氏が来日
Jürg Abegg, representing the Museum of Design, Zurich, during his visit to Japan

国際交流事業

International Exchange

Support to Japan Office of AGI

AGI日本事務局サポート



2009年6月より開始したAGI（国際グラフィック連盟）日本会員の事務局支援活動は、昨年に引き続き、AGI国際本部や他国会員とのコミュニケーション支援、日本会員から世界への情報発信支援、そして年に1度開催されるAGI総会の概要報告などを行った。世界の先導的なグラフィックデザイナーやアーティストが所属するAGI（Alliance Graphique Internationale）は、1952年パリにて10カ国65名の会員により発足。毎年1回、世界各国の異なる都市で開催される総会を重ねながら規模を拡大し、33カ国約400名が所属する組織に成長した。現在、日本会員は24名、日本代表を浅葉克己氏、事務局長を新島実氏が務める。

AGI総会ポルト2010 2010年10月12日（火）—10月16日（土）

2010年の総会は、ポルトガル北部の港湾都市ポルトにて開催された。AGIは重要な使命の一つとして、グラフィックデザインおよび視覚言語分野における教育活動をかかっているが、その活動の一環として総会前に、学生や専門職者など誰もが参加することのできる、AGI会員による講演会やワークショップを行う企画「AGIオープン」が新たな試みとして行われた。

世界各国の会員が一堂に会するAGI総会では、「グラフィックデザインの創造プロセス」をテーマに会員によるプレゼンテーションや作品展が開催された。また、組織の規模拡大による課題の解決策や、デザイン界を取り巻く環境の急速な変化に伴う今後のAGIのあり方など、重要な議題が話し合われた。

AGI終わりのない国際デザイン会議 浅葉克己（AGI日本代表）

AGIは終わりのない国際デザイン会議。1988年に東京、記憶に新しいところでは2006年に東京・京都、そしてアムステルダム→シカゴ→イスタンブール、2010年にはポルトで開催された。ポルトガルは日本とは縁が深い国。テンブラ、カステラ、テッポウ、オブリガード。70年代アメリカのLOOK誌のポルトガル特集のみごとな写真とエディトリアルデザインで見た憧れの地だ。一年に一回、デザインという共通の思考を持つ友人に会うのは心が躍る。東から西への移動14時間。6泊7日。大荷物。深夜のポルト到着。目覚めると世界遺産の旧市街。坂の多い街。石畳を踏みしめる。先端に十字架のついている76メートルのモニュメント塔に上り、自分がどこにいるのか確かめる。ホテルの裏にアツと驚く

3階建ての世界遺産のレロ書店。美しい曲線の深紅の階段は「天国への階段」だった。古いポルトガル装飾体の本を買った。見たこともない装飾体、ウッフ。デザイン会議はその国の一番代表的な建築空間の中で開かれる。ポルトの会場は19世紀の建築、ボルサ宮。広場では地球儀を足先に置いたエンリケ航海皇子がどこか彼方を指差している。気になる銅像だ。2年前からAGIは、NYのポーラ・シェア会長を中心に活動している。ポーラ・シェアはAGIを刷新したいと力説する。現在会員数は392名。88年来日した懐かしいNYのマッシモ・ヴィネリが、ビネリーデザインセンターをNYの北、カナダ国境近くに創設、モダンデザインを継承する拠点にしたいと講演。髪がまっ白で美しい79才になっていた。一日5人が講演する。超モダンな音楽堂を見学したり、今年のテーマである「プロセス・イズ・ザ・プロジェクト展」を庭園美術館で見る。作家と作品が一致する瞬間だ。川岸のレストランの夕食は楽しい。ポルトガルワインにいわしの塩焼きは最高だ。一年に一回、国際的な関係の中で、デザインとは何か、自分の進むべき道はどこかを、尊敬する作家たちと論ずることはますます重要になって来た。



Activities to support the Japan office of Alliance Graphique Internationale (AGI), launched in June 2009, took various forms again this past year. These included supporting communication with AGI headquarters and AGI members in other countries, helping Japanese members to disseminate information overseas, and preparation of the general report for the annual AGI Congress.

AGI was launched in Paris in 1952 as an organization embracing the world's leading designers and artists. Initial membership numbered 65 from 10 countries, which has expanded to near 400 from 33 nations. Japanese membership currently stands at 24; the Japanese office is headed by Katsumi Asaba, with Minoru Nijijima serving as secretary-general.

AGI Congress in Porto 2010

The 2010 AGI Congress was held in Porto from October 12 to 16. One of AGI's core missions is to undertake educational activities in the fields of graphic design and visual language, and prior to the congress, a new endeavor, "AGI Open," was launched. AGI Open consisted of a series of lectures and workshops open to participation by design students and professionals alike.

At the congress, presentations and exhibitions by members were held on the theme of "Mapping the process." Major issues facing the AGI were also discussed: how to resolve problems stemming from

the organization's expansion in scale; what directions AGI should take in the future to cope with rapid changes in the environment surrounding the design profession today.

AGI Never-ending International Design Conference Katsumi Asaba (AGI Japan National President)

AGI, Never-ending International Design Conference. It was held in Tokyo in 1988, and in more recent memory also in Tokyo and Kyoto in 2006. Then came Amsterdam, Chicago and Istanbul, followed by Portugal in 2010.

There are deep ties between Portugal and Japan: *tempura*, *castella*, guns, *obrigado*. I fell in love with the country through the brilliant photographs and editorial in a feature on Portugal from a 1970s issue of *Look* magazine. I am always thrilled to meet, once every year, friends who share a common way of thinking about design. A fourteen-hour trip from east to west for a six-night, seven-day stay with too much luggage. Having arrived in Porto in the middle of the night I woke the next morning to find myself in the historic city center, a World Heritage site. I walked the paving stones of the hilly streets and climbed the cross-topped, 76-meter tall monument tower to get my bearings. Behind the hotel was a breathtaking, three-story Livraria Lello, also a World Heritage site, its beautiful curving crimson staircase known as the "stairway

to heaven." I bought an old book of Portuguese decoration, pleasantly unlike anything I'd ever seen before. Design conferences are often held in the most representative architectural spaces of their host countries. In Porto this was the 19th-century Stock Exchange Palace, Palácio da Bolsa. In the square stood Prince Henry the Navigator, the globe at his feet, pointing somewhere off in the distance. That bronze really got to me.

For the previous two years President Paula Scher from New York had taken a central role in AGI's activities. She spoke forcefully about plans to reform AGI. The organization currently has 392 members. Massimo Vignelli from New York, who visited Japan in 1988, spoke about the Vignelli Design Center he established as a center for modern design education in upstate New York near its border with Canada. He was a beautiful 79 years old with pure white hair. Each day there were lectures by five people. We visited an ultra-modern music space and saw the Process is the Project Exhibition, based on the conference's theme, at a sculpture garden. It was a moment when artist and art come together. Dinner at the riverside restaurant was lovely. The Portuguese wine and sardines grilled with salt were outstanding. Now more than ever it is important to gather once a year, in international fraternity, to talk with artists we respect about the nature of design and the paths that we each should follow.

Body and Spirit in Writing in the East and West

May 26–28, 2010

国際会議「東西の文字における身体性と精神性」



イタリア・ヴェネチアのジョルジョ・チニ財団にて、2010年5月26日(水)から28日(金)まで、国際会議「東西の文字における身体性と精神性」が開催された。世界から延べ26人の文字に関する専門家やアーティストが招聘され、展覧会や書の実演、グラフィックや写真のワークショップ、研究会、座談会などが行われた。

会期の最終日28日には、イタリアを代表するグラフィックデザイナー、イタロ・ルビ氏と日本から松永真氏、そしてDNP文化振興財団のスタッフが講演会に出演した。「活字とグラフィックデザイン／東と西との対話」をテーマに、両デザイナーの代表作を通じて白熱したレクチャーが行われ、財団スタッフは、ギンザ・グラフィック・ギャラリーの紹介と日本の文字の特色について触れた。活発な質疑応答も交され、西洋の日本文字文化への熱い視線が感じられた。この国際会議は、国際北斎研究センターの協力によって運営された。

*チニ財団：ヴェネチアのサン・ジョルジョ・マッジョーレ島を拠点に60年もの間、時代の証言者や牽引者である世界中の学者や権威者を迎え入れてきた文化機関。

Between May 26 and 28, 2010, an international conference was held at the Giorgio Cini Foundation in Venice* titled "Body and Spirit in Writing in the East and the West." Twenty-six artists and experts in writing from around the world were invited to participate. The three-day event included an exhibition, calligraphy demonstrations, workshops in graphics and photography, study sessions and roundtable discussions.

On the final day, presentations were given by Italo Lupi, one of Italy's foremost graphic designers, and Shin Matsunaga representing Japan. Through their major works the two designers spoke on the topic of writing and graphic design as a dialogue between East and West. A staff member from the DNP Foundation for Cultural Promotion gave a presentation introducing ginza graphic gallery and the main features of Japanese writing systems. A lively question & answer session followed, offering vivid evidence of the great interest shown toward Japan's writing culture in the West. The conference was operated in cooperation with the International Hokusai Research Centre.

* For six decades Fondazione Giorgio Cini, a cultural institution based on the island of San Giorgio Maggiore, has invited scholars and authorities from the world over to participate in its panoply of cultural events.



Graphic Design dal Giappone, 100 Poster 2001-2010

August 27–October 20, 2010

日本–イタリア国際交流事業「現代日本のポスター100」展 企画協力



2010年8月27日(金)から10月20日(水)まで、ヴェネチアのサンマルコ広場に面するベヴィラックワ・マーザ財団運営のギャラリーにて、「現代日本のポスター100」展が開催された。イタリアの国際北斎研究センターからの要請により、DNP文化振興財団は、展覧会実現に向けてポスター選定・収集・寄贈などの企画協力を行った。展覧会は、監修者の永井一正氏、松永真氏、そして国際北斎研究センターのジャン・カルロ・カルツァ氏、ロッセラ・メネガッツ女史の4名により選定された、2001年から2010年の間に制作された日本の近作ポスター100点を紹介、全作品を網羅したカタログも出版された。また、被爆から65年目の年にちなんで、JAGDAの協力によりヒロシマ・アピールズのポスターも展示され、広島をテーマとした特別企画が開催された。会期終了後、作品はすべて国際北斎研究センターへ寄贈された。

「さて、今回の『現代日本のポスター100』展は久々の『日本グラフィックデザイン』の海外展であるが、21世紀に入ってからの10年間という時期に限られたことも大きな特色である。80代の巨匠永井一正から30代の新人森本千絵まで、厳選された100点のポスターで構成され、一言で「現代日本のグラフィックデザイン」といっても、アドバ

タイジングからグラフィックアートまでジャンルの領域も広く、6世代に渡る年齢層の厚さは特筆すべきで、アナログからデジタルまで表現の巾も実に広いものである」

(松永 真「現代日本のポスター100」展
カタログ序文より抜粋)

From August 27 through October 20, 2010 an exhibition of contemporary Japanese posters – “Graphic Design dal Giappone, 100 Poster 2001-2010” – was held at a gallery in Venice’s San Marco Square operated by Fondazione Bevilacqua La Masa. At the request of the International Hokusai Research Centre of Italy, the DNP Foundation for Cultural Promotion collaborated in preparing for the exhibition by undertaking the tasks of selecting and collecting the posters for the show. Four members were involved in the selection process: Kazumasa Nagai and Shin Matsunaga, who served in advisory capacities, and Gian Carlo Calza and Rossella Menegazzo of the International Hokusai Research Centre. A catalogue was also produced containing replications of and information on all works exhibited. To commemorate the 65th anniversary of the atomic bombing of Hiroshima, a special exhibi-

tion was also mounted on that event, featuring posters from the “Hiroshima Appeals” series made available through cooperation provided by JAGDA. Following the close of the exhibitions, all works were donated to the International Hokusai Research Centre.

... the exhibition “Graphic Design from Japan. 100 Poster 2001-2010” also has the distinctive feature of presenting an overview of Japanese graphic design overseas after a long gap, and moreover of focusing its attention on the first ten years of the 21st century.

A hundred carefully selected posters that include the work of the great master Kazumasa Nagai, now in his eighties, alongside that of designers still in their thirties like Chie Morimoto. The simple definition of “graphic design from Japan” in reality covers a much broader sphere of communication that ranges from advertising to graphic art, the noteworthy contribution of six generations of graphic designers, and a variety of means of expression that stretches from the analog to the digital.

Shin Matsunaga
Catalogue “Graphic Design dal Giappone,
100 Poster 2001-2010”

研究助成事業

Research Support

2010-2011 Financial Support Activities

2010-2011年度助成実績

1	<p>対 象 第22回すかがわ国際短編映画祭へ協賛</p> <p>主 催 すかがわ国際短編映画実行委員会 須賀川市教育委員会</p> <p>年 月 2010/5</p> <p>金 額 30,000円</p> <p>備 考 短編映画フェスティバルおよびコンペ。</p>	<p>Target 22nd Sukagawa International Short Film Festival</p> <p>Organizers Sukagawa International Short Film Festival Executive Committee Sukagawa Board of Education</p> <p>Date May, 2010</p> <p>Amount JPY30,000</p> <p>Remarks Short film festival and competition</p>
2	<p>対 象 「版で発信する作家たち2010」展へ協賛</p> <p>主 催 版で発信する作家たち展実行委員会</p> <p>年 月 2010/9</p> <p>金 額 60,000円</p> <p>備 考 福島県央地区の複数の画廊が共催する地元作家中心の版画展。 会期9/4～9/12、5会場で同時開催。 来場者数約250名。</p>	<p>Target "The Artists Who Express through Prints 2010" exhibition</p> <p>Organizer The Artists Who Express through Prints Executive Committee</p> <p>Date September, 2010</p> <p>Amount JPY60,000</p> <p>Remarks Print exhibition, mostly of local artists, jointly held by multiple galleries in central Fukushima Prefecture; simultaneously held at 5 venues September 4-12, 2010; approx. 250 visitors</p>
3	<p>対 象 須賀川地区高等学校美術部研修会への助成</p> <p>主 催 須賀川地区高等学校美術部連盟</p> <p>年 月 2010/10</p> <p>金 額 50,000円</p> <p>備 考 須賀川地区内4つの県立高校美術部による合同研修会として、 CCGA展覧会を観覧。 送迎バスの手配、ギャラリートークを行った。</p>	<p>Target Sukagawa Area High School Art Clubs Training Session</p> <p>Organizer Federation of Sukagawa Area High School Art Clubs</p> <p>Date October, 2010</p> <p>Amount JPY50,000</p> <p>Remarks Visit to CCGA exhibition as joint training session for the art clubs of 4 prefectural high schools in the Sukagawa area; provision of transport and holding of gallery talk</p>
4	<p>対 象 第22回田舎顕彰版画展へ協賛</p> <p>主 催 須賀川商工会議所青年部 須賀川市教育委員会後援</p> <p>年 月 2011/2</p> <p>金 額 30,000円</p> <p>備 考 須賀川出身の江戸期の銅版画家、 亜欧堂田善(あおうどうでんぜん)顕彰を目的とする、 市内小中学生対象の版画コンクール。</p>	<p>Target "22nd Denzen Print Exhibition"</p> <p>Organizers Sukagawa Chamber of Commerce Youth Division Sukagawa Board of Education</p> <p>Date February, 2011</p> <p>Amount JPY30,000</p> <p>Remarks Print contest for Sukagawa elementary and junior high school students aimed at spreading recognition of copper plate print artist and Sukagawa native Aodo Denzen (1748-1822)</p>



Reveiw of ggg 2010-2011

ggg 展覧会概要

TDC展 2010

会期=2010年4月2日—24日

受賞作家=○グランプリ=ホワイ・ノット・アソシエイツ ○TDC賞=ラルフ・シュライフォール、ニクラウス・トロクスラー、フォントワークス・藤田重信、川村真司+ハル・カークランド+ナカムラマギコ+中村将良 ○特別賞=ジョン・ワーウィッカー、浅葉克己 ○TDC RGB賞=エキソニモ ○タイプデザイン賞=ホルガー・ケーニヒストルファー ○ブックデザイン賞=リエン・チェ

展示概要=先端的なタイポグラフィ作品が一堂に会する国際コンペティション「東京TDC賞」(東京タイプディレクターズクラブ主催)の成果を紹介するTDC展。国内外で評価・注目がますます高まる「東京TDC賞」の、2009年秋の公募に寄せられた3,180作品(国内2,301、海外27カ国+2地域879)を数える応募作品の中から、厳正な審査の結果選ばれた「東京TDC賞2010」のこの受賞10作品をはじめ、ノミネート作品、優秀作品をあわせて132作品を展覧。最新鋭の作品や、新しい可能性を含んだ実験作品など、日本そして世界からのエッジの効いた作品の数々が所狭しと並び、日本発のユニークなデザインセレクションの妙を展開した。

TALKING THE DRAGON 井上嗣也展

会期=2010年5月7日—31日

作家略歴=アートディレクター。1947年宮崎県生まれ。1978年ビーンズ設立。パルコ、サントリー、コム デ ギャルソン、朝日新聞社など数多くの出版、音楽、TV等の広告とアートディレクションを手がける。東京ADC最高賞・ADCグランプリ・ADC会員賞、東京TDC会員賞、毎日広告賞など受賞多数。東京ADC、東京TDC、JAGDA会員。

展示概要=井上嗣也氏初となる個展。強度を持つもの、曲線を持つものとしての架空の生き物「DRAGON」と、「光」をキーワードに、奇跡の瞬間を写しとめた対象に限りなく接近、肉薄、接触。内部からとめどなく溢れ出るポエティックでダイナミックなグラフィズムを、印刷技術を駆使して新作ポスター45点で発表した。あわせて近作、そして代表作のポスター、装丁も紹介。蝶や蜂や蟻がなぜあのように動くのか? 見たことのないものを見てみたい。作品を通して自分を見てみたい、自分を露にしたい、自分を解放したい、自分の夢や霊を明らかにしてみたい。時代を切りひらいてきたアートディレクター・井上嗣也のクリエイティブの原点を魅せつけられた展覧会。

NB@ggg ネヴィル・ブロディ 2010

会期=2010年6月4日—28日

作家略歴=ロンドン生まれ。スティッフ・レコード、フェティッシュ・レコード等を経て、1981~86年「フェイス」、86年「アリーナ」アートディレクター。現在「アリーナ・オム・プラス」アートディレクター。実験的言語とタイポグラフィの出版物「フーズ」はこれまでのプロディの最も重要なプロジェクト。同プロジェクトに関するカンファレンスも3回開催、今後も予定。英国王立芸術大学コミュニケーションアート&デザイン学部長、ロンドン・カレッジ・オブ・コミュニケーション(元LCP)客員教授。

展示概要=フェティッシュ・レコードや「フェイス」といったアイコンの作品は敢えて出さずに最新作、近作にフォーカス。依頼された仕事であると同時に自主制作的要素の強い作品、新たな実験作品であるデジタル絵画ポスターシリーズなどを紹介。ギャラリー空間全体を覆う力強いヴィジュアル群が、プロディが30年間のキャリアを通して牽引してきた領域である革新的タイポグラフィの魅力を存分に伝え、時代の寵児として淘汰されることなく、真のマルチ・ヴィジュアルデザイナーとしてその存在感を示し続ける所以を確認できる展覧会となった。

2010 ADC展

会期=2010年7月5日—29日

受賞作家=○ADC会員賞=葛西 薫、井上嗣也+新 良太+久留幸子、細谷 巖+秋山 晶+牧 鉄馬+石田 東 ○原弘賞=細谷 巖 <以下G8にて展示>○グランプリ=中嶋貴久+石毛浩介+平山浩司+磯島拓矢+藤井 保 ○ADC賞=菊地敦己、林 規章、天宅 正、木住野彰悟、中嶋貴久、澤本嘉光+永井 聡、山下ともこ、古平正義、サノ☆ユタカ+内田将二

展示概要=ADC(東京アートディレクターズクラブ)は、1952年の創立以来日本の広告・デザインを牽引する活動を行っており、会員により選出されるADC賞は、その年の日本の広告・デザイン界の最も名誉あるものの一つとして注目を集める。2010年度ADC賞は、09年5月から10年4月までの1年間に発表されたポスター、新聞・雑誌広告、エディトリアル、パッケージ、CI・マーク&ロゴ、ディスプレイ、TVCMなど、多ジャンル約10,000点の応募作品の中から、77名のADC会員によって厳正な審査が行なわれ選出された。本展ではこの審査会で選ばれた受賞作品、優秀作品を、ggg[会員作品]、G8[一般作品]の2会場で紹介。グラフィック、広告作品の最高峰に輝く作品の数々が勢ぞろいした。

Tokyo Type Directors Club Exhibition 2010

Dates = April 2-24, 2010

Award Winners = ○Grand Prix = Why Not Associates ○TDC Prizes = Ralph Schraivogel, Niklaus Troxler, Shigenobu Fujita (Fontworks), Masashi Kawamura + Hal Kirkland + Magico Nakamura + Masayoshi Nakamura ○Special Prizes = John Warwicker, Katsumi Asaba ○TDC RGB Prize = Exonemo ○Type Design Prize = Holger Königsdörfer ○Book Design Prize = Lian Jie

Exhibition Overview = The exhibition introduced the cream of the crop from the 2010 Tokyo Type Directors Club Awards, an international competition bringing together the latest typography works from around the world. The competition, a focus of increasing attention and acclaim both in Japan and abroad, attracted a total of 3,180 entries (2,301 from Japan; 879 from 27 foreign countries and 2 territories). This exhibition showed 132 of them, including not only the 10 prize-winning works but also other works making the preliminary round of judging and other outstanding works. Within the spatial limitations of the gallery, a host of the newest works from all over the world, including works at the cutting edge and experimental works suggesting new possibilities, were on show.

Talking the Dragon: Tsuguya Inoue Exhibition

Dates = May 7-31, 2010

Artist Profile = Tsuguya Inoue is an art director born in Miyazaki in 1947. In 1978 he established Beans. He has performed art direction and created advertising for numerous publications, music, television, etc., for Parco, Suntory, Comme des Garçons, and The Asahi Shimbun. Among the many prizes he has won to date are the Tokyo ADC Grand Prize, Tokyo TDC Members Award and the Mainichi Advertising Award. He is a member of Tokyo ADC, Tokyo TDC and JAGDA.

Exhibition Overview = This, Inoue's first solo exhibition, focused on two themes: dragons—figments of the imagination possessing both firm strength and curvaceous beauty—and light. These miraculously photographed beings were shown up close, so close they seem palpable. To do so Inoue used the medium of the poster, fully employing printing technologies to capture the poetic and dynamic graphical aura that flows ceaselessly from within them. The exhibition also introduced Inoue's recent and representative posters and book designs. "Why do butterflies, bees and ants move the way they do?" "Through my works I want to see myself, to reveal myself, to liberate myself, to clarify my dreams and my spirit." This was an exhibition that afforded a close-up look at the creative origins of Tsuguya Inoue the art director.

NB@ggg: Neville Brody 2010

Dates = June 4-28, 2010

Artist Profile = Neville Brody was born in London. After working for Stiff Records and Fetish Records, he served as art director for *The Face* (1981-86) and *Arena* (1986) magazines. Currently he is the art director of *Arena Homme+*. Among his artistic projects, his work for *Fuse*, a publication focused on experimental languages and typography, is considered to be of greatest importance. Brody presently serves as Head of Communications Art and Design at the Royal College of Art and as a visiting professor at the London College of Communication.

Exhibition Overview = This exhibition, rather than showing Brody's iconic works such as those he did for Fetish Records and *The Face*, focused on his recent and new works. Among the items on display were commissioned works that simultaneously have elements strongly suggestive of his non-commissioned works, and his new experiments in digital posters. His powerful visuals filling the gallery space vividly conveyed the wondrous appeal of his innovative typography, a field in which he has played a leading role throughout a career spanning 30 years. In this way the exhibition enabled visitors to reconfirm why, never fading into oblivion as a product of specific times, Neville Brody has continuously remained a formidable presence as a truly multi-visual designer.

2010 Tokyo Art Directors Club Exhibition

Dates = July 5-29, 2010

Award Winners = ○ADC Members Awards = Kaoru Kasai, Tsuguya Inoue + Ryota Atarashi + Sachiko Kuru, Gan Hosoya + Shou Akiyama + Tetsuma Maki + Higashi Ishida ○Hiromu Hara Prize = Gan Hosoya *The following award-winning works were exhibited at G8: ○Grand Prix = Takahisa Nakajima + Kosuke Ishige + Koji Hirayama + Takuya Isojima + Tamotsu Fujii ○ADC Awards = Atsuki Kikuchi, Noriaki Hayashi, Masashi Tentaku, Shogo Kishino, Takahisa Nakajima, Yoshimitsu Sawamoto + Akira Nagai, Tomoko Yamashita, Masayoshi Kodaira, Yutaka Sano + Shoji Uchida

Exhibition Overview = Since its establishment in 1952 the Tokyo Art Directors Club (ADC) has continuously served as a driving force in Japan's advertising and design worlds as one of the most prestigious prizes in advertising and design offered each year. The award-winning works were selected by 77 members from among roughly 10,000 entries through a rigorous judging process. The award-winning and other outstanding works were shown at two venues: those by ADC members at ggg, and those by non-ADC members at Creation Gallery G8. Together they offered visitors the opportunity to view the very finest achievements among the year's graphic and advertising works.



ラルフ・シュライフォーゲル展

会期＝2010年8月4日－28日

作家略歴＝1960年スイス、ルツェルン生まれ。77～82年チューリッヒ芸術大学にてグラフィックデザインを学ぶ。82年チューリッヒにデザインスタジオを設立。文化イベントのポスター制作に最も力を注ぐ。92～2001年チューリッヒ芸術大学講師。00～01年ベルリン芸術大学客員教授。03年よりルツェルン音楽大学、10年よりバーゼル造形大学で教鞭をとる。ショモン・ポスターフェスティバル金賞ほか受賞多数。作品はニューヨーク近代美術館永久保存ほか、世界中でコレクションされている。AGI会員。

展示概要＝1年間にほんの数点しか制作しないというシュライフォーゲルのポスター作品は、常に視覚表現におけるあらゆる可能性が試みられ、緻密で繊細な1枚1枚がセンセーションを巻き起こし、世界中を魅了し続ける。東京での初の個展となった本展では、フィルムボディウムの映画イベントポスター、チューリッヒ・デザインミュージアムの展覧会ポスターなど、彼が最も力を注ぐ文化関連施設のポスターを中心に40点を厳選。ポスターというメディアに対するあくなき実験精神の結晶。

Ralph Schraivogel

Dates = August 4-28, 2010

Artist Profile = Ralph Schraivogel was born in Lucerne, Switzerland in 1960. Upon graduation in 1982 he opened his own design studio. His primary focus is on the creation of posters for cultural events. In 1992-2001 he taught at the Zurich School of Design; in 2000-01 a guest professor at Berlin University of the Arts; since 2003 he has been teaching at Lucerne University of Applied Sciences and Arts and since 2010 at Basel School of Design. Among his many awards won to date are the Gold Medal at the Chaumont Poster Festival. His works are included in the permanent collection of the MoMA and in other collections worldwide. He is a member of AGI.

Exhibition Overview = Schraivogel produces only a handful of posters a year, but those works invariably showcase the myriad possibilities of visual expression. Each of his meticulously detailed works always generates a sensation, ensuring that his works continue to be admired and appreciated worldwide. This exhibition, his first solo showing in Tokyo, brought together a carefully selected array primarily of his posters for cultural institutions, works into which he pours his soul most heartily. They included film posters for Filmpodium and exhibition posters for the Museum of Design Zurich. Through this exhibition visitors were able to revel in the unchanging appeal of the medium of posters.



プッシュピン・パラダイム シーモア・クワスト | ボール・デイヴィス | ミルトン・グレイザー | ジェームズ・マクミラン

会期＝2010年9月2日－28日

作家略歴＝プッシュピン・スタジオ：1954年にミルトン・グレイザー、シーモア・クワスト、エドワード・ソレルにより結成。イタリア・ルネサンス、アール・ヌーヴォー、アール・デコ、初期アメリカ絵画、19世紀木版、ロシア構成主義、19世紀から20世紀にかけての活版印刷からインスピレーションを得た洗練された折衷性の特徴。59～63年ボール・デイヴィス、66～69年ジェームズ・マクミラン在籍。ミルトン・グレイザーは74年に独立。

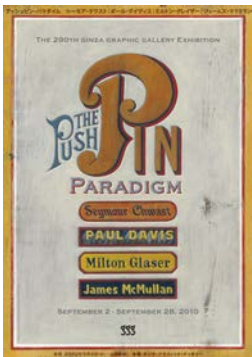
展示概要＝「Paradigm＝パラダイム(ある時代の物の見方、考え方を規定している理論的枠組)」をキーワードに、プッシュピン・スタジオの主要メンバーの4人が、どのようにプッシュピンから影響を受け、そこから「核分裂」してどのように各々の道へと邁進していったかを、ニューヨークデザインの黄金時代、1960年代とその前後に制作されたポスター、原画、雑誌、書籍など223点から紹介。時代を超えて輝き続けている不朽の遺産の数々が登場した。

Push Pin Paradigm: Seymour Chwast | Paul Davis | Milton Glaser | James McMullan

Dates = September 2-28, 2010

Artist Profile = Push Pin Studios was founded in 1954 by Milton Glaser, Seymour Chwast and Edward Sorel. The studios' work is known for its refined eclecticism, its inspirational sources encompassing Italian Renaissance, Art Nouveau, Art Deco, early American painting, 19th century woodblock art, Russian Constructivism, and letterpress printing of the 19th and 20th centuries. Paul Davis was a member of the studios from 1959 to 1963; James McMullan, from 1966 to 1969. Milton Glaser left the group to go independent in 1974.

Exhibition Overview = The key word for this exhibition was "paradigm," a theoretical framework prescribing the worldview at a particular point in time. The exhibition introduced how the four core members of the Push Pin Studios were influenced by their involvement in the studios, and the paths they each proceeded along after splitting off from the group. A total of 223 works were on display, including posters, original drawings, magazines and books all produced in or around the 1960s, the golden age of design in New York. Together they constitute an enduring legacy that continues to shine brilliantly across all parameters of time.



海と山と新村則人

会期＝2010年10月5日－28日

作家略歴＝1960年山口県大島郡浮島生まれ。漁師の家庭で8人兄弟の8番目として育つ。小学校4年の時に赴任してきた伊藤哲之先生の授業でポスターの魅力にはまり、デザイナーを目指す。大阪デザイナー学院卒業。大阪で働いている時に松永真デザイン事務所を知り、憧れる。84年松永真デザイン事務所入社。その後、たき工房、I&S/BBDOを経て、95年新村デザイン事務所設立。JAGDA、NY ADC会員。

展示概要＝「海」と「山」をテーマに、新村氏の自然への眼差しを再現。故郷浮島の風景を壁一面に展開した1階は、あたかもその場にいるかのような気分させてくれる雄大な景色となった。また「山」をテーマとした地階では、これまでに制作された無印良品キャンプ場をはじめとするポスター作品を展示。実際の押し花とともに山の自然の豊かさを伝えた。国連が定める「国際生物多様性年」であった2010年、生物多様性への関心が高まりつつあるなか、「海の魚は、森に育てられる」というメッセージを伝えた初期作品である新聞広告が、新村氏の信念を象徴していた。

Seas and Mountains and Norito Shinmura

Dates = October 5-28, 2010

Artist Profile = Norito Shinmura was born in 1960 on Ukashima in Yamaguchi, the last of eight children in a fisherman's family. In his fourth year of elementary school, he became enthralled by poster art under the influence of a teacher. After graduating from Osaka Designers' College, he began working in Osaka, and came to know of and admire Shin Matsunaga; he finally joined Matsunaga's studio in 1984. He later worked for Taki Corporation and I&S/BBDO, and then in 1995 he established Shinmura Design Office. He is a member of JAGDA and the New York ADC.

Exhibition Overview = This exhibition demonstrated Shinmura's views toward nature: seas and mountains. The ground floor was dedicated to his depictions of the landscapes in which he grew up, Ukashima; filling the gallery walls, the dynamic scenery gave visitors the feeling they were traveling there. The basement was devoted to works on the mountain theme, highlighted by his posters for Muji's campgrounds and others. Here the exhibits also included real pressed flowers conveying the abundance of nature in mountain settings. Shinmura's early newspaper advertisement in which he declared that the fish in the seas are actually nurtured by forests, served as a perfect symbol of his conviction to safeguard the bounties of nature.



服部一成 二千年十一月

会期＝2010年11月4日－27日

作家略歴＝1964年東京生まれ。88年東京藝術大学美術学部デザイン科卒業、ライトパブリシティ入社。2001年よりフリーランスのグラフィックデザイナー、アートディレクター。「キュービ－ハーフ」、JR東日本等広告のディレクション、雑誌「真夜中」「流行通信」等アートディレクション、三菱一号館美術館等CI、東京国立近代美術館等展覧会告知物デザインのほか、写真集や画集等ブックデザインを多数手がける。東京ADC賞・ADC会員賞、第6回亀倉雄策賞、東京TDCグランプリほか受賞。

展示概要＝ケーキやネコ、薔薇や月など、これまでにデザインされたモチーフを繰り返し使うことで壁紙のようなB全ポスターをつくり、ベニヤで建てた3つの小部屋の壁にそれらを埋めつくした。各モチーフは繰り返され、B全が作品なのか、並べた状態が作品なのか、空間が作品なのか判らなくなる。服部氏による「グラフィックデザインの展覧会」に対する一つの形を示した。また地階では主に独立してから手がけたさまざまな仕事を、やはりベニヤを使ってテーマごとに紹介。現在の等身大の服部一成が見事に表現された。

Kazunari Hattori: November 2010

Dates = November 4-27, 2010

Artist Profile = Kazunari Hattori was born in Tokyo in 1964. In 1988, upon graduating from Tokyo National University of Fine Arts and Music, he joined Light Publicity. Since 2001 he has worked freelance as a graphic designer and art director. His most notable work to date includes advertising for "Kewpie Half" mayonnaise, art direction for *Mayonaka* and *Ryuko Tsushin* magazines, CI for Mitsubishi Ichigokan Museum, and numerous book designs. Awards won to date include Tokyo ADC Awards, the Yusaku Kamekura Design Award, and the Tokyo TDC Grand Prix.

Exhibition Overview = Taking various motifs from his design portfolio to date and using them in repeated succession, Hattori made large B1-size posters like wallpaper. He then used these prints to cover the walls of what looked like small rooms constructed of plywood. Each motif was repeated on the same wall, leaving the visitor to wonder whether the "work" on display was the single print, or perhaps the combination of prints all lined up, or perhaps the space as a whole. What Hattori demonstrated was one form of how to create an exhibition using graphic design. The basement was devoted to his works created since going freelance, again displayed using plywood and exhibited by themes. It brilliantly showed just what Kazunari Hattori is all about today.



EUPHRATES ユーフラテス展 ～研究から表現へ～

会期＝2010年12月2日－25日

作家略歴＝ユーフラテス：慶應義塾大学佐藤雅彦研究室の卒業生である、山本晃士ロバート、貝塚智子、うえ田みお、佐藤匡、石川将也、米本弘史からなるクリエイティブグループ。映像、アニメーション、展示、グラフィックなど、メディアを問わず「ある考え方（概念）」を中心に据えた表現づくりに特長がある。結成は2005年。New York ADC金賞、文化庁メディア芸術祭アート部門優秀賞、科学技術映像祭文部科学大臣賞ほか受賞。

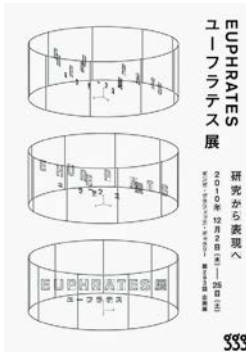
展示概要＝大学の研究室を出自としているため、会社組織でありながら「研究」を活動の軸に据えているユーフラテスは、研究によって得られた知識を活かし、メディアを問わず新しい表現を生み出している。また昨年4月からNHK教育テレビでスタートした5分番組「Eテレ2355」と「Eテレ0655」は、佐藤雅彦とユーフラテスによる最新の活動として注目を集める。本展ではその「2355」「0655」そしてDNP「アイデアの工場」を中心にユーフラテスの作品を一覧するとともに、制作の基盤となっている研究活動に焦点を当て、研究から表現への展開を紹介した。

The Euphrates Exhibition: From Research to Expression

Dates = December 2-25, 2010

Artist Profile = Euphrates is a creative group formed in 2005 comprised of graduates of the Masahiko Sato Laboratory at Keio University. The group is notable for its emphasis on the expression of concepts in all media formats, including video, animation, exhibitions and graphics. To date Euphrates has won the New York ADC Gold Prize, the Excellence Prize in Art at the Japan Media Arts Festival, and the Education Minister's Prize at the Science and Technology Film/ Video Festival.

Exhibition Overview = Given its origins from a university research lab, Euphrates, while adopting a corporate structure, pivots its activities around research. It then takes the knowledge that it gains from its research and applies it to create new forms of expression across a wide media spectrum. Recently the group has been winning attention for its involvement, in collaboration with Masahiko Sato, on two short (5-minute) TV programs launched on NHK's educational channel in April 2010. This exhibition focused on Euphrates' work for those programs and on the "Factory of Ideas" work performed for DNP. It also placed the spotlight on the research activities that underpin the group's creative work, introducing how research evolves to artistic expression.



秀英体 100

会期＝2011年1月11日－31日

企画監修＝永井一正

展示デザイン＝大日本タイポ組合

新作出展作家(五十音順)＝浅葉克己、井上嗣也、葛西 薫、勝井三雄、佐藤晃一、佐野研二郎、澁谷克彦、杉浦康平、杉崎真之助、祖父江 慎、高橋善丸、立花文穂、永井一正、中島英樹、長嶋りかこ、仲條正義、中村至男、南部俊安、服部一成、原 研哉、平野敬子、平野甲賀、松永 真、三木 健＋コントラプンクト(デンマーク)

展示概要＝明治45年(1912年)に誕生した、DNPのオリジナル書体「秀英体」の生誕100年を記念する展覧会。築地体とならび「明朝活字の二大潮流」として、その後の和文書体に大きな影響を与えてきた秀英体の魅力を伝える。「四季」をテーマに24名＋一組のグラフィックデザイナーによって制作された新作ポスターを1階で展示。地階では活版印刷からデジタル活用まで、時代とともに大きく変化してきた秀英体の100年を、書籍、ポスター、広告等、さまざまな作品を通して展望した。秀英体の深い骨格にひそむ魅力を探るとともに、次なる100年へ向けた新たなデジタルコミュニケーションへの展開を宣言する機会となった。

Shueitai 100

Dates = January 11-31, 2011

Planning & Direction = Kazumasa Nagai

Exhibition Design = Dainippon Type Organization **Designers Exhibiting New Works** = Katsumi Asaba, Kenya Hara, Kazunari Hattori, Keiko Hirano, Kouga Hirano, Tsuguya Inoue, Kaoru Kasai, Mitsuo Katsui, Shin Matsunaga, Ken Miki, Kazumasa Nagai, Rikako Nagashima, Hideki Nakajima, Masayoshi Nakajo, Norio Nakamura, Toshiyasu Nambu, Kenjiro Sano, Koichi Sato, Katsuhiko Shibuya, Shin Sobue, Shinnoske Sugisaki, Kohei Sugiura, Fumio Tachibana, Yoshimaru Takahashi and Kontrapunkt (Denmark) (alphabetical order)

Exhibition Overview = This exhibition was mounted to celebrate the 100th year since the creation of Shueitai, an original printing type launched by DNP in 1912 and still in wide use. To convey Shueitai's ageless appeal, the ground floor was devoted to new poster works by 24 graphic designers and one design team on the theme of "the four seasons." The basement served as the venue to demonstrate an overview of Shueitai's 100 years amidst the dynamic changes from the days of movable type to its current applications in the digital era. The exhibition not only probed the enduring appeal of the cleanly structured Shueitai typeface but also was a timely opportunity to proclaim its development as a new digital communication format for the next 100 years.



イアン・アンダーソン／ ザ・デザイナーズ・リパブリックが トーキョーに帰ってきた。

会期＝2011年2月4日－28日

作家略歴＝イギリス、クロイドン生まれ。リスボンビエンナーレほかクリエイティブディレクター、サイト・ギャラリーのバトロノ、AGI会員、コラムライター、教育者、アーティスト、DJ。1979～82年シェフィールド大学哲学科専攻。デザインは独学。86年フランス革命記念日(7月14日)にシェフィールドにてザ・デザイナーズ・リパブリック(TDR)立ち上げを宣言。2009年1月に解散するが間もなく復活。イアン・アンダーソンによりTDRは現在も存続中。

展示概要＝世界中にフォロワーを持つTDRが、解散、復活を経てついにgggに登場。90年代にはMacの台頭によるデジタル技術を駆使して時代の視覚文化を牽引。日本人にも馴染みのある当時のデザインや、活動開始当初のインディーズレーベル関連のアートワーク、そして近年のグローバル企業のための仕事から批判的精神満載のヴィジュアルまで、本展用にリミックス、リデザインされた大型出力作品による、TDRラビリンズ。大迫力の展示となった。BGMはオウデカによるオリジナルミュージック。

Ian Anderson / The Designers Republic C(H)-ōme (+81/3)

Dates = February 4-28, 2011

Artist Profile = Ian Anderson was born in Croydon, England. He works on multiple fronts as a creative director (The Lisbon Biennale, etc.), patron of Site Gallery, member of AGI, writer of columns, educator, shown artist and DJ. From 1979 to 1982 he studied philosophy at the University of Sheffield. As a designer, he is self-taught. In 1986 he launched The Designers Republic (TDR) in Sheffield. TDR disbanded in January 2009 but was soon reborn. It continues to create today as Anderson's organization.

Exhibition Overview = The Designers Republic, which enjoys a strong following worldwide, came back "home" to Tokyo after its disbanding and re-birth. In the 1990s, using its mastery of digital technology TDR became a driving force in visual culture following the emergence of Mac computers. For this show Ian Anderson remixed and re-designed his works on large scale, including TDR's designs from those days famed even here in Japan, artwork for indie music labels from TDR's early days, recent works created for global corporations, and visuals replete with TDR's typically critical slant. The result was a labyrinth of overwhelming power, all complemented by original music by Autechre.



デザイン 立花文穂

会期＝2011年3月4日－28日(東日本大震災により3月12日－22日臨時休館)

作家略歴＝1968年広島県生まれ。92年武蔵野美術大学造形学部視覚伝達デザイン学科卒業。94年東京藝術大学大学院修士課程美術研究科修了。95年の佐賀町エキジビットスペース(東京)での展覧会「MADE IN U.S.A.」を皮切りに個展、グループ展多数開催。2004年第21回ブルノ国際グラフィックデザインビエンナーレグランプリ(チェコ)ほか受賞。07年に創刊された「球体」では責任編集およびアートディレクターとして独自の本の世界を展開。

展示概要＝「デザイン 立花文穂」と題する本展のキーワードは「デザイン」そして「印刷物」。これまでに制作された数々の印刷物を、テーマや大きさに関係なく、惜しげなく、飾ることなく網羅。どこかの街の塙のような、剥がし残しのあるベニヤ壁と、ちょっと背が高めの特製の展示台すら独特の香りたつ空間で、「手」によりつくりだされた「紙々」が表情豊かに、伸び伸びと並んだ。デジタル世代に対する反発かのように、紙の質感や手作りのぬくもりを求める近年の動向以前から、変わらず貫き通された立花氏の微妙で繊細な美が創出された。

Design | Fumio Tachibana

Dates = March 4-28, 2011(temporally closed between March 12 and 22 due to the Great East Japan Earthquake)

Artist Profile = Fumio Tachibana was born in Hiroshima in 1968. He completed the Master's course in Fine Arts at Tokyo National University of Fine Arts and Music in 1994. In 2004 he won the Grand Prix at the 21st International Biennale of Graphic Design in Brno, Czech Republic. Currently he is creating a unique world in book production as editor-in-chief and art director of *Kyutai*, an art book periodical launched in 2007.

Exhibition Overview = There were two key themes to this exhibition: "design" and "printed matter." The show liberally displayed a full complement of Fumio Tachibana's numerous printed matters to date: works on myriad topics and in myriad sizes. They were arranged on plywood walls that still showed traces of earlier use, like walls on some city street, and on specially made display tables. Within this total space redolent in its own unique way, hand-made paper works of all kinds were lined up with seeming room to spare, able to express themselves freely. Visitors were able to intoxicate themselves with Tachibana's subtle and detailed beauty—traits unchanging since even before the recent trend toward seeking the warmth evoked by paper texture and the hand-made article as a form of resistance against our digital age.



Reveiw of ddd 2010-2011

ddd 展覧会概要

GRAPHIC WEST 3 phono/graph —音・文字・グラフィック—

会期＝2011年1月18日—3月9日
参加作家＝藤本由紀夫：1950年名古屋生まれ。日常のなかの音に着目したサウンド・オブジェを制作。空間における音の体験から新たな認識へと開かれていくような活動を展開。ニコール・シュミット：1978年大阪生まれ。タイポグラフィに重点を置き、紙媒体を中心にデザイン。softpad：アート／デザインユニット。1999年結成。メディアの境界線と接点を探る表現活動を行う。intext：2004年スタート。デザインの特性を用いて他メディアへ接触し、システムの転用や再解釈を試みる。八木良太：1980年愛媛県生まれ。モノの機能や属性を読み替え、再構成して関係性や価値を反転させたり、経験や記憶を新たなコンテキストで再生。
展示概要＝音とアートとグラフィックの新しい可能性を俯瞰的に捉えようという試み。視覚表現、聴覚表現といったジャンルにこだわること無く、音・文字・グラフィックの世界で表現活動をしている上記メンバーが参加。各分野の気鋭のクリエイターたちが、それぞれの多角的かつ柔軟な視点で「音(phono)の記録(graph)」というテーマに対峙した実験的な取り組みを紹介。

GRAPHIC WEST 3 phono / graph —sound・letters・graphics—

Dates = January 18 – March 9, 2011
Participating Artists = Yukio Fujimoto: Fujimoto creates “sound artworks” focused on sounds heard in everyday life. His activities take the experience of hearing sounds in space and expand that experience to achieve new awareness. Nicole Schmid: Schmid's design work centers on paper media, with emphasis on typography. softpad: softpad undertakes artistic projects that explore the boundaries and connections between various media. intext: intext takes design's special qualities and merges it with other media, testing the waters of system conversion and reinterpretation. Lyota Yagi: Yagi reinterprets the functions and attributes of objects, reconfigures them and turns around their relativity and values, thereby recycling experiences and memories in new contexts.
Exhibition Overview = This exhibition was an experiment seeking to achieve a bird's-eye view of new possibilities in sound, art and graphics. The participating members are all active in the realms of sound, letters and graphics, favoring no one genre, visual or aural, in particular. The creative artists, all vibrant and up-and-coming forces within their fields, experimented with the theme of “phono/graph” from their respective multilateral and flexible vantage points.



北川一成 Issay Kitagawa

会期＝2010年3月23日—5月12日
Dates = March 23 – May 12, 2010



TDC展 2010 Tokyo Type Directors Club Exhibition 2010

会期＝2010年5月21日—7月3日
Dates = May 21 – July 3, 2010



DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅲ 福田繁雄のヴィジュアル・ジャンピング DNP Graphic Design Archives CollectionⅢ Shigeo Fukuda's Visual Jumping

会期＝2010年7月13日—9月4日
Dates = July 13 – September 4, 2010



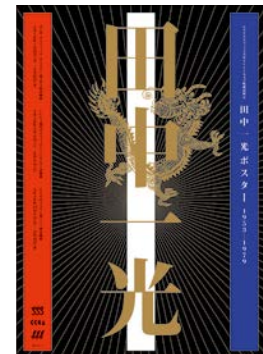
2010 ADC展 2010 Tokyo Art Directors Club Exhibition

会期＝2010年9月14日—10月30日
Dates = September 14 – October 30, 2010



DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅱ 田中一光ポスター1953-1979 DNP Graphic Design Archives CollectionⅡ Ikko Tanaka Posters 1953-1979

会期＝2010年11月9日—12月22日
Dates = November 9 – December 22, 2010



Reveiw of CCGA 2010

CCGA 展覧会概要

DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅱ
田中一光ポスター1953-1979
DNP Graphic Design Archives CollectionⅡ
Ikko Tanaka Posters 1953-1979

会期=2010年3月6日—6月6日
Dates = March 6 – June 6, 2010



ロイ・リキテンスタイン展：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 vol.22
Roy Lichtenstein: 22nd Exhibition of Prints
from the Tyler Graphics Archive Collection

会期=2010年6月12日—9月12日
Dates = June 12 – September 12, 2010



DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅲ
福田繁雄のヴィジュアル・ジャンピング
DNP Graphic Design Archives CollectionⅢ
Shigeo Fukuda's Visual Jumping

会期=2010年9月18日—12月23日
Dates = September 18 – December 23, 2010



1986

- 3月 1回 大橋正展 野菜のイラストレーション
- 4月 2回 福田繁雄展 Illustic412
- 5月 3回 奥村毅正展 燦々彩譜
- 6月 4回 秋山育展 ピクチャーレリーフ
- 7月 5回 '86 Tokyo ADC展
- 8月 6回 アートワークス展Ⅰ
- 9月 7回 佐藤晃一展 箱についてー2
- 10月 8回 栗津潔展 エノタメノジブンカクメイ
- 11月 9回 追悼・ハーバート・バイヤー展
- 12月 10回 K2 Live!展

1987

- 1月 11回 辻修平 いはらの絵展
- 2月 12回 花の万博+博覧会のシンボルマーク展
- 3月 13回 藤幡正樹展 geometric love
- 4月 14回 松永貞 毎日デザイン賞受賞記念展
- 5月 15回 安西水丸 二色展
- 6月 16回 ルウ・ドーフスマンとCBSの
クリエイティブワークス展
- 7月 17回 '87 Tokyo ADC展
- 8月 18回 アートワークス展Ⅱ
- 9月 19回 五十嵐威暢の立体数字展
- 10月 20回 青葉益輝プリンティングアート展
- 11月 21回 オルガー・マチスのポスター展
- 12月 22回 ミルトン・グレイザー展

1988

- 1月 23回 木村勝・バッケー・ジグディレクション展
- 2月 24回 谷口広樹展 猿の記憶
- 3月 25回 銀座百点 表紙原画展
- 4月 26回 吉田カツ展 描き下し刷り下し
- 5月 27回 AGI '88 Tokyo展
- 6月 28回 イッセイ・ミヤケのポスター展
- 7月 29回 '88 Tokyo ADC展
- 8月 30回 アートワークス展Ⅲ
- 9月 31回 情報ポスター・リクルート展
- 10月 32回 早川良雄「女」原画展
- 11月 33回 仲條正義展 NAKAJOISH
- 12月 34回 スタシスのポスターとイラストレーション展

1989

- 1月 35回 ショッピングバッグ・デザイン展
- 2月 36回 矢萩喜従郎展
- 3月 37回 Texture展
皆川魔鬼子+田原桂一+山岡茂
- 4月 38回 タナカノリユキ展 Gokan-都市の表層
- 5月 39回 オトル・アイヒャー展
- 6月 40回 操上和美展 Photographies
- 7月 41回 若尾真一郎展 Wakao Collection
- 8月 42回 アートワークス展Ⅳ
- 9月 43回 永井一正展
- 10月 44回 Europalia '89 Japan
新作ポスター 12人展
- 11月 45回 チャールズ・アンダーソン展
- 12月 46回 清原悦志の仕事展 Hommage

1990

- 1月 47回 秋月繁展 遊びの箱
- 2月 48回 菊地信義展 装幀の本「棚」
- 3月 49回 原田維夫展 木版画「馬」
- 4月 50回 田中一光展 グラフィックアート植物園
- 5月 51回 山城隆一展 猫のいないイラスト
- 6月 52回 松井桂三展 3D
- 7月 53回 寺門孝之展 遺伝子導入天使
- 8月 54回 アートワークス展Ⅴ
- 9月 55回 田原桂一展 光の香り

- 10月 56回 浅葉克己の新作展 アジアの文字
- 11月 57回 伊勢克也展 イメージのマカロニ
- 12月 58回 蓮田やすひろ展 ビープル

1991

- 1月 59回 舟橋全二展
- 2月 60回 太田徹也展 ダイヤグラム
- 3月 61回 ペア・アーノルティ展
- 4月 62回 澤田泰廣展 P2(Painting×Printing)
- 5月 63回 新井苑子展 インスピレーションを描く
- 6月 64回 Communication & Print
新作ポスター 10人展
- 7月 65回 中垣信夫+中垣デザイン事務所展
- 8月 66回 アートワークス展Ⅵ
- 10月 67回 Trans-Art 91展
- 12月 68回 '91 Tokyo ADC展

1992

- 1月 69回 アイヴァン・チャマイエフ展 コラージュ
- 2月 70回 立花ハジメ初の個展
- 3月 71回 第4回東京TDC展
- 4月 72回 ヘンリック・トマシェフスキ展
- 5月 73回 シーモア・クワスト展 メタル彫刻
- 6月 74回 鹿目尚志展 BOX・XX
- 7月 75回 中村誠 個展
- 8月 76回 リック・バリセンティ展
- 9月 77回 梶西薫展 'AERO'
- 10月 78回 瀧本唯人、宇野亜喜良、和田誠、
山口はるみ展
- 11月 79回 ボール・ランド展
- 12月 80回 フロシキ展

1993

- 1月 81回 小島良平展 Tropica Grafica
- 2月 82回 稲越功一展 アウト・オブ・シーズン
- 3月 83回 '92 Tokyo ADC展
- 4月 84回 第5回東京TDC展
- 5月 85回 U.G.サトウのポスター展 "Freedom"
- 6月 86回 オマー・ジュ 向秀男展
- 7月 87回 文字からのイマジネーション展
- 8月 88回 現代香港のデザイン8人展
- 9月 89回 勝井三雄展 光の国
- 10月 90回 河村要助、矢吹申彦、湯村輝彦、
安西水丸展
- 11月 91回 ソール・パス展
- 12月 92回 グリーティング・ポップアップ13人展

1994

- 1月 93回 栗津潔展 H²O Earthman
- 2月 94回 第6回東京TDC展
- 3月 95回 上條喬久展 Windscape Mindscape
- 4月 96回 片山利弘展
- 5月 97回 永井一正展
- 6月 98回 オランダのグラフィックデザイン100年展
- 7月 99回 '94 Tokyo ADC展
- 8月 100回 グラフィック・グッズ展
- 10月 101回 平野甲賀「文字の力」展
- 10月 九州の九人の九つの個性展
- 11月 102回 亀倉雄策ポスター新作展
- 12月 103回 原研哉展
- 12月 土橋とし子、中村幸子、メグ・ホソキ3人展

1995

- 1月 104回 ブルーノ・ムナーリ展
- 2月 105回 日本のブックデザイン展1946-95
- 3月 106回 第7回東京TDC展
- 4月 107回 ビーター・ブラッティンガ展

- 5月 108回 田中一光展 人間と文字
- 6月 109回 ニクラウス・トロックスラーポスター展
- 7月 110回 '95 Tokyo ADC展
- 8月 111回 リズム&ヒューズの
コンピュータグラフィックス展
- 9月 112回 八木保展 自然観
- 9月 特別展 世界のグラフィック20人展
ggg Books 20冊刊行記念
- 10月 113回 モダン・タイポグラフィの流れ展ー1
- 11月 114回 戸田正寿・イヤイヤランド展
- 12月 115回 日本のイラストレーション50年展

1996

- 1月 116回 蓮田やすひろ展 お江戸で、ゆらゆら
- 2月 117回 モダン・タイポグラフィの流れ展ー2
- 3月 118回 ポスター23人展 イン・サンパウロ
- 4月 119回 第8回東京TDC展
- 5月 120回 現代ハンガリーのグラフィック4人展
- 6月 121回 勝岡重夫タイポグラフィックアート展
- 7月 122回 '96 Tokyo ADC展
- 8月 123回 前田ジョン「かみとコンピュータ」展
- 9月 124回 K2-黒田征太郎/長友啓典「二脚の椅子」展
- 10月 125回 チェコ・アヴァンギャルド・ブックデザイン
1920s・'30s
- 11月 126回 Graphic Wave 1996
青木克憲+佐藤卓+山形季央
- 12月 127回 アラン・ル・ケルネ展

1997

- 1月 128回 下谷二助展 人じん
- 1月 特別展 (CCGA)ジョセフ・アルバース展
- 2月 129回 大橋正展 体温をもつ野菜たち
- 3月 130回 東京TDC展
- 4月 131回 仲條正義〇〇〇展
- 5月 132回 今日の雑誌8誌による・特集エコロジー展
- 6月 133回 横尾忠則ポスター展
吉祥招福繁昌描き下ろし!
- 7月 134回 '97 Tokyo ADC展
- 8月 135回 河原敏文とボリゴン・ピクチュアズ展
- 9月 136回 メキシコ10人展
- 10月 137回 Graphic Wave 1997
秋田寛+井上里枝+福島治
- 10月 特別展 「勝負勝負」10周年記念展
- 11月 138回 福田繁雄のポスター〈SUPPORTER〉
- 12月 139回 GLOBAL展 世界33人の
デザイナーによるデュオポスター

1998

- 1月 140回 鈴木八朗展 8RO ART & AD
- 2月 141回 オーデルマット+ティッシ展
- 3月 142回 スタシス・エイドゥリゲヴィチウス展
- 4月 143回 東京TDC展'98
- 5月 144回 スタジオ・ドゥンパー展
- 6月 145回 山本容子展 オペラレッシン
- 7月 146回 '98 Tokyo ADC展
- 8月 147回 河口洋一郎展 電脳宇宙への旅
- 9月 148回 Graphic Wave 1998
蝦名龍郎+平野敬子+三木健
- 10月 149回 グンター・ランボー展
- 11月 150回 フィリップ・アペログ展
- 12月 151回 ヘルベルト・ロイビン展

1999

- 1月 152回 海外作家によるFuroshiki Graphics展
- 2月 153回 日本のタイポグラフィック1946-95展
- 3月 154回 木村恒久構成フォト・グラフィックス展
- 3月 特別展 堀内誠一の仕事展雑誌づくりの決定的瞬間

- 4月 155回 '99 TDC展
- 5月 156回 現代ブルガリアのグラフィックデザイン展
- 6月 157回 日比野克彦展 誘拐したい
- 7月 158回 '99 ADC展
- 7月 特別展 前田ジョン One-line.com
- 8月 159回 矢萩喜従郎展
- 9月 160回 Graphic Wave 1999
鈴木守+松下計+米村浩
- 10月 161回 FUSE展
- 11月 162回 松井桂三展
- 12月 163回 ボール・デイヴィスのポスター展
- 12月 特別展 アーヴィング・ベン
三宅一生の仕事への視点

2000

- 1月 164回 Graphic Message for Ecology展
- 1月 特別展 篠山紀信&マニュエル・ルグリ展
- 2月 165回 ブルーノ・モングッツィ展
形と機能の詩人
- 3月 166回 伊藤憲治展 医学誌「ステスコープ」の
表紙デザイン半世紀
- 4月 167回 '00 TDC展
- 5月 168回 Poster Works Nagoya 12
岡本滋夫+11人のデザイナーたち
- 6月 169回 なにわの、こてこてグラフィック展
- 7月 170回 2000 ADC展
- 8月 171回 日宣美の時代
日本のグラフィックデザイン1951-70展
- 9月 172回 Graphic Wave 2000
秋山具義+Tycoon Graphics+中島英樹
- 10月 173回 D-ZONE/戸田ツトム展
- 11月 174回 ビエール・ベルナルル展
- 12月 175回 本とコンピュータ展

2001

- 1月 176回 二〇〇一年木田安彦展
- 2月 177回 イタロ・ルビ展
- 3月 178回 "Spring has come"
松永貞、ディテールの競演。
- 4月 179回 01 TDC展
- 5月 180回 コントラプント展
- 6月 181回 原弘のタイポグラフィ展
- 7月 182回 2001 ADC展
- 8月 183回 瀧本唯人展 にんげんもよう
- 9月 184回 Graphic Wave 2001
瀬谷克彦+永井一史+ひびのこづえ
- 10月 185回 ハングルポスター展
- 11月 186回 サイトウマコト展
- 12月 187回 チップ・キッド展

2002

- 1月 188回 ウーヴェ・レシュ展
- 2月 189回 宇野亜喜良展
- 3月 190回 デザイン教育の現場から：
セント・ジュースト大学院の新手法
- 4月 191回 02 TDC展
- 5月 192回 DRAFT展
- 6月 193回 アラン・チャン展 東西西韻
- 6月 特別展 花森安治と暮らしの手帖展
- 7月 194回 2002 ADC展
- 8月 195回 タナカノリユキ展 OUT OF DESIGN
- 9月 196回 Graphic Wave 2002
左合ひとみ+澤田泰廣+新村則人
- 10月 197回 SUN-AD人展
- 11月 198回 ブラジルのグラフィックデザイン展
ブックデザインにみる今日のブラジル
- 12月 199回 ハーブ・ルバリン展

2003

- 1月 200回 田中一光 ポスターとグラフィックアート展
- 2月 201回 サディク・カラムスターファ展
- 3月 202回 現代中国平面設計展
- 4月 203回 03 TDC展
- 5月 204回 ファブリカ展 1994-03 混沌から秩序へ
- 6月 205回 空山基展
- 7月 206回 2003 ADC展
- 8月 207回 新島実展 色彩とフォントの相互作用
- 9月 208回 Graphic Wave 2003
佐野研二郎＋野田岬＋服部一成
- 10月 209回 副田高行「広告の告白」展
- 11月 210回 ステファン・サグマイスター展
- 12月 211回 河野鷹思展

2004

- 1月 212回 永井一正ポスター展
- 2月 213回 伊藤桂司・谷口広樹・ヒロ杉山展
- 3月 214回 雑誌をデザインする集団キャップ展
- 4月 215回 04 TDC展
- 5月 216回 佐藤卓展 PLASTICITY
- 6月 217回 現代デンマークポスターの10年
- 7月 218回 2004 ADC展
- 8月 219回 バーンブルック・デザイン展
Friendly Fire
- 9月 220回 Graphic Wave 2004
工藤青石＋GRAPH＋生意気
- 10月 221回 杉浦康平雑誌デザインの半世紀展
- 11月 222回 佐藤可士和展 BEYOND
- 12月 223回 もう一人の山名文夫展 1920s－70s

2005

- 1月 224回 七つの顔のアサハ展
- 2月 225回 バラリンジ・デザイン展
- 3月 226回 青木克憲XX展
- 4月 227回 05 TDC展
- 5月 228回 和田誠のグラフィックデザイン
- 6月 229回 チャマイエフ&ガイスマー展
- 7月 230回 2005 ADC展
- 8月 231回 佐藤雅彦研究室展
- 9月 232回 Graphic Wave 2005
谷田一郎＋東泉一郎＋森本千絵
- 10月 233回 CCCP研究所展
- 11月 234回 祖父江慎＋cozfish展
- 12月 235回 スイスポスター 100年展

2006

- 1月 236回 亀倉雄策1915-1997展
- 2月 237回 野田岬展
- 3月 238回 シアン展
- 4月 239回 06 TDC展
- 5月 240回 永井一史／HAKUHODO DESIGN
- 6月 241回 田名網敬一主義展
- 7月 242回 2006 ADC展
- 8月 243回 アレクサンダー・ゲルマン展
- 9月 244回 Graphic Wave 2006: School of Design
古平正義＋平林奈緒美＋水野学＋山田英二
- 9月 特別展 AGI日本デザイン総会開催記念:掛け輪展
- 10月 245回 勝手に広告展(中村至男＋佐藤雅彦)
- 11月 246回 中島英樹展 CLEAR in the FOG
- 12月 247回 早川良雄展 日本のデザイン黎明期の証人

2007

- 1月 248回 EXHIBITIONS (Part I)
- 2月 EXHIBITIONS (Part II)
- 3月 249回 キムラカツ展: 問いボックス店
- 4月 250回 07 TDC展

- 5月 251回 ヘルムート・シュミット:
デザイン イズ アティテュード
- 6月 252回 廣村正彰: 2D⇄3D
- 7月 253回 2007 ADC展
- 8月 254回 ワルシャワの風 1966-2006
- 9月 255回 佐野研二郎: ギンザ・サローネ
- 10月 256回 中島信也CM展:
中島信也と29人のアートディレクター
- 11月 257回 Welcome to Magazine Pool:
雑誌デザイン10人の越境者たち
- 12月 258回 Aoba Show:
青葉益輝ワン・マン・ショー

2008

- 1月 259回 アーットダ! 戸田正寿ポスターアート展
- 2月 260回 グラフィックデザインの時代を築いた
20人の証言 Interviews by 柏木博
- 3月 261回 TEXTASY:
フロディ・ノイエシユヴァンダー展
- 4月 262回 08 TDC展
- 5月 263回 アラン・フレッチャー:
英国グラフィックデザインの父
- 6月 264回 がんばれニッポン、を広告してきたんだ
そう言えば、俺。応援団長佐々木●宏
- 7月 265回 2008 ADC展
- 8月 266回 Now Updating... THA、/
中村勇吾のインタラクティブデザイン
- 9月 267回 平野敬子「デザインの起点と終点と起点」
- 10月 268回 「白」原研哉展
- 11月 269回 M/M(Paris) The Theatre Posters
- 12月 270回 OYKOT Wieden+Kennedy Tokyo:
10 Years of Fusion

2009

- 1月 271回 きらめくデザイナーたちの競演－
DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展
- 2月 272回 Helvetica forever: Story of a Typeface
ヘルベチカ展
- 3月 273回 DRAFT Branding & Art Director
- 4月 274回 09 TDC展
- 5月 275回 矢萩喜從郎展
[Magnetic Vision／新作100点]
- 6月 276回 マックス・フーバー展
- 7月 277回 2009 ADC展
- 8月 278回 [ラストショウ] 細谷巖アートディレクション展
- 9月 279回 銀座界限限ガヤガヤ青春ショー
～言い出しっぺ 横尾忠則～
薄本唯人・宇野亜喜良・和田誠・横尾忠則4人展
- 10月 280回 山形季央展
- 11月 281回 北川一成
- 12月 282回 広告批評展 ひとつの時代の終わりと始まり

2010

- 1-2月 283回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅱ
田中一光ポスター 1953－1979
- 3月 284回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅲ
福田繁雄のヴィジュアル・ジャンピング
- 4月 285回 TDC展 2010
- 5月 286回 TALKING THE DRAGON 井上嗣也展
- 6月 287回 NB@ggg ネヴィル・プロディ 2010
- 7月 288回 2010 ADC展
- 8月 289回 ラルフ・シュライフォークル展
- 9月 290回 プッシュピン・パラダイム
シーモア・クワスト | ボール・デイヴィス |
ミルトン・グレイザー | ジェームズ・マクミラン
- 10月 291回 海と山と新村則人
- 11月 292回 服部一成二千年十一月

- 12月 293回 EUPHRATES ユーフラテス展
～研究から表現へ～

2011

- 1月 294回 秀英体100
- 2月 295回 イアン・アンダーソン／ザ・デザイナーズ・
リパブリックがトーキョーに帰ってきた。
- 3月 296回 デザイン 立花文穂



1992-2011

1992

- 1月 1回 Trans-Art 91展
- 3月 2回 アイヴァン・チャマイエフ展 コラージュ
- 4月 3回 第4回東京TDC展
- 5月 4回 リック・バリセンティ展
- 6月 5回 シーモア・クワスト展 メタル彫刻
- 7月 6回 デザイン・プリント・ペーパー展
- 8月 7回 ヴァン・オリバー展
- 10月 8回 中村誠 個展
- 10月 9回 マイケル・メイヴリー展
- 11月 10回 灘本唯人、宇野亜喜良、和田誠、山口はるみ展

1993

- 1月 11回 フロシキ展
- 2月 12回 ホワイ・ノット・アソシエイツ展
- 3月 13回 アレン・ホリハロバート・ナカタ展
- 4月 14回 '92 Tokyo ADC展
- 5月 15回 ラッセル・ウォーレン・フィッシャー展
- 6月 16回 第5回東京TDC展
- 7月 17回 文字からのイマジネーション展
- 8月 18回 デザイン・プリント・ペーパー展 PartⅡ
- 9月 19回 ビル・ソーバーン展
- 10月 20回 U.G.サトーのポスター展 "Treedom"
- 11月 21回 勝井三雄展 光の国
- 12月 22回 現代香港のデザイン8人展

1994

- 1月 23回 ソール・バス展
- 2月 24回 グリーティング・ポップアップ13人展
- 3月 25回 リュディ・パウア／インテグラルコンセプト展
- 4月 26回 河村要助、矢吹申彦、湯村輝彦、安西水丸展
- 5月 27回 ジェニファ・モウラ展
- 6月 28回 永井一正展
- 7月 29回 ウーヴェ・レシュ展
- 8月 30回 '94 Tokyo ADC展
- 9月 31回 デザイン・プリント・ペーパー展 PartⅢ
- 10月 32回 デビッド・カーソン&ゲーリー・ケブキ展
- 12月 33回 庵倉雄策ポスター新作展

1995

- 1月 34回 ヘルマン・モンタルボ展
- 2月 35回 ブルーノ・ムナリー展
- 3月 36回 グラッパ・デザイン展
- 4月 37回 第7回東京TDC展
- 5月 38回 ミシエル・ブーヴェ展
- 6月 39回 田中一光展 人間と文字
- 7月 40回 テレロング展
- 8月 41回 '95 Tokyo ADC展
- 9月 42回 デザイン・プリント・ペーパー展 Ⅳ
- 10月 43回 ベレ・トレント展
- 11月 44回 アジアのデザイナー 6人展

1996

- 1月 45回 日本のイラストレーション50年展
- 2月 46回 マーゴ・チェイス展
- 3月 47回 ヴェルネル・イエカー展
- 4月 48回 グンター・ランボー展
- 5月 49回 第8回東京TDC展
- 6月 50回 カリ・ビッポ展
- 7月 51回 現代ハンガリーのグラフィック4人展
- 8月 52回 '96 Tokyo ADC展
- 9月 53回 前田ジョン「かみとコンピュータ」展
- 10月 54回 アラン・ル・ケルネ展

- 11月 55回 ウッディ・バートル展

1997

- 1月 56回 ジョアン・マシャド展
- 2月 57回 K2オオサカ展 黒田征太郎+長友啓典
- 3月 58回 グラフィックデザイン・イン・チャイナ展
- 4月 59回 東京TDC展
- 5月 60回 メキシコ10人展
- 6月 61回 カトー・デザイン展 思考するデザイン
- 7月 62回 '97 Tokyo ADC展
- 8月 63回 ラルフ・シュライフォーゲル展
- 10月 64回 ジェームズ・ビクトル展
- 11月 65回 GLOBAL展 世界33人のデザイナーによるデュオポスター

1998

- 1月 66回 ファイトヘルベノデ・ヴリンゲル展
- 2月 67回 ジャン・ペノア・レヴィ展
- 3月 68回 〈トロイカ〉ロシア3人展
- 4月 69回 フィリップ・アペログ展
- 6月 70回 東京TDC展'98
- 7月 71回 スタジオ・ドゥンバー展
- 8月 72回 '98 Tokyo ADC展
- 9月 73回 ザフリキ展
- 10月 74回 デビッド・タルタコーバ展
- 11月 75回 台湾四人展

1999

- 1月 76回 海外作家によるFuroshiki Graphics展
- 2月 77回 ビエール・ニューマン展
- 3月 78回 ボーラ・シェアのグラフィックデザイン展
- 5月 79回 ハンブルクのグラフィックデザイン展
- 6月 80回 '99 TDC展
- 7月 81回 ヤン・ライリッヒJr.展
- 8月 82回 '99 ADC展
- 9月 83回 スコット・マケラ[WIDE OPEN]展
- 10月 84回 チャズ・マヴィヤネー
デイヴィースの世界展
- 11月 85回 マカオ2人展

2000

- 1月 86回 Graphic Message for Ecology展
- 2月 87回 松井桂三展
- 3月 88回 ボール・デイヴィス展
- 4月 89回 なにわの、こてこてグラフィック展
- 5月 90回 '00 TDC展
- 6月 91回 アントン・ベイク展
- 7月 92回 ビエール・ベルナル展
- 9月 93回 2000 ADC展
- 10月 94回 イタロ・ルビ展
- 11月 95回 デザイン教育の現場から：ベルリン芸術大学
オルガー・マチス教室によるアプローチ

2001

- 1月 96回 二〇〇一年木田安彦展
- 2月 97回 コントラプンクト展
- 3月 98回 ギルツブルク音楽祭ポスター展
- 5月 99回 01 TDC展
- 6月 100回 チップ・キッド展
- 7月 101回 ハングルポスター展
- 8月 102回 2001 ADC展
- 9月 103回 ウォルフガング・ワインガルト展
- 10月 104回 "Spring has come"
松永真、ディエールの競演。
- 11月 105回 デザイン教育の現場からⅡ：セント・ジュースト大学院の新手法

2002

- 1月 106回 灘本唯人展 にんげんもよう
- 2月 107回 サイトウマコト展
- 3月 108回 オット+シュタイン展
- 4月 109回 タビロ展
- 5月 110回 02 TDC展
- 7月 111回 ウィーンのパスター展：ウィーン市立図書館アーカイブ1883-2002
- 7月 112回 三木健展
- 9月 113回 2002 ADC展
- 10月 114回 サディク・カラムスターファ展
- 11月 115回 中国グラフィックデザイン展

2003

- 1月 116回 SUN-AD人展
- 2月 117回 田中一光 ポスターとグラフィックアート展
- 3月 118回 ファブリカ展 1994-03 混沌から秩序へ
- 4月 119回 カン・タイキュン+フリーマン・ラウ展
- 6月 120回 03 TDC展
- 7月 121回 ルーバ・ルコーバ展
- 8月 122回 2003 ADC展
- 9月 123回 ステファン・サグマイスター展
- 10月 124回 ヨーロッパの文化ポスター展：ノイエ・ザムルング・ミュンヘンの収蔵作品より
- 11月 125回 空山基展

2004

- 1月 126回 副田高行「広告の告白」展
- 2月 127回 永井一正ポスター展
- 3月 128回 現代デンマークポスターの10年
- 4月 129回 雑誌をデザインする集団キャップ展
- 5月 130回 04 TDC展
- 6月 131回 ビエール・メンデル展
- 8月 132回 2004 ADC展
- 9月 133回 パーンプルック・デザイン展 Friendly Fire
- 10月 134回 チェコのポスター展：ブラハ美術工芸博物館
コレクション1960-2003
- 11月 135回 バラリンジ・デザイン展

2005

- 1月 136回 杉浦康平の雑誌デザイン半世紀展
- 2月 137回 シアン展 ベルリンでの13年
- 3月 138回 佐藤可士和展 BEYOND
- 4月 139回 メーフィス&ファン・デュールセン展
- 5月 140回 05 TDC展
- 7月 141回 CCCP研究所展
- 8月 142回 2005 ADC展
- 9月 143回 青木克彦XX展
- 10月 144回 ドイツAGIグラフィックデザイン展
- 11月 145回 和田誠のグラフィックデザイン

2006

- 1月 146回 スイスポスター 100年展
- 2月 147回 グラフィック・ソート・ファシリティ展
- 3月 148回 野田昶展
- 4月 149回 ブルーノ・オルダー二展
- 5月 150回 06 TDC展
- 6月 151回 ブラック&ホワイトポスター展
- 8月 152回 2006 ADC展

2007

- 5月 153回 EXHIBITIONS
- 7月 154回 07 TDC展
- 8月 155回 ヘルムート・シュミット：デザイン イズ アディテュード

- 10月 156回 2007 ADC展
- 11月 157回 キムラカツ展：問いボックス店

2008

- 1月 158回 Welcome to Magazine Pool：雑誌デザイン10人の越境者たち
- 2月 159回 佐野研二郎：ギンザ・サローネ・オーサカ
- 4月 160回 中島信也CM展：中島信也と29人のアートディレクター
- 6月 161回 08 TDC展
- 8月 162回 Now Updating... THA／中村勇吾のインタラクティブデザイン
- 9月 163回 2008 ADC展
- 10月 164回 Aoba Show：青葉益輝ワン・マン・ショー
- 11月 165回 真 and / or 善 杉崎真之助と高橋善丸のグラフィックデザイン

2009

- 1月 166回 Helvetica forever: Story of a Typeface
ヘルベチカ展
- 3月 167回 きらめくデザイナーたちの競演—DNP
グラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展
- 4月 168回 DRAFT: Branding & Art Director
- 6月 169回 09 TDC展
- 8月 170回 2009 ADC展
- 10月 171回 矢萩喜徳郎展
[Magnetic Vision 新作60/100点]

2010

- 1月 172回 感じる箱展
grafの考えるグラフィックデザインの実験と検証
- 3月 173回 北川一成
- 5月 174回 TDC展 2010
- 7月 175回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅱ
福田繁雄のヴィジュアル・ジャンピング
- 9月 176回 2010 ADC展
- 11月 177回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅱ
田中一光ポスター 1953-1979

2011

- 1月 178回 GRAPHIC WEST 3
phono/graph—音・文字・グラフィック—

1995-2010

1995

- 4-7月 グラフィック・ビジョン：
ケネス・タイラーとアメリカ現代版画の30年
- 8-10月 ロイ・リキテンスタイン：
エンタブラチュア→ヌード
- 11-1月 一瞬の刻印：ロバート・マザウェル展

1996

- 3-4月 アメリカ版画の現在地点：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.1
- 4-7月 デイヴィッド・ホックニー展
- 7-10月 ジョセフ・アルバース展
- 10-1月 スタイルを越えて：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.2

1997

- 3-6月 ジェームズ・ローゼンクイスト展
- 6-9月 版画における抽象：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.3
- 10-11月 大竹伸朗：Printing / Painting
- 12-1月 線／色彩／イメージ：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.4

1998

- 3-5月 フランク・ステラ／ケネス・タイラー
構築する版画：
アーティストとプリンター、30年の軌跡
- 5-9月 主張する黒：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.5
- 9-12月 形象としての紙：アラン・シールズ

1999

- 3-5月 福田美蘭展
- 6-9月 かたる かたち：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.6
- 9-12月 版画の話展

2000

- 3-6月 New Works 1998-1999：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.7
- 6-9月 太田三郎：存在と日常
- 9-12月 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ設立展：
ポスターグラフィックス 1950-2000

2001

- 3-5月 版画集への招待：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.8
- 5-7月 折元立身：1972-2000
- 8-10月 藤本由紀夫：四次元の読書
- 10-12月 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ展 Vol.2：
グラフィックデザインの時代

2002

- 3-6月 空間に躍りてた版画たち：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.9
- 6-9月 矢萩喜徳郎：視触、視弾、そして眼差しの記憶
- 9-12月 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ展 Vol.3：
個性の時代

2003

- 3-4月 絵画－永遠の現在を求めて：
リチャード・ゴーマン展
- 4-6月 色彩としての紙：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.10
- 6-9月 ヘレン・フランケンサラー木版画展
- 9-12月 タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション 新収蔵作品展

2004

- 3-6月 イラストレーションの黄金時代
- 6-9月 パスワード：日本とデンマークの
アーティストによる対話
- 9-10月 版で発信する作家たち2004

2005

- 3-6月 アメリカ現代木版画の世界：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.12
- 6-9月 Breathing Light：吉田重信
- 10-12月 decade—CCGAと6人の作家たち

2006

- 3-6月 版に描く：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.13
- 6-9月 藤幡正樹：不完全さの克服
イメージとメディアによって創り出される、
新たな現実感。
- 9-12月 野田哲也：日記

2007

- 3-6月 凹版表現の魅力：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.14
- 6-9月 再生する版画：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.15
- 9-12月 ユニーク・インプレッション：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.16

2008

- 3-6月 厚い色：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.17
- 6-9月 大きな版画、小さな版画：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.18
- 9-11月 黒のモノローグ：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.19

2009

- 2-6月 作品と題名：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.20
- 6-9月 きらめくデザイナーたちの競演－
DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展
- 9-12月 赤のちから：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.21

2010

- 3-6月 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅱ
田中一光ポスター 1953－1979

1986

Mar.	1	Tadashi Ohashi Exhibition
Apr.	2	Shigeo Fukuda Exhibition
May	3	Yukimasa Okumura Exhibition
Jun.	4	Iku Akiyama Exhibition
Jul.	5	'86 Tokyo ADC Exhibition
Aug.	6	Art Works Exhibition I
Sep.	7	Koichi Sato Exhibition
Oct.	8	Kiyoshi Awazu Exhibition
Nov.	9	Herbert Bayer Exhibition
Dec.	10	K2 Live! Exhibition

1987

Jan.	11	Shuhei Tsuji Iroha Exhibition
Feb.	12	Flower Expo + Expo Logo Exhibition
Mar.	13	Masaki Fujihata Exhibition
Apr.	14	Shin Matsunaga Exhibition
May	15	Mizumaru Anzai Exhibition
Jun.	16	Lou Dorfsman and CBS's Creative Works Exhibition
Jul.	17	'87 Tokyo ADC Exhibition
Aug.	18	Art Works Exhibition II
Sep.	19	Takenobu Igarashi Exhibition
Oct.	20	Masuteru Aoba Exhibition
Nov.	21	Holger Matthies Exhibition
Dec.	22	Milton Glaser Exhibition

1988

Jan.	23	Katsu Kimura Exhibition
Feb.	24	Hiroki Taniguchi Exhibition
Mar.	25	Ginza Hyakuten Original Pictures for Cover Exhibition
Apr.	26	Katsu Yoshida Exhibition
May	27	AGI '88 Tokyo Exhibition
Jun.	28	Issey Miyake Poster Exhibition
Jul.	29	'88 Tokyo ADC Exhibition
Aug.	30	Art Works Exhibition III
Sep.	31	Information Posters Recruit Exhibition
Oct.	32	Yoshio Hayakawa Exhibition
Nov.	33	Masayoshi Nakajo Exhibition
Dec.	34	Stasys Eldridgevicius Exhibition

1989

Jan.	35	Shopping Bag Design Exhibition
Feb.	36	Kijuro Yahagi Exhibition
Mar.	37	Texture Exhibition
Apr.	38	Noriyuki Tanaka Exhibition
May	39	Otl Aicher Exhibition
Jun.	40	Kazumi Kurigami Exhibition
Jul.	41	Shinichi Wakao Exhibition
Aug.	42	Art Works Exhibition IV
Sep.	43	Kazumasa Nagai Exhibition
Oct.	44	Europalia '89 Japan 12 Artists' Original Poster Exhibition
Nov.	45	Charles Anderson Exhibition
Dec.	46	Etsushi Kiyohara Exhibition

1990

Jan.	47	Shigeru Akizuki Exhibition
Feb.	48	Nobuyoshi Kikuchi Exhibition
Mar.	49	Tsunao Harada Exhibition
Apr.	50	Ikko Tanaka Exhibition
May	51	Ryuichi Yamashiro Exhibition
Jun.	52	Keizo Matsui Exhibition
Jul.	53	Takayuki Terakado Exhibition
Aug.	54	Art Works Exhibition V
Sep.	55	Keiichi Tahara Exhibition
Oct.	56	Katsumi Asaba Exhibition
Nov.	57	Katsuya Ise Exhibition

Dec.	58	Yasuhiro Yomogida Exhibition
------	----	------------------------------

1991

Jan.	59	Zenji Funabashi Exhibition
Feb.	60	Tetsuya Ohta Exhibition
Mar.	61	Per Arn oldi Exhibition
Apr.	62	Yasuhiro Sawada Exhibition
May	63	Sonoko Arai Exhibition
Jun.	64	Communication & Print Exhibition
Jul.	65	Nobuo Nakagaki Design Office Exhibition
Aug.	66	Art Works Exhibition
Oct.	67	Trans-Art '91 Exhibition
Dec.	68	'91 Tokyo ADC Exhibition

1992

Jan.	69	Ivan Chermayeff Exhibition
Feb.	70	Hajime Tachibana Exhibition
Mar.	71	The 4th Tokyo TDC Exhibition
Apr.	72	Henryk Tomaszewski Exhibition
May	73	Seymour Chwast Exhibition
Jun.	74	Takashi Kanome Exhibition
Jul.	75	Makoto Nakamura Exhibition
Aug.	76	Rick Valicenti Exhibition
Sep.	77	Kaoru Kasai Exhibition
Oct.	78	Tadahito Nadamoto, Akira Uno, Makoto Wada, Harumi Yamaguchi Exhibition
Nov.	79	Paul Rand Exhibition
Dec.	80	Furoshiki Exhibition

1993

Jan.	81	Ryohei Kojima Exhibition
Feb.	82	Koichi Inakoshi Exhibition
Mar.	83	'92 Tokyo ADC Exhibition
Apr.	84	The 5th Tokyo TDC Exhibition
May	85	U.G. Sato Exhibition
Jun.	86	Hideo Mukai Exhibition
Jul.	87	Imagination of Letters Exhibition
Aug.	88	8 Designers in Today's Hong Kong
Sep.	89	Mitsuo Katsui Exhibition
Oct.	90	Yosuke Kawamura, Nobuhiko Yabuki, Teruhiko Yumura, Mizumaru Anzai Exhibition
Nov.	91	Saul Bass Exhibition
Dec.	92	Pop-up Greetings Exhibition

1994

Jan.	93	Kiyoshi Awazu Exhibition
Feb.	94	The 6th Tokyo TDC Exhibition
Mar.	95	Takahisa Kamiyo Exhibition
Apr.	96	Toshihiro Katayama Exhibition
May	97	Kazumasa Nagai Exhibition
Jun.	98	Dutch Graphic Design A Century Exhibition
Jul.	99	'94 Tokyo ADC Exhibition
Aug.	100	Graphic Goods Exhibition
Oct.	101	Koga Hirano Exhibition
Oct.		Kyushu 9 Designers Exhibition
Nov.	102	Yusaku Kamekura Exhibition
Dec.	103	Kenya Hara Exhibition
Dec.		Toshiko Tsuchihashi, Sachiko Nakamura, Meg Hosoki Exhibition

1995

Jan.	104	Bruno Munari Exhibition
Feb.	105	Book Design in Japan 1946-95 Exhibition

Mar.	106	The 7th Tokyo TDC Exhibition
Apr.	107	Pieter Brattinga Exhibition
May	108	Ikko Tanaka Exhibition
Jun.	109	Niklaus Troxler Exhibition
Jul.	110	'95 Tokyo ADC Exhibition
Aug.	111	Rhythm & Hues Computer Graphics
Sep.	112	Tamotsu Yagi Exhibition
Sep.		Special: 20 Graphic Designers of the World, 10th Anniversary of ggg
Oct.	113	Transition of Modern Typography-1 Exhibition
Nov.	114	Masatoshi Toda Exhibition
Dec.	115	50 Years in Japanese Illustrations Exhibition

1996

Jan.	116	Yasuhiro Yomogida Exhibition
Feb.	117	Transition of Modern Typography-2 Exhibition
Mar.	118	Mar. 118 Posters by 23 Artists in São Paulo Exhibition
Apr.	119	The 8th Tokyo TDC Exhibition
May	120	Contemporary Graphics in Hungary Exhibition
Jun.	121	Shigeo Katsuoka Exhibition
Jul.	122	'96 Tokyo ADC Exhibition
Aug.	123	John Maeda Paper and Computers Exhibition
Sep.	124	K2-Seitaro Kuroda / Keisuke Nagatomo Exhibition
Oct.	125	Czech Avant-Garde Book Design 1920s-'30s Exhibition
Nov.	126	Graphic Wave 1996: Katsunori Aoki / Taku Satoh / Toshio Yamagata
Dec.	127	Alain Le Querrec Exhibition

1997

Jan.	128	Nisuke Shimotani Exhibition
Jan.		Special: CCGA-The Prints of Josef Albers
Feb.	129	Tadashi Ohashi Exhibition
Mar.	130	The 10th of Tokyo TDC Exhibition
Apr.	131	Masayoshi Nakajo Exhibition
May	132	Magazines Today Exhibition
Jun.	133	Tadanori Yokoo's Poster Exhibition
Jul.	134	'97 Tokyo ADC Exhibition
Aug.	135	Toshifumi Kawahara and Polygon Pictures Exhibition
Sep.	136	Mexican 10 Graphic Designers Exhibition
Oct.	137	Graphic Wave 1997: Kan Akita / Satoe Inoue / Osamu Fukushima
Oct.		Special: The 10th Anniversary of Masaru Katsumi Award Exhibition
Nov.	138	Shigeo Fukuda Exhibition
Dec.	139	Global Exhibition

1998

Jan.	140	8ro Art & AD Exhibition
Feb.	141	Odermatt + Tissì Exhibition
Mar.	142	Stasys Eldridgevicius Exhibition
Apr.	143	Tokyo TDC '98 Exhibition
May	144	Studio Dumbar Exhibition
Jun.	145	Yoko Yamamoto Exhibition
Jul.	146	'98 Tokyo ADC Exhibition
Aug.	147	Yoichiro Kawaguchi Exhibition
Sep.	148	Graphic Wave 1998: Tatsuo Ebina / Keiko Hirano / Ken Miki
Oct.	149	Gunter Rambow Exhibition

Nov.	150	Philippe Apeloig Exhibition
Dec.	151	Herbert Leupin Exhibition

1999

Jan.	152	Furoshiki Graphics by 18 Designers from around the World exhibition
Feb.	153	Transition of Modern Typography in Japan 1946-95 Exhibition
Mar.	154	Tsunehisa Kimura Exhibition
Mar.		Special: The Works of Seiichi Horiuchi
Apr.	155	Tokyo TDC '99 Exhibition
May	156	Contemporary Bulgarian Graphic Design Exhibition
Jun.	157	Katsuhiko Hibino Exhibition
Jul.	158	'99 Tokyo ADC Exhibition
Jul.		Special: John Maeda One-line.com
Aug.	159	Kijuro Yahagi Exhibition
Sep.	160	Graphic Wave 1999: Mamoru Suzuki / Kei Matsushita / Hiroshi Yonemura
Oct.	161	Fuse Posters and Fonts Exhibition
Nov.	162	Keizo Matsui Exhibition
Dec.	163	Paul Davis Posters Exhibition
Dec.		Special: Irving Penn regards the works of Issey Miyake

2000

Jan.	164	Graphic Message for Ecology Exhibition
Jan.		Special: Kishin Shinoyama & Manuel Legris
Feb.	165	Bruno Monguzzi Exhibition
Mar.	166	Kenji Itoh Exhibition
Apr.	167	Tokyo Type Directors Club 2000
May	168	Poster Works Nagoya 12 Exhibition
Jun.	169	Osaka Pop Exhibition
Jul.	170	2000 Tokyo ADC Exhibition
Aug.	171	The Epoch of the JAAC Exhibition
Sep.	172	Graphic Wave 2000: Gugi Akiyama / Tycoon Graphics / Hideki Nakajima
Oct.	173	Tzotm Toda Exhibition
Nov.	174	Pierre Bernard Exhibition
Dec.	175	The Book & The Computer Exhibition

2001

Jan.	176	2001 Yasuhiko Kida Exhibition
Feb.	177	Italo Lupi Exhibition
Mar.	178	Shin Matsunaga Exhibition
Apr.	179	Tokyo Type Directors Club 2001
May	180	Kontrapunkt Exhibition
Jun.	181	Typography of Hiromu Hara Exhibition
Jul.	182	2001 Tokyo ADC Exhibition
Aug.	183	Tadahito Nadamoto Exhibition
Sep.	184	Graphic Wave 2001: Katsuhiko Shibuya / Kazufumi Nagai / Kozue Hibino
Oct.	185	Hangul Poster Exhibition
Nov.	186	Makoto Saito Exhibition
Dec.	187	Chip Kidd Exhibition

2002

Jan.	188	Uwe Loesch Exhibition
Feb.	189	Akira Uno Exhibition
Mar.	190	Design Education: Post-St. Joost's New Method
Apr.	191	Tokyo Type Directors Club 2002
May	192	Draft Exhibition
Jun.	193	Alan Chan Exhibition
Jun.		Special: Yasuji Hanamori and Kurashi-no-Techo Exhibition
Jul.	194	2002 Tokyo ADC Exhibition
Aug.	195	Noriyuki Tanaka Exhibition

Sep. 196 Graphic Wave 2002:Hitomi Sago /
Yasuhiro Sawada / Norito Shinmura
Oct. 197 Sun-ad:The People Exhibition
Nov. 198 Graphic Shows Brazil Exhibition
Dec. 199 Herb Lubalin Exhibition

2003

Jan. 200 Ikko Tanaka Exhibition
Feb. 201 Sadik Karamustafa Exhibition
Mar. 202 Contemporary Chinese Graphic
Design Exhibition
Apr. 203 Tokyo Type Directors Club 2003
May 204 Fabrica 1994-03 Exhibition
Jun. 205 Hajime Sorayama Exhibition
Jul. 206 2003 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 207 Minoru Nijima Exhibition
Sep. 208 Graphic Wave 2003:Kenjiro Sano /
Nagi Noda / Kazunari Hattori
Oct. 209 Takayuki Soeda Exhibition
Nov. 210 Stefan Sagmeister Exhibition
Dec. 211 Takashi Kono Exhibition

2004

Jan. 212 Kazumasa Nagai Poster Exhibition
Feb. 213 Keiji Ito / Hiroki Taniguchi /
Hiro Sugiyama Exhibition
Mar. 214 The Magazine Design Studio Cap
Exhibition
Apr. 215 Tokyo Type Directors Club 2004
May 216 Taku Satoh Exhibition
Jun. 217 Danish Posters Over
the Past 10 Years Exhibition
Jul. 218 2004 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 219 The Work of Barnbrook Design
Exhibition
Sep. 220 Graphic Wave 2004:
Aoshi Kudo / Graph / Namaiki
Oct. 221 A Half-Century of Magazine Design
by Kohei Sugiura Exhibition
Nov. 222 Kashiwa Sato Exhibition: Beyond
Dec. 223 AnotherSideofAyao YamanaExhibition

2005

Jan. 224 The Seven Faces of Asaba Exhibition
Feb. 225 Balarinji Design Exhibition
Mar. 226 Katsunori Aoki XX Exhibition
Apr. 227 Tokyo Type Directors Club 2005
May 228 The Graphic Design of Makoto Wada
Jun. 229 Chermayeff & Geismar Inc. Exhibition
Jul. 230 2005 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 231 Masahiko Sato Laboratory Exhibition
Sep. 232 Graphic Wave 2005: Ichiro Tanida /
Ichiro Higashiizumi / Chie Morimoto
Oct. 233 Laboratoires CCCP Exhibition
Nov. 234 Shin Sobue + Cozfish Exhibition
Dec. 235 Swiss Poster Art Exhibition

2006

Jan. 236 Yusaku Kamekura 1915-1997 Exhibition
Feb. 237 Nagi Noda Exhibition
Mar. 238 Cyan Exhibition
Apr. 239 Tokyo Type Directors Club 2006
May 240 Kazufumi Nagai Exhibition
Jun. 241 Keiichi Tanaami-ism Exhibition
Jul. 242 2006 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 243 Alexander Gelman Exhibition
Sep. 244 Graphic Wave 2006:
Masayoshi Kodaira / Naomi Hirabayashi /
Manabu Mizuno / Eiji Yamada

Sep. Special: AGI Congress 2006 in Japan,
Kakejiku Exhibition
Oct. 245 Radical Advertisement Exhibition
Nov. 246 Hideki Nakajima Exhibition
Dec. 247 Yoshio Hayakawa Exhibition

2007

Jan. 248 Exhibitions (Part I)
Feb. Exhibitions (Part II)
Mar. 249 Katsu Kimura: Toi Boxes
Apr. 250 Tokyo Type Directors Club 2007
May 251 Helmut Schmid: Design is Attitude
Jun. 252 Masaaki Hiromura: 2D 3D
Jul. 253 2007 Tokyo Art Directors Club
Aug. 254 The Warsaw Wind 1966-2006
Sep. 255 Ginza Salone: Kenjiro Sano
Oct. 256 Shinya Nakajima TV Commercial
Exhibition
Nov. 257 Welcome to Magazine Pool
Dec. 258 Aoba Show:
Masuteru Aoba One-Man Show

2008

Jan. 259 Toda Today: Poster Art by Seiju Toda
Feb. 260 Testimonies from Twenty Pioneers
of the Graphic Design Era:
Interviews by Hiroshi Kashiwagi
Mar. 261 Textasy: Brody Neuenschwander
Apr. 262 Tokyo Type Directors Club 2008
May 263 Alan Fletcher: The Father of
British Graphic Design
Jun. 264 Hiroshi Sasaki,
Leader of a Cheering Squad
for the Japanese Advertising World
Jul. 265 2008 Tokyo Art Directors Club
Aug. 266 Now Updating... The Interactive
Design of THA/Yugo Nakamura
Sep. 267 The Design Cycle of Keiko Hirano:
Origin, Terminus, Origin
Oct. 268 White: Kenya Hara Exhibition
Nov. 269 M/M(Paris) The Theatre Posters
Dec. 270 OYKOT Wieden + Kennedy Tokyo:
10 Years of Fusion

2009

Jan. 271 Brilliant Rivalry:
Works by Outstanding Designers in
the DNP Archives of Graphic Design
Feb. 272 Helvetica forever: Story of a typeface
Mar. 273 Draft: Branding and Art Directors
Apr. 274 Tokyo Type Directors Club 2009
May 275 Kijuro Yahagi:
Magnetic Vision / 100 New Works
Jun. 276 Max Huber - a Graphic Designer
Jul. 277 2009 Tokyo Art Directors Club
Aug. 278 Hosoya Gan Last Show: Exhibition of
an Art Director & Graphic Designer
Sep. 279 Tadahito Nadamoto, Akira Uno,
Makoto Wada and Tadanori Yokoo Show
Oct. 280 Toshio Yamagata Exhibition
Nov. 281 Issay Kitagawa
Dec. 282 Kokoku Hihyo:
End of One Era, Start of Another

2010

Jan.-Feb. 283 DNP Graphic Design Archives Collection II
Ikko Tanaka Posters 1953-1979
Mar. 284 DNP Graphic Design Archives Collection III
Shigeo Fukuda's Visual Jumping

Apr. 285 Tokyo Type Directors Club 2010
May 286 Talking the Dragon:
Tsuguya Inoue Exhibition
Jun. 287 NB@ggg: Neville Brody 2010
Jul. 288 2010 Tokyo Art Directors Club
Aug. 289 Ralph Schraivogel
Sep. 290 Push Pin Paradigm:
Seymour Chwast | Paul Davis |
Milton Glaser | James McMullan
Oct. 291 Seas and Mountains and
Norito Shinmura
Nov. 292 Kazunari Hattori: November 2010
Dec. 293 The Euphrates Exhibition:
From Research to Expression

2011

Jan. 294 Shueitai 100
Feb. 295 Ian Anderson / The Designers Republic
C(H-)ōme (+81/3)
Mar. 296 Design I Fumio Tachibana



1992-2011

1992

Jan.	1	Trans-Art '91 Exhibition
Mar.	2	Ivan Chermayeff Exhibition
Apr.	3	The 4th Tokyo TDC Exhibition
May	4	Rick Valicenti Exhibition
Jun.	5	Seymour Chwast Exhibition
Jul.	6	Design Print & Paper Exhibition
Aug.	7	Vaughan Oliver Exhibition
Oct.	8	Makoto Nakamura Exhibition
Oct.	9	Michael Mabry Exhibition
Nov.	10	Tadahito Nadamoto, Akira Uno, Makoto Wada, Harumi Yamaguchi Exhibition

1993

Jan.	11	Furoshiki Exhibition
Feb.	12	Why Not Associates Exhibition
Mar.	13	Allen Hori + Robert Nakata Exhibition
Apr.	14	'92 Tokyo ADC Exhibition
May	15	Russell Warren-Fisher Exhibition
Jun.	16	The 5th Tokyo TDC Exhibition
Jul.	17	Imagination of Letters Exhibition
Aug.	18	Design, Prints, Paper Exhibition Part II
Sep.	19	Bill Thorburn Exhibition
Oct.	20	U.G. Sato Exhibition
Nov.	21	Mitsuo Katsui Exhibition
Dec.	22	8 Designers in Today's Hong Kong

1994

Jan.	23	Saul Bass Exhibition
Feb.	24	Pop-up Greetings Exhibition
Mar.	25	Ruedi Baur/Integral Concept Exhibition
Apr.	26	Yosuke Kawamura, Nobuhiko Yabuki, Teruhiko Yumura, Mizumaru Anzai Exhibition
May	27	Jennifer Morla Exhibition
Jun.	28	Kazumasa Nagai Exhibition
Jul.	29	Uwe Loesch Exhibition
Aug.	30	'94 Tokyo ADC Exhibition
Sep.	31	Design, Print, Paper Exhibition Part III
Oct.	32	David Carson + Gary Koepke Exhibition
Dec.	33	Yusaku Kamekura Exhibition

1995

Jan.	34	German Montalvo Exhibition
Feb.	35	Bruno Munari Exhibition
Mar.	36	Grappa Design Exhibition
Apr.	37	The 7th Tokyo TDC Exhibition
May	38	Michel Bouvet Exhibition
Jun.	39	Ikko Tanaka Exhibition
Jul.	40	Terrelonge Exhibition
Aug.	41	'95 Tokyo ADC Exhibition
Sep.	42	Design, Print, Paper Exhibition IV
Oct.	43	Peret Torrent Exhibition
Nov.	44	6 Designers in Asia Exhibition

1996

Jan.	45	Illustration in Japan 1946-1995 Exhibition
Feb.	46	Margo Chase Exhibition
Mar.	47	Werner Jeker Exhibition
Apr.	48	Gunter Rambow Exhibition
May	49	The 8th Tokyo TDC Exhibition
Jun.	50	Kari Piippo Exhibition
Jul.	51	Contemporary Graphics in Hungary Exhibition
Aug.	52	'96 Tokyo ADC Exhibition
Sep.	53	John Maeda Paper and Computers Exhibition

Oct.	54	Alain Le Querrec Exhibition
Nov.	55	Woody Pirtle Exhibition

1997

Jan.	56	João Machado Exhibition
Feb.	57	K2 Osaka Exhibition
Mar.	58	Graphic Design in China Exhibition
Apr.	59	'97 Tokyo TDC Exhibition
May	60	Mexican 10 Graphic Designers
Jun.	61	Cato Design Inc. Exhibition
Jul.	62	'97 Tokyo ADC Exhibition
Aug.	63	Ralph Schraivogel Exhibition
Oct.	64	James Victore Exhibition
Nov.	65	Global Exhibition

1998

Jan.	66	Faydherbe/De Vringer Exhibition
Feb.	67	Jean-Benoît Lévy Exhibition
Mar.	68	3 Dimensions of Russian Graphic Design Exhibition
Apr.	69	Philippe Apeloig Exhibition
Jun.	70	Tokyo TDC '98 Exhibition
Jul.	71	Studio Dumber Exhibition
Aug.	72	'98 Tokyo ADC Exhibition
Sep.	73	Zafryki Exhibition
Oct.	74	David Tartakover Exhibition
Nov.	75	Taiwan 4 Exhibition

1999

Jan.	76	Furoshiki Graphics by 18 Designers from around the World Exhibition
Feb.	77	Pierre Neumann Exhibition
Mar.	78	Paula Scher Exhibition
May	79	Graphic Design from Hamburg Exhibition
Jun.	80	Tokyo TDC '99 Exhibition
Jul.	81	Jan Rajlich Jr. Exhibition
Aug.	82	'99 Tokyo ADC Exhibition
Sep.	83	Scott Makela Exhibition
Oct.	84	Chaz Maviyane-Davies Exhibition
Nov.	85	2 Men from Macau Exhibition
		Ung Vai Meng / Victor Hugo Marreiros

2000

Jan.	86	Graphic Message for Ecology Exhibition
Feb.	87	Keizo Matsui Exhibition
Mar.	88	Paul Davis Posters Exhibition
Apr.	89	Osaka Pop Exhibition
May	90	Tokyo Type Directors Club 2000
Jun.	91	Anthony Beeke Posters Exhibition
Jul.	92	Pierre Bernard Exhibition
Sep.	93	2000 Tokyo ADC Exhibition
Oct.	94	Italo Lupi Exhibition
Nov.	95	Design Education: The Classroom Approach of Holger Matthies, Berlin University of the Arts

2001

Jan.	96	2001 Yasuhiko Kida Exhibition
Feb.	97	Kontrapunkt Exhibition
Mar.	98	Poster of Salzburg Festival Exhibition
May	99	Tokyo Type Directors Club 2001
Jun.	100	Chip Kidd Exhibition
Jul.	101	Hangul Poster Exhibition
Aug.	102	2001 Tokyo ADC Exhibition
Sep.	103	Wolfgang Weingart Exhibition
Oct.	104	Shin Matsunaga Exhibition
Nov.	105	Design Education II: Post-St. Joost's New Method

2002

Jan.	106	Tadahito Nadamoto Exhibition
Feb.	107	Makoto Saito Exhibition
Mar.	108	Ott + Stein Exhibition
Apr.	109	Studio Tapiro Exhibition
May	110	Tokyo Type Directors Club 2002
Jul.	111	Posters from the Vienna Municipal Library Archive Exhibition
Jul.	112	Ken Miki Exhibition
Sep.	113	2002 Tokyo ADC Exhibition
Oct.	114	Sadik Karamustafa Exhibition
Nov.	115	Chinese Graphic Design Exhibition

2003

Jan.	116	San-ad :The People Exhibition
Feb.	117	Ikko Tanaka Exhibition
Mar.	118	Fabrica 1994-03 Exhibition
Apr.	119	Kan Tai-Keung and Freeman Lau Exhibition
Jun.	120	Tokyo Type Directors Club 2003
Jul.	121	Luba Lukova Exhibition
Aug.	122	2003 Tokyo ADC Exhibition
Sep.	123	Stefan Sagmeister Exhibition
Oct.	124	Cultural Posters from the Collection of Die Neue Sammlung München Exhibition
Nov.	125	Hajime Sorayama Exhibition

2004

Jan.	126	Takayuki Soeda Exhibition
Feb.	127	Kazumasa Nagai Poster Exhibition
Mar.	128	Danish Posters Over the Past 10 Years Exhibition
Apr.	129	The Magazine Design Studio CAP Exhibition
May	130	Tokyo Type Directors Club 2004
Jun.	131	Pierre Mendell Exhibition
Aug.	132	2004 Tokyo ADC Exhibition
Sep.	133	The Work of Barnbrook Design Exhibition
Oct.	134	Posters from the Museum of Decorative Arts in Prague Exhibition
Nov.	135	Balarinji Design Exhibition

2005

Jun.	136	A Half-Century of Magazine Design by Kohei Sugiura Exhibition
Feb.	137	Cyan Exhibition 13 Years in Berlin
Mar.	138	Kashiwa Sato Exhibition: Beyond
Apr.	139	Mevis & Van Deursen Exhibition
May	140	Tokyo Type Directors Club 2005
Jun.	141	Laboratoires CCCP Exhibition
Aug.	142	2005 Tokyo ADC Exhibition
Sep.	143	Katsunori Aoki XX Exhibition
Oct.	144	German AGI Graphic Design Exhibition
Nov.	145	The Graphic Design of Makoto Wada

2006

Jan.	146	Swiss Poster Art Exhibition
Feb.	147	Graphic Thought Facility Exhibition
Mar.	148	Nagi Noda Exhibition
Apr.	149	Bruno Oldani Exhibition
May	150	Tokyo Type Directors Club 2006
Jun.	151	Black and White Posters Exhibition
Aug.	152	2006 Tokyo ADC Exhibition

2007

May	153	Exhibitions
-----	-----	-------------

Jun.	154	Tokyo Type Directors Club 2007
Aug.	155	Helmut Schmid: Design is Attitude
Oct.	156	2007 Tokyo Art Directors Club
Nov.	157	Katsu Kimura: Toi Boxes

2008

Jan.	158	Welcome to Magazine Pool
Feb.	159	Ginza Salone Osaka: Kenjiro Sano
Apr.	160	Shinya Nakajima TV Commercial Exhibition
Jun.	161	Tokyo Type Directors Club 2008
Aug.	162	Now Updating... The Interactive Design of THA/Yugo Nakamura
Sep.	163	2008 Tokyo Art Directors Club
Oct.	164	Aoba Show: Masuteru Aoba One-Man Show
Nov.	165	Truth And / Or Virtue: Graphic Designs by Shinnoske Sugisaki and Yoshimaru Takahashi

2009

Jan.	166	Helvetica forever: Story of a Typeface
Mar.	167	Brilliant Rivalry: Works by Outstanding Designers in the DNP Archives of Graphic Design
Apr.	168	Draft: Branding and Art Directors
Jun.	169	Tokyo Type Directors Club 2009
Aug.	170	2009 Tokyo Art Directors Club
Oct.	171	Kijuro Yahagi: Magnetic Vision 60/100 New Works

2010

Jan.	172	Graphic West 2: Sensory Boxes
Mar.	173	Issay Kitagawa
May	174	Tokyo Type Directors Club 2010
Jul.	175	DNP Graphic Design Archives Collection III Shigeo Fukuda's Visual Jumping
Sep.	176	2010 Tokyo Art Directors Club
Nov.	177	DNP Graphic Design Archives Collection II Ikko Tanaka Posters 1953-1979

2011

Jan.	178	GRAPHIC WEST 3 phono/graph-sound-letters-graphics-
------	-----	--

1995-2010

1995

Apr.-Jul. Graphic Vision Kenneth Tyler
Retrospective Exhibition: Thirty Years
of Contemporary American Prints
Aug.-Oct. Lichtenstein: Entablature→Nudes
Nov.-Jan. The Prints of Robert Motherwell

1996

Mar.-Apr. American Prints Today:
1st Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection
Apr.-Jul. The Prints of David Hockney
Jul.-Oct. Autonomous Color: Josef Albers
Oct.-Jan. Transcending Style:
2nd Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection

1997

Mar.-Apr. The Graphics of James Rosenquist
Jun.-Sep. Printed Abstraction:
3rd Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection
Oct.-Nov. Shinro Ohtake: Printing / Painting
Dec.-Jan. Line-Color-Image:
4th Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection

1998

Mar.-May Frank Stella and Kenneth Tyler:
A Unique 30-Year Collaboration
May-Sep. Statements in Black:
5th Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection
Sep.-Dec. Alan Shields: Images in Paper

1999

Mar.-May Miran Fukuda New Works: Prints
Jun.-Sep. Forms That Speak:
6th Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection
Sep.-Dec. The Story of Prints

2000

Mar.-May New Works 1998-1999:
7th Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection
May-Jul. Saburo Ota: Existence and Everyday
Aug.-Oct. DNP Archives of Graphic Design
Inaugural Exhibition:
Poster Graphics 1950-2000

2001

Mar.-May Invitation to Print Portfolios:
8th Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection
May-Jul. Tatsumi Orimoto: 1972-2000
Aug.-Oct. Yukio Fujimoto:
Reading to Another Dimension
2nd Exhibition of DNP Archives of
Oct.-Dec. Graphic Design: The Era of Graphic Design

2002

Mar.-Jun. Prints Leaping Into Space:
9th Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection
Jun.-Sep. Kijuro Yahagi: Touching, Piercing, and
Tracing with Vision
Sep.-Dec. 3rd Exhibition of DNP Archives of
Graphic Design: The Age of Individuality

2003

Mar.-Apr. Richard Gorman:
Paintings and Paper Works
Apr.-Jun. Paper as Color:
10th Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection
Jun.-Sep. Frankenthaler: The Woodcuts
Sep.-Dec. 11th Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection

2004

Mar.-Jun. The Golden Age of Illustration
Jun.-Sep. Password:
A Danish / Japanese Dialogue
Sep.-Dec. Print Art of Today in Fukushima

2005

Mar.-Jun. The World of Contemporary American
Woodcuts:
12th Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection
Jun.-Sep. Breathing Light: Shigenobu Yoshida
Sep.-Dec. decade – CCGA and Six artists

2006

Mar.-Jun. Painting on Stone:
13th Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection
Jun.-Sep. Masaki Fujihata:
The Conquest of Imperfection-
New Realities Created with
Images and Media
Sep.-Dec. Tetsuya Noda: Diary

2007

Mar.-Jun. The Wonder of Intaglio:
14th Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection
Jun.-Sep. Prints Given New Life:
15th Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection
Sep.-Dec. Unique Impressions:
16th Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection

2008

Mar.-Jun. Thick with Color:
17th Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection
Jun.-Sep. Big Prints, Small Prints:
18th Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection
Sep.-Nov. Monologues in Black:
19th Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection

2009

Feb.-Jun. Prints and Titles:
20th Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection
Jun.-Sep. Brilliant Rivalry:
Works by Outstanding Designers in
the DNP Archives of Graphic Design
Sep.-Dec. The Power of Red:
21st Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection

2010

Mar.-Jun. DNP Graphic Design Archives Collection II
Ikko Tanaka Posters 1953-1979
Jun.-Sep. Roy Lichtenstein:
22nd Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection
Sep.-Dec. DNP Graphic Design Archives Collection III
Shigeo Fukuda's Visual Jumping

DNP Foundation for Cultural Promotion

ギンザ・グラフィック・ギャラリー

開設 1986年3月4日
名称 ギンザ・グラフィック・ギャラリー（略称：ggg）
所在地 〒104-0061
東京都中央区銀座7丁目7番2号 DNP銀座ビル
Phone: 03-3571-5206
Fax: 03-3289-1389
開館時間 午前11時～午後7時（土曜午後6時まで）
休館 日曜日、祝日
監修 永井一正

dddギャラリー

開設 1991年11月5日
名称 dddギャラリー
所在地 〒550-8508
大阪府大阪市西区南堀江1丁目17-28 なんばSSビル
Phone: 06-6110-4635
Fax: 06-6110-4639
開館時間 午前11時～午後7時（土曜午後6時まで）
休館 日曜日、月曜日、祝日
監修 永井一正

CCGA 現代グラフィックアートセンター

開設 1995年4月20日
名称 現代グラフィックアートセンター（略称：CCGA）
所在地 〒962-0711
福島県須賀川市塩田宮田1
Phone: 0248-79-4811
Fax: 0248-79-4816
開館時間 午前10時～午後5時（入館は午後4時45分まで）
休館 月曜日（祝日・振替休日の場合はその翌日）、
祝日の翌日（土・日にあたる場合は開館）、
展示替え期間中、冬期（12月下旬～2月末）
入場料 一般＝300円、学生＝200円、
小学生以下と65歳以上および障がい者手帳をお持ちの方は無料。
サロン
利用料 200円

企画・運営 財団法人DNP文化振興財団
<http://www.dnp.co.jp/foundation>

ginza graphic gallery

Establishment: March 4, 1986
Name: ginza graphic gallery (ggg)
Location: DNP Ginza Building, 7-2 Ginza 7-chome,
Chuo-ku, Tokyo 104-0061
Phone: +81 3 3571 5206
Fax: +81 3 3289 1389
Opening Hours: 11:00am to 7:00pm (Until 6:00pm on Saturdays)
Closed on Sundays and Holidays
Adviser: Kazumasa Nagai

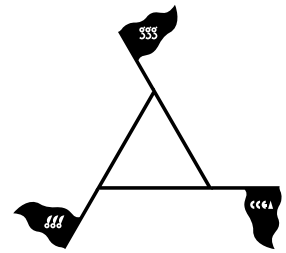
ddd gallery

Establishment: November 5, 1991
Name: ddd gallery
Location: Namba SS Building, 17-28 Minami-horie 1-chome,
Nishi-ku, Osaka 550-8508
Phone: +81 6 6110 4635
Fax: +81 6 6110 4639
Opening Hours: 11:00am to 7:00pm (Until 6:00pm on Saturdays)
Closed on Sundays, Mondays and Holidays
Adviser: Kazumasa Nagai

Center for Contemporary Graphic Art

Establishment: April 20, 1995
Name: Center for Contemporary Graphic Art (CCGA)
Location: Miyata 1, Shiota, Sukagawa-shi,
Fukushima 962-0711
Phone: +81 248 79 4811
Fax: +81 248 79 4816
Opening Hours: 10:00am to 5:00pm (Admission until 4:45pm)
Closed on Mondays (Tuesday if Monday is a public holiday),
the day immediately after a public holiday (except Saturday and Sunday),
between exhibitions and during winter (late December through February)
Admission: Adults=¥300, Students=¥200,
Free for young children (through elementary school), senior citizens (65 and over) and the disabled.
Salon Utilization Fee: ¥200

Planning and Operation: DNP Foundation for Cultural Promotion
<http://www.dnp.co.jp/foundation>



Graphic Art & Design Annual 10-11 ggg ddd CCGA

発行	財団法人DNP文化振興財団 〒104-0061 東京都中央区銀座7-7-2 DNP銀座ビル Phone: 03-5568-8224
企画・編集	ギンザ・グラフィック・ギャラリー
アートディレクション	松永 真
デザイン	松永 真次郎、清川 萌未
撮影	藤塚 光政 (ggg会場写真) 高嶋 清俊 (ddd: phono/graph展) 堺 亮太、阿部 章仁、高梨 光司 (gggギャラリートーク)
翻訳	室生寺 玲、オフィス宮崎
協力	臼田 捷治、河尻 亨一
印刷・製本	大日本印刷株式会社



財團法人DNP文化振興財團
DNP Foundation for Cultural Promotion

